
海に咲く闇の花

SOU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海に咲く闇の花

【Nコード】

N6413S

【作者名】

S O U

【あらすじ】

30男が戦国BASARAのお市になってONE PIECEの世界に転生。他者視点と主人公視点で温度差があります。勘違いとすれ違いと成り行き任せで進んでいく予定です。捏造設定、残酷表現が出てくるのでご注意下さい。【追記】裏（主人公視点）では、主人公の性格が悪い＋口が悪い（男言葉）です。

主人公設定（前書き）

注意書き代わりに主人公設定。
今後追記、変更があると思います。

主人公設定

イチ

- ・元は（自称）平凡な会社員だったが、気が付いたら戦国BASARAのお市になってONE PIECEの世界に転生していた
- ・前世の死因、転生理由に関する記憶はない
- ・ONE PIECE、戦国BASARAに関する知識有り

【年齢】

- ・7歳（海賊王処刑時） 29歳（原作開始時）
- ・スモーカーの5つ下、ヒナの3つ下、ハンコックと同年

【身長】

- ・120cm（7歳） 160cm（16歳）
- ・比較対象：ナミ169cm、たしぎ171cm、ルフィ172cm
- ・160だと低過ぎか？でもルフィより小さくしたい

3

【服装】

- ・淡い色（ピンクが多い）のミニスカワンピースに、見えないけれど短パン、膝下までのブーツ、オレンジグレータイターサンダル
- ・海軍将校になってからは特注の薄手のコート
- ・正義の文字は髪に隠れてほとんど見えない

【武器】

- ・双頭薙刀
- ・刃の部分が二重になっている薙刀
- ・左右に分割可能

【能力】

『黒い手』

戦国BASARAのものとは違うところもあります。

- ・ 悪魔の実（ネンネンの実）の能力ということにしてある
- ・ 死者の怨念が具現化したもの
- ・ 人間のものより指、爪が長く、鋭い
- ・ 2m弱〜30mまで大きさは自在
- ・ ただし大きくなるほど出せる本数が減る
- ・ 最大100本程度
- ・ 触れている人間の体力を吸い取る効果あり（本人は除く）
- ・ 攻撃、防御、拘束、自分の体を運ばせて移動、など汎用性が高い
- ・ 通常は自分の意思で動かしているが、無意識で動くこともある

4

『闇（地面の下？）を移動する能力』

- ・ 地面に吸い込まれるようにして消え、別の場所に現れる
- ・ ひどい乗り物酔い状態になる上、目的の場所に出られるとは限らないので滅多に使わないし使えない

『悪魔の実を感じ取る能力』

- ・ 悪魔の実そのものだけでなく、悪魔の実の能力者も近付くとわかる
- ・ 能力ごとの識別も可能
- ・ 本気を出せば半径5km以内の悪魔の実全ての居場所がわかる
- ・ 普段は半径50m程
- ・ 見聞色の覇気を使っていると誤解されることが多い

『戦極ドライブ』

戦国BASARAのものとは違うところもあります。

- ・武装色の覇気と同じ効果
- ・疲れるので長時間は使えない

『その他』

- ・覇気は使えない
- ・相手が悪魔の実の能力者でなくても、元々気配を探ることは得意
- ・自分の気配を消すのはもっと得意
- ・戦闘中は基本的に何も考えていないため、見聞色の覇気を使える人間でも読めない

【性格】

- ・基本は『オレ』
- ・黒い手を多用したり、精神に過負荷が掛かり過ぎると『お市』になる
- ・何もなくても段々『オレ』と『お市』の性格が混じり合っていく
- ・お市化しても戦国BASARA2 英雄外伝の長政ストーリーモード程度で留めたい

『オレ』

- ・時々超絶ネガティブになりながらも基本「まあいいか」で済ませる性格
- ・色々矛盾している
- ・自分の外見年齢性別を利用することに躊躇いはない
- ・割と打算的
- ・けれど狡猾と言うには抜けている
- ・意外とお人好しだったり
- ・嫌なこと、面倒なことは後回し、できる限り逃げる
- ・後回しにした方が面倒になるとわかりきっていることだけは最初

から真面目にやる

- ・ 貶すのは愛情の裏返しですよ？
- ・ 口数は少ないが内心いろいろ（ひどい事を）考えている
- ・ 人殺しに躊躇いはない
- ・ 傍観者希望だが野次馬根性とミーハー心により自分から首を突っ込んでいくことも
- ・ 現状に対して深刻になることはない

『お市』

- ・ 「これも市のせい・・・」が口癖の自虐的な性格
- ・ 怒ったり追い詰められたりすると魔王めいた残虐な性格になることも

・ 美貌を利用して部下を裏からコントロールしているのは、本当に無意識？

22話時点の懐き具合は

スモーカー>>ヒナ>サカズキ>>クザン>>ガープ

主人公設定（後書き）

お市の最大の特徴は「美脚」だと思っています。

捏造海軍設定（前書き）

本文中に出てくることをまとめただけです。
読まなくても問題はまったくありません。

今後追記、変更があると思います。

捏造海軍設定

【入隊可能年齢】

- ・本部（士官学校）：15歳
- ・支部（雑用から）：12歳
- ・ただし悪魔の実の能力者などは特例で年齢に関係なく入隊できる

【士官学校】

- ・所在地はマリンスフォード
- ・幅広い知識を持ったゼネラリストの育成のために設立された
- ・卒業生は良く言えばオールマイティ、悪く言えば器用貧乏
- ・影で『副官養成所』と呼ばれている
- ・全寮制であり3食は保証されている
- ・申請を出せばほとんどの武器が借りられる
- ・給与はないが、雑費として月1万ベリーが支給される

- ・元々は現役海兵のための専門学校であり、現在でも現役海兵を受け入れている
- ・完全な新兵だけでなく、支部から本部に移転してきた海兵の教育も兼ねている

・単位制

- ・3年以内に必要な単位を取った人間から卒業していく
- ・最短1年

- ・カリキュラムは座学メイン
- ・他の海兵に比べると拘束時間が短い
- ・これは「自分に適した訓練を」という意もある
- ・必修科目はなく、すべて選択科目
- ・やろうと思えば「その組み合わせじゃ何の役にも立たない」という科目だけでも卒業できる
- ・ただし選択した科目と成績は海兵である限り一生ついて回るので、バランス良くカリキュラムを組む人間がほとんど
- ・卒業する気がない人間は必要な物orやりたい物しか取らない

【仮配属制度】

- ・士官学校に通いながら実戦にも参加する
- ・悪魔の実の能力者、特殊な武術、武器を使う人間の訓練目的と、単純に人手不足を解消するために成績優秀者をスカウトする場合がある
- ・仮配属されると講義に出れなくなることが多くなるため、卒業率が下がる
- ・けれど仮配属は優秀だというステータスであるためと、仮配属中は月10万ベリーが給与として支給されるため断る人間は少ない
- ・卒業できなくてもそのまま仮配属先で引き取ってもらえるせいもある

第1片 始まりと終わり(1) side・Smoker(前書き)

第5片まででひとつの場面です。

長いので分割しています。

なんでこんなに長くなっただらう。。。。

第1片 始まりと終わり(1) side・Smoker

くいつと背中、というか腰の辺りの服を引かれた。
振り向く。

誰も居ない。

視線を下に向ける。

「げっ」

予想通りといえば予想通りの顔があった。

「ついてくんなつたただろうが！」

「・・・イチも行くの」

「駄目だ！処刑なんてガキの見るもんじゃねえ！」

「・・・お兄ちゃんだつて子供だもの」

「俺はいいんだよ！」

子供は子供でも、12歳の男と7歳の女じゃ全然違つ。

「いいから帰れ！俺は連れてかねえからな！」

「・・・」

イチは不満そうに頬を膨らませた。

「・・・いいもの。イチ、一人で行くから」

「つてちよつと待て！」

今この街は海賊や海兵、一般の見物客でごった返してんだぞ！？

「帰れつて言つてんだよ！」

「・・・いや」

ああもうっ！

イチは大人しそうな外見に反して、一度言い出したら聞かない。

「いいか。よく考える。この人混みだぞ？おまえなんか潰されて終わりだろうが」

「・・・お兄ちゃんもぺっちゃんこ」

「ぐ・・・」

確かに人が多過ぎて進めなくて困ってたんだが！

「・・・屋根の上を通ればいいわ」

「屋根の上？」

ウチの近くの家の屋根は、遊びや悪戯して逃げる時などに何度か通っているが、広場の近くは通ったことがない。

「・・・とはいえこのまま道を普通に進むのは無理そうだ。

「・・・通れないところがあつたら諦めろよ」

「・・・わかつたわ」

イチは俺の手を引いて、裏通りに回り込む。

雨樋を伝えれば屋上まで登れるだろう。

先に上つて下を覗き込む。

すぐにイチも登ってきた。

・・・黒い手に乗せられて。

やっぱり悪魔の実の能力って便利そうだな。

「?どうした？」

イチはきよろきよろと周りを見回していた。

「・・・うっん。なんでもないわ。きつと気のせいだったのね」

「?そうか」

屋根の上を飛び移って広場に向かう。

わりと距離が開いている場所もあったが、俺は当然イチも簡単に飛び移っている。

・・・重力無視した動きをしている気がするのは気のせいだろうか？
ふわりと、軽く飛んでいるようにしか見えないのに、5mくらいの距離を移動している。

「?今度はなんだ？」

イチはいきなり立ち止まり、また辺りを見回している。

「・・・誰かに見られているような気がしたの」
「は？」

「ここ屋根の上だぞ？」

「俺も周りを見るが、人なんてどこにもいない。」

「気のせいだろ」

「・・・そうね」

「イチは再び走り出す。」

「・・・相つ変わらず『ふわふわ』としか形容しようがない走り方なのに速い。」

「もしかして能力使ってるのか？」

「・・・着いたわ」

「広場のすぐ傍にある建物の屋上に着いた。」

「・・・これは結構いいかもしれない。」

「距離はあるが、ほぼ正面で処刑台の高さに近い。」

「実際に処刑される瞬間にはイチの目を塞がなきゃなんないが・・・。」

「・・・あ」

「イチが俺の背中にしがみ付く。」

「何事かと思い振り向けば、海賊？なのか？」

「やたら派手な格好をしたでかい男が同じ建物の屋根に登ってくるところだった。」

「・・・まずったかもな。」

「屋上に登るといふ選択肢があることを、他の奴らに知らせてしまった。」

「フッフッフ。そう怯えんな。なんもしねえよ」

「「「「「「「」」」」」」」」

「イチを庇うように位置を入れ替えるが、相手がもし海賊ならそんなことは無意味だろう。」

「なんもしねえって。今日この街じゃ戦いはご法度。処刑台に近こんな場所じゃ、すぐに海兵がすっ飛んで来やがる」
それは確かにそうだろう。

だがその前に俺達を殺すことくらい、簡単なはずだ。
・・・まあ、自分の命を賭けてまで俺達を殺す理由があるとは思えないが。

「フッフッフ。ちょっと前から見てたが、ガキのくせにたいした運動能力じゃねえか。特にそっちのお嬢ちゃん。空でも飛べんのかあ？」

「・・・見てたのかよ」

イチの感じた視線は、気のせいじゃなかったのか。

「フッフッフ。どうだ？二人とも俺の仲間になんねえか？俺あお買 い得だぜ？すぐに名を上げてやる」

「海賊になる気はねえよ」

「そりゃあ残念。お嬢ちゃんは？」

「・・・イチ、この街を出る気はないわ。パパとママがいるもの」

「あん？つまんねえなあ。一生この街にいるつもりか？小さな世界 だなあ」

余計なお世話だ。

「フッフッフ。。。まあ気が変わったら言えや。お嬢ちゃんならいつでも歓迎するぜ？いい女になりそうだしなあ？」

「・・・」

イチが俺にしがみ付く力が強くなった。

どうやらこの男が気に入らないらしい。

まともな価値観に安心した。

「・・・お？」

タンタンと、何人かの男が屋根に飛び乗ってくる。

・・・うげ。

全員海賊っぽい見掛けしてやがる。

まさかこの男の仲間か、と思ったが、男の反応からすると違つらしい。

嫌そうに顔をゆがめていた。

・・・敵か？

「こおんな海兵から良く見える場所で顔を晒すなんていい度胸だなあ？」

「テメエに言われる筋合いはねえよ」

「たとえそうでも、下の人混みよりはマシだ」

どうやら仲は良くないらしいが、それでもいきなり攻撃するほど悪いというわけでもないらしい。

「・・・あ、始まるわ」

「・・・」

おまえ本気でマイペースだな。

ぼんやりと突っ立っているようにしか見えないイチの視線を辿ると、男が処刑台に引き出されてきたところだった。

あれが海賊王、ゴールド・ロジャーか。

「・・・あの人、なんだか楽しそうね」

「はあ？これから処刑される奴だぞ」

楽しそうだなんて、そんなはず・・・。

「・・・」

ない、という言葉は声にならなかった。
笑った。

楽しそうに。

誇らしげに。

・・・なんなんだあいつは！

「おれの財宝か？欲しけりやくれてやるぜ。探してみる！この世の全てをそこに置いてきた！！」

わあ、といっせいに歓声上がる。

だがそんなことも気にならないほど、あの男の顔が脳裏に残っていた。

笑っていた。

最後の最後まで。

「……………」

「っ！…………イチ」

きゆうつと俺の服の裾を握り締めているイチを見て、ようやく我に返った。

しまった。

目を塞ごうと思っていたのに忘れていた。

「…………イチ、こわい。何か大きなものが、動き出そうとしているみたい」

それは時代が、動こうとしているという意味だろうか？

「……………。帰るぞ」

興奮した群集に巻き込まれる前に、家に帰った方がいい。

「フフ、フフフッ！なんだ帰んのかぁ？楽しくなんのはこれからだろうっ？」

「……………」

派手な男が道を塞ぐように両手を広げる。

「フッフッフ！面白え面白え面白え！！まさかこんなことになるとはなあ。最後の最後まで楽しませてくれるぜ」

楽しげに笑う男を警戒しつつ、下に視線を向ける。

……相変わらず人がひしめき合っている。

下敷きにせずに飛び降りるのは無理だろう。

イチの能力を使えばできるかもしれないが、そうすると余計めんど

くさいことになりそうだ。

「やめんか。こんな子供相手に何をしている」

「お？・・・フフフ。おまえが口出しするとは、めずらしいこともあるもんだなあ？」

派手な男を止めたのは、黒っぽい服装の金色の目が特徴的な男。

おそらくは剣士で、まだまともな性格をしているらしい。

目で『行け』と合図される。

イチの腕を掴んで、走り出す。

・・・もう一人の男は、無言でそれを見つめていた。

第1片 始まりと終わり(1) side・Smoker(後書き)

人混みに混じっている砂鰐、鷹、桃鳥が想像できなかつたので屋根に登ってもらいました。

キャラの一人称は「おれ」ですが、小説だとわかりづらいので「俺」にしています。

はじめまして。

この作品が初投稿となります。

一つの話が長く、また不定期更新となりますが、おつきあいただければ幸いです。

ちなみにサブタイトルは「くひら」で「裏」と付くものが主人公視点になります。

第2片 始まりと終わり(2)

side・Kuzan

まーったく、最後の最後まで面倒事増やしてくれるよね。
内心愚痴りながらも、走るスピードは緩めない。

処刑の前に余計なことを言ってくれた海賊王のおかげで、見物に集まっていた海賊達が妙に浮き足立っている。

そこらじゅうで揉め事が起こっているおかげで、普段より大幅に増員された海兵でも対処が追いつかない。

俺もそこら中を走り回されている。
それでも海軍本部中将だつてのに。

ローグタウンに派遣された海兵は、中将3名以下海軍本部士官が約100名。

多過ぎ、と最初は思っていたが、こうなると少な過ぎだ。

ちなみに元帥と大将がいない理由は、本部のあるマリンフォードからローグタウンが遠過ぎるからだ。

表向きは。

実際のところは戦力を手放すのを嫌がった天竜人が許可を出さなかつたというのが正しい。

ま、『遠過ぎる』っていう理由は本当なんだけどね。
なにせほぼ世界の反対だ。

・・・と。

やあっと見えてきた。

『子供が屋根の上で海賊らしき男達に追いかけている』という通報があつて、目立つ場所であり被害者が子供だということで俺に回された。

ようはとつとと解決しろつてこと。

・・・しかしこの子供達、異様に運動神経いいね。
12、3歳の男の子と5、6歳の女の子んだけど、20人くらい
の大人に囲まれて逃げ続けている。
ま、海賊の側に傷付ける気がないのが一番の理由だろうけど。

「つこの！うるちよろするんじゃねえ！！」

「じゃあ追い掛けて来るんじゃねえよ！！」

屋根の上をびよんぴよん飛び移って海賊から逃げ続けている。
ちよ。

俺も追いつけないんだけど？

・・・本気出さなきゃかなあ。

「こつのクソガキ！！」

「お兄ちゃん！！」

キレたらしい海賊の一人が銃を撃ち放す。

それはなんの偶然か少年の頭にちょうど当たる軌道で・・・。
ヤバイ！

「・・・え？」

全速で移動し、少年を抱え込んで伏せさせる。

は、いい。

ポカンと現状が把握できていないような顔をしている少年も、まあ
いい。

問題は俺達の目の前で銃弾を受け止めた黒い手だ。

屋根から直接生えているそれは、奇妙な禍々しさを感じさせる。
悪魔の実の能力者？

いったい誰の・・・。

「・・・踊れ」

ぼそりと、女の子が顔に似合わない低い声で呟いたと思ったら、い
きなり屋根から無数の黒い手が現れる。

その手は海賊達を一人残らず薙ぎ払い、屋根から叩き落した。

「・・・やりすぎだ、イチ」

「・・・知らない」

「ってこれやったの女の子!？」

「・・・とりあえず君達、支部まで来てね」

なんか面倒なことになりそうだなあ。

「だからっ、俺達は追いかけたただけだっつってんだろっが!」

「だからなんで追いかけてたのよ?」

「知らねえよ!仲間になれとかなんとか!なんでんなこと言い出したのかはあいつらに聞けよ!」

きゃんきゃん噛み付いてくる少年と、ぼーっとしているだけに見える女の子。

どうやら彼らは海賊の勧誘を受けていたらしい。

・・・なんで?

「まあそれはどうでもいいんだけど。それより、なんであの黒い手でさっさと追い払わなかったわけ?」

「そうすればすぐに片がついただろうに。」

「あのなあ。イチを海賊にしたがってる奴に能力見せてみるよ。余計めんどくさくなるに決まってるじゃねえか」

「そりゃそうだ」

あれ?

「てことはこの女の子が能力者だって知らないのに仲間になろうとしてたわけ?」

この子達どうしようかなあと思ってたら、支部の人間が来た。ていうか俺が呼んだんだけど。

「あ、おっさん」

「・・・やっぱりまたおまえ達か、スモーカー」

「『また』?」

「はあ・・・。クザン中将、ちよつとすみません」

支部の軍曹は俺に断ると、少年に向き直った。

「おまえな、正義の味方ごっこもいい加減にしるよ。たまたま今まで無事だったからよかったようなものの、海賊の中には凶暴な奴も卑怯な奴も居るんだぞ。イチちゃんが怪我でもしたらどうするんだ?」

「今回は違えよ。何もしてねえのに追っかけてきたんだ」

「え?違つのか?」

「ちよつとちよつと。今回『は』って何よ?」

まさか普段から海賊相手に立ち回ってたり・・・。

「こいつ、ガキ共集めて海賊退治とかやってるんですよ。退治つつか気絶させてその辺ほっぽりだしてくんで海兵が回収してるんですが・・・」

「・・・」
「するのによ。」

「あのなあ。言つとくけど俺は勝てる自信がなきゃ仕掛けねえぞ。」

俺はともかく、イチや他のガキ共に怪我させられるかよ」

「いやおまえ本気で何やってんの」

子供の遊びにしちゃあ危険過ぎだ。

「・・・さっきの奴らもおまえから手え出したわけ?」

「んなわけねえだろうが。俺だって自分の実力くらいわかってるよ。最弱の東の海でうるちよろしてるようないつもの奴らと違って、今集まってるのはカームベルト越えたりグランドライン逆走してきたりしている奴等だ。今の俺じゃ手も足も出ねえよ」

「・・・」

それが判断できる時点で普通の子供じゃないんだけどね。

か？支部は12歳から入れますよ。・・・最初は雑用ですけど」「げ」

あ、この少年絶対15歳まで入らないわ。

にしても、この街の子だろうくに海賊じゃなくて海軍を選ぶんだね。

海賊王の生まれた街なのに。

・・・海賊王の生まれた街、だからこそか。

グランドラインに入る海賊が集まる場所だし、ね。

「そつちのお嬢ちゃんも？」

本題はこつち。

悪魔の実の能力者は、なるべく海軍で困っておきたい。

ほんの少しだけ張り詰めた空気に気付いたのか、支部の奴と少年が緊張したのがわかった。

「・・・お嫁さん」

「は？」

「・・・イチ、大きくなったらお嫁さんになるの」

「「「「・・・」」」」

軽く頬を染めて恥ずかしそうに俯く姿はめちやくちや可愛い。

が、緊張が一気にぶち壊された。

・・・まあこのくらい小さな女の子なら普通の反応なのかもしれないけど。

「・・・そ。がんばってね」

それ以外に言える言葉は、ない。

第2片 始まりと終わり(2) side・Kuzan(後書き)

士官学校、海軍の入隊年齢は捏造です。

実際には自分の隊を持っている士官が許可を出せば何歳でも入れそうです。今後の布石のために。

第3片 始まりと終わり・裏(1)(前書き)

主人公視点なのでいきなりテンションが変わります。

第3片 始まりと終わり・裏(1)

戦国BASARAのお市になってONE PIECEの世界に転生しました。

・・・なんでやねん！と思わず関西人でもないのにツッコミを入れてしまった。

心の中でだけど。

体に引き摺られてんのか、あんまり大声が出せないというか興奮できないというか気がつくとかネガティブになっているというか・・・。気を抜くと『・・・これもみんなイチのせい』とか口走りそう怖い。

元の性格もわりと残ってただけどね？

元っていうか前世？

前世のオレはごく普通のサラリーマンでした。

少なくともオレの主観では。

多少つつーかかなりインドア派でゲームやマンガやネットが好きだったりしたが。

だからといって友達がいなくても会社の付き合いがなかったわけでもない。

引き籠もれるもんなら引き籠もりたいとか金があったら会社なんてやめてやるとは思っていたが。

だからってなんで転生トリップ？

オレ死んだわけ？

・・・そこらへんの記憶がまったくない。

幼少期の記憶も曖昧なのは救いだが。

赤ん坊の記憶とかあったら羞恥で死ぬる。

女の体にあんまり抵抗無いのは、体に引き摺られているからかまだ

子供だからか……。

まあそんなわけで、気がつくとお市になっていました。

正確には『お市』じゃなくて『イチ』なんだけどね。

ちゃんと両親もいる。

母親はお市をちよつと地味にしたような感じでまだ若くて美人。

父親はなんか優しそうとしか言い様がない顔立ち。

お似合いの夫婦だろう。

ちなみに二人で宿屋兼飯屋みたいなのをやっている。

夜になると酒場にもなるタイプの店である。

グランドラインの入り口でそんなことやってて大丈夫かなあ？と最初は思ったけど、父親は優男な外見に反して結構強かった。

『本より重いものは持ったことがあります』な顔して大の男を殴り飛ばしているのはものすごい衝撃でした。

まあ、『海兵で言うなら軍曹レベル』程度の実力らしいけどね。

そんな父親と、人妻であっても美人な母親目当てに海兵の客が来たりするので、海賊が来てもなんとかなっている。

そもそも強い海賊ほど、一般人には手を出さないものらしいしね。

特に飲食店関係には。

……食事や酒を売る人間というのは、海賊にとって重要らしい。

そんなわけで両親は仲良く共働き。

オレはわりとほっとかれている。

たぶん大人しくて手が掛からないからほっといてもいいと思われたんだろう。

……うん、さすがに30過ぎて子供みたいな我が儘は言えないからね。

一人でふらふらしているオレを見兼ねたのが、近所のガキ大将であるスモーカー。

・・・この時点でONE PIECEの世界だと気付いた。いや薄々気付いてはいたんだけど。

『イーストブルーのローグタウン』だとか『グランドライン』だとか海賊と海軍とか賞金首とか。

ワンプっぱいなあととは思っていたのだ。

決定的だったのがスモーカー。

子供に『喫煙家』なんていう名前を付ける親は、ONE PIECEの世界以外にいまい。

さすがに子供のうちから煙草や葉巻を吸ったりはしていないが、白髪だし目付き悪いしで将来の面影はある。

今はただのガキ大将だけだね。

ちなみにBASARAのお市の体つつか能力だと気付いたのは、転びそうになった時に無意識で黒い手で体を支えていたからである。

無意識怖え。

まあまだ救いなのは、このローグタウンでは悪魔の実自体が知られていて、なおかつ印象が悪くないことである。

グランドラインの入り口ってことで、東の海の支部なのに能力者の海兵がいるんだよね。

その人が活躍しているおかげで『悪魔の実の能力者』強い海兵』みたいなイメージがある。

だから黒い手がバレた時もそれほど騒ぎにならなかった。

・・・言うておくが、黒い手がバレたのはオレの不注意つか無意識ではない。

スモーカーのせいだ。

正確にはスモーカーではなく他の仲間というか子分達だが。

スモーカーをリーダーに、子供達だけで海賊退治をやり始めたのだ。

最初は小さい子が乱暴された仕返しという大義名分があったのと、戦法がいわゆるヒット&アウェイ、いきなり攻撃して逃げるといった方法だったので黙って見ていた。だがそのうち、スモーカーは冷静だったが他の子供達が調子に乗った。

分不相応な相手に手を出し、しかもそいつらは子供相手だろうと平然と殺す奴らだった。

それで最終手段黒い手。

子供達は無事だったがオレの能力がバレた。

基本的に反応は『すげー!!』で終わった。

まあ見た目がアレなんで屈託がある奴らもいたが、『子供達だけの秘密』みたいな感じになると態度が変わった。

・・・単純。

ちなみに先走って危険な目にあつた奴らはスモーカーに『お説教』されていた。

そのせいなのか共通の秘密を抱えているせいか、その日から子供達の統率が桁違いに良くなった。

・・・とりあえず気にしないようにしよう。

どうでもいいが、オレは悪魔の実の能力者ではない。

実は泳げたりする。

・・・ま、これは誰にも知らせてないけど。

ここで困ったのが悪魔の実の名前と、どうやって手に入れたのか。手に入れた方法は『覚えていない』で押し通しているが、どうも悪魔の実というのは食った人間にはその名前がわかっているものらしい。

ヤミヤミとかカゲカゲとかヨミヨミとか、すでにあるものの名前し

か思いつかねえ・・・。

ククロ（黒）とマノマノ（魔の）とどっちがマシだろう？思いつ
つネンネンの実と口走っていた。

・・・怨念の『ネン』だったりするのか？

無意識で行動するとたいてい何とかなっているのはお市の体だから
なのか・・・。

まあそんなことがあって、オレのポジションは副リーダーっぽかっ
たりする。

基本的にスマーカーが一人で決めて頑張ってくれているので、オレ
は後ろで見てるだけ。

いざという時の最終手段でしかない。

あんまり能力使いたくないしね。

・・・使くと結構疲れるんだよ。

いつペン背中に大量の黒い手を生やして上昇！とかやってみて実際
にできて感動したんだけど、3mくらい浮かんだところで力尽きた。
時間にするなら5秒が限界。

飛ぶのは無理、つか大きな黒い手伸ばしてその上に乗ってる方が楽。
ゲーム中でも見た目的に気に入っていたが、いまいち使いどころな
かったしなあ。

オレが下手だっただけかもしれないけど。

まあ前世の話はさておき、チートっぽい能力を手に入れたにも関わ
らず、体力ないおかげで使いこなせていなかったりする。

成長すれば使えるようになるかなあ？

第3片 始まりと終わり・裏(1) (後書き)

時々超絶ネガティブになりつつも、基本的に「まあいいか」で済ませる主人公です。

イチの服装は基本、淡い色のミニスカワンピース、ほとんど隠れているけど短パン、膝下までのブーツorグラディエーターサンダル、です。

第4片 始まりと終わり・裏(2)

やってきましたー大イベント！

やっぱONE PIECEファンなら海賊王の処刑は外せないだろう！

しかもローグタウンにいるのに！

内心の興奮を押し隠しつつ、こっそりと部屋から抜け出る。

さすがに放任気味の両親でも、海賊を含めた観光客が大量にあふれている最近の家（兼宿屋）から出してくれない。

普通に抜け出してるけどな！

この時間帯なら昼寝してると思って様子見には来ないだろう。

とてととと、やたら可愛らしい足音とは裏腹に結構なスピードで広場に向かう。

なんでこの走り方で速いのか不思議だ……。

……しかし本気で人が多いな。

出てくるの遅かったか……。

ぷちっといきそう、というより人の壁が厚くて入り込めない。

足元抜けていくのもやろうと思えばできるだろうが、知り合いに見つかったら引き留められる。

処刑、しかも斬首なんて、いくらこの世界でも子供の見るもんじゃないからね。

となるとやっぱ屋根の上か……。

……あ、スモーカーつか白い頭の子供発見。

スモーカーもこの人混みで進めないらしい。

……あれ？

スモーカーって海賊王の処刑見たんじゃないっけ？
この位置じゃどう考えても見えないんだけど……。
しかたない。
連れてくか。

くいつとスモーカーのシャツを引っ張る。

スモーカーは後ろを向き、一拍置いてから視線を下げた。
なんかムカつくな！

「ついてくんなつただろうが！」

ああそっぴや言われてたね。

スモーカーの小言は基本無視なので忘れていたが。

「……イチも行くの」

「駄目だ！処刑なんてガキの見るもんじゃねえ！」

テメエもガキだろうが。

いつもはじいつと見上げているとそのうちスモーカーが折れるのだが、今回ばかりは折れる気はないらしい。

今の内だけだ。

「……いいもの。イチ、一人で行くから」

「ってちよつと待て！」

スモーカーは基本的に面倒見が良過ぎるのである。

ぐしゃぐしゃと髪を掻き回して悩んでいたが、どうせオレはオレの
思い通りにするんだから諦める。

スモーカーを丸め込んで裏通りにまわる。

いい感じに人影はない。

スモーカーは雨樋を伝って6階建ての建物の屋上まで登って行った。

……相変わらず子供の運動神経じゃないよなあ。

2、3階ならともかく、6階なんてオレの腕力と体力では登れない
ので、黒い手を出して上に運ばせる。

黒い手ちよー便利。

・・・ん？

「？どうした？」

視線を感じた気がして周りを見ていたら、スモーカーに不思議そうに聞かれた。

まあ、こんなところに人が居るはずないから気のせいだろう。

屋根から屋根へびよんびよんと飛び移り広場に向かう。

・・・能力をまだ持っていないスモーカーが5、6mを軽く飛んでいるのは気にしない。

12歳って小学生か中学生だよな・・・？

まあONE PIECEだし、で終わるけど。

・・・と。

また視線。

やっぱり気のせいじゃない。

ううむ気配がまったく掴めん。

中々やるな、と思いつつ、スモーカーに気のせいと言われても否定はしない。

お市ボディのオレが居場所を掴めない奴なんて、今のスモーカーじゃ相手にもならん。

面倒なことになんなきゃいいなあと思いつつ、広場近くの建物に到着。

おお特等席。

ほぼ真正面で、しかも処刑台とほぼ同じ高さじゃね？

こりゃあいいとこに来た、とか思ってたら、背後に妙な気配。

妙に背中がざわざわし、思わずスモーカーにしがみ付いた。

びくっとスモーカーが震えたが知らん、つかそれどころじゃない。

そおっと後ろを振り向けば・・・。

・・・え？

ドフラミンゴ？

・・・おおマジにドフラミンゴだ！

1コマだけだったけど、そのサングラスしつつ額にゴーグル付けてる独特のファッションは忘れないぜ！

「フッフッフ。そう怯えんな。なんもしねえよ」

怯えてねえよ。

まあ、普通の子供は怯えるんだろうが。

・・・しかし背筋がざわざわするのはなくならないな。

なんなんだいったい？

原作キャラに会ったから、っていう理由はスモーカーに何も感じなかったからないしなあ。

・・・覇気？

ドフラミンゴって覇気使えたっけ？

ちょっと考え込んでたら、いつの間にかスモーカーに庇われる位置になっていた。

あれ？

いつの間に？

「フッフッフ。ちょっと前から見てたが、ガキのくせにたいした運動能力じゃねえか。特にそっちのお嬢ちゃん。空でも飛べんのかあ？」

・・・見てたのかよ。

ちっちゃい女の子見てたなんて、変態って言われてもしょうがないぜ。

いくつ年齢差あると・・・。

・・・あれ？

ドフラってこの時点で17歳なんだっけ？

ふけ・・・、ゲフンゲフンッ。

外人顔つか彫りが深いと年齢わかんねえなあ。

「……つかさつきから感じてた視線はこいつじゃないんだが。フッフッフ。どうだ？二人とも俺の仲間になんねえか？俺あお買いでござい？すぐに名を上げてやる」

その通りだろうなあと思いつつ断る。

だって海賊になったら絶対スモーカーが捕まえにくるし。

つか海に出る気ないし。

人間平穩が一番だよ。

普通に両親のやっている宿屋を継ぐ気である。

「あん？つまんねえなあ」

テメエを楽しませる気はねえよ、ピンク鳥。

「……そついや、フラミンゴって世界で一番不味い鳥らしいけど、誰が食ったんだ？」

あとピンク色なのは食べている海藻の色素のせいだとか、膝に見えるところは実は踵でフラミンゴが座っているところは足が逆に折れているようにしか見えなとか、片足で立っているのは両足水に浸かっていると寒いから暖かいところでは両足で立つだとか、フラミンゴのトリビアをいきなり思い出した。

「……ヤバい、笑う。」

笑い出しそうになるのを誤魔化すためにスモーカーにしがみ付く。はははダメだオレ耐えるここで笑い出したら変な奴つかお市じゃねえ。

一人でアホらしい戦いをしていると、タンタンという音がした。なに？

「……おおおクロコダイルと鷹の目！！」

マジで！？

七武海って若い頃知り合いだったの!?

・・・あ、なんか顔と名前だけ知ってるけどどっちかって言えば嫌いっぽい。

しかし鷹の目若い。

ドフラより年上のはずだけど若い。

髭がないからか?

そしてクロコダイルは顔の傷がない。

左手がある。

この後なくすのかあ。

・・・あ、もしかしてまだ能力者じゃないのかな?

ロギアだったら霸气使わない限り傷が残らないはずだし。傷を負ってから能力者になった?

・・・つかさつきから見てたのはテメエかクロコダイル。

視線が一緒だ。

しかし背筋がざわざわするのはドフラミンゴだけだな。

霸气なら鷹の目も使えそうなのに。

霸气じゃないのか?

ぼーっと考えつつ感覚を伸ばす。

ざわざわするの、と適当な条件指定だったにも関わらず、いくつも見つかった。

一番近いの、はドフラなのでその次に近いのに視線を向ける。

・・・モリアじゃん。

部下っぽいのに円形に囲ませて、自分一人だけ悠々と立っていた。でかいからすごい邪魔そう。

ドフラとモリアの共通点、ねえ・・・。

悪魔の実の能力者?

それ以外思い付かねえ。

『悪魔』の存在が、背筋をざわつかせる？

・・・うーん、ローグタウンの海軍支部に一人だけいるらしい能力者には会ったことないんだよね。

今度スモーカー唆して一緒に会いに行ってみようかなあ。

そうすればはつきりするだろう。

第4片 始まりと終わり・裏(2) (後書き)

クロコダイルの傷、悪魔の実を食べた時期は捏造です。

主人公は儂げな美貌と無表情の裏でこんなこと考えてました。
スモーカーの扱いが微妙に悪いですが、イチはちゃんとスモーカー
のこと好きですよ？

第5片 始まりと終わり・裏(3)

「おれの財宝か？欲しけりやくれてやるぜ。探してみろ！この世の全てをそこに置いてきた！！」
わぁ、名場面。

なんて呑気に感想を言う余裕はなかった。
こわい。

怖い怖い怖い怖い！

何が怖いって群衆！

何これ人間って集まるとこんなになんの！？

全員集まって一つの生物みたいに、一人が叫ぶと隣も叫ぶ。

高いところから見ているせいか、巨大な軟体生物が蠢いてるようで・
。。。

怖い、つかキモイ。

「。。。。。。帰るぞ」

スモーカーの声で我に返る。

そうだよね！

とつとと帰って家に閉じこもるべきだよね！

オレまだ子供だし！

「フフ、フフフツ！なんだ帰んのかぁ？楽しくなんのはこれからだろっつ？」

うつせえよピンク鳥！

おまえなんか巨大アメーバに呑み込まれちまえ！

。。。あ、やっぱ今の無し。

黒いアメーバがドラフラのそこからピンク色に染まってくの想像しち

まった・・・。

うえ、とか思ってたら、鷹の目がドフラを止めた。

・・・そっぴや鷹の目も面倒見良さそうだったね。

スモーカーに手を引かれて走り出す。

のはいんだけど、クロコダイルがまだオレに視線向けてくるだけ
ど。

いい加減しつけえなあ。

・・・まさかロリ？

し！つ！け！え！な！！

思わずそう口走りそうになったが、幸いなのかなんなのか口を開く
余裕がない。

広場からずっと走りっぱなし。

原因は集団で追い掛けてくる海賊らしき男達。

ていつかおまえらさっきモリアの周りにいた奴らだろ！

モリアの仲間なら新世界でカイドウにやられるはず。

ざまあみる！

・・・しかし、後ろの海賊達はバテ始めてるのに、スモーカーには
まだ多少余裕がある。

おまえの体どうなってるんだ12歳児・・・。

オレはそろそろ限界が近い。

後でスモーカーにお説教されようがどうせ聞き流すんだから黒い手
で追い払っちゃおうかなあ？

・・・しないけどね。

後ろの集団は無傷でオレ達を捕まえようとしている。

そしてモリアの部下^{たぶん}。

つまり、影を取ってそれを理由に脅すとかして強制的に仲間にするつもりだろデカラツキヨ！

だったら能力見せたら余計諦めないに決まってる。

とつと引き籠もってスリラーパークでお人形遊びしてやがれ！

ああもっつ。

しかもまだクロコダイル見てるし！

なんなのあいつ！？

しかも姿が見えないのがヤな感じ！

「こっのクソガキ！！」

キレたらしき海賊が銃を取り出す。

・・・つてアホかあ！！

スモーカーの頭に直撃コースじゃんか！！

「お兄ちゃん！！」

とつさに黒い手を出して庇う。

面倒なことになろうとも、人命には変えられない。

・・・んだけどさあ！

なんでおまえ海兵に庇われてるわけ！？

しかもそいつつて青雉！？

・・・。。。

ぶちつと、何かが切れた。

「・・・踊れ」

無数の黒い手が屋根からわき出る。

黒い手は回転するように海賊達を薙ぎ払い、叩き落とす。

はっはっは。

ざまあみる。

「・・・やりすぎだ、イチ」

「・・・知らない」

あいつらがしつこいから悪いんだよ。

「……とりあえず君達、支部まで来てね」
気を取り直したらしい青雉にそう言われた。
……わかっっちゃいたけど、面倒なことになりそうだなあ。
ちなみにクロコダイルの視線はいつの間にか消えてました。
青雉来たから逃げたんだろうか？

説明というか対応をスモーカーに任せばーっとする。
そっぴやざわざわするのは悪魔の実の能力者だからでいいらしい。
青雉相手でもざわざわする。

……まあ判別付いて便利っちゃ便利だけど。
でもこのざわざわは好きじゃないんだよなあ。
これって能力者だけなんだろうか？
悪魔の実自体でもわかったり？
……実験してみたいなあ。

その辺に悪魔の実があるとは思えないけど。
ありそうなのってマリージョアの天竜人のところが、マリンフォード
の海軍本部か。
どっちにしても遠いなあ。

とかつらつら考えてたら、いつの間にか将来の夢の話になっていた。
え？なんで？

「んじゃ、将来は海兵になるわけ？」
「あー……。そうだな。自警団とか賞金稼ぎでもいいけど、やっ
ぱ海兵かな。海軍って何歳から入れるんだ？」

「基本は15歳からじゃないっけ？」
『基本』とかいまいち曖昧なのって、青雉は『基本』じゃないから

だよな。

やっぱ能力者は特例か。

オレも入りたいて言ったらすぐに入れんのかなあ。
入る気ねえけど。

「・・・それ、本部っていうか士官学校に入れる年齢じゃないですか？支部は12歳から入れますよ。・・・最初は雑用ですけど」

「げ」

うん、スモーカーに雑用は向かないと思うよ。

絶対15になつてから本部入り狙うね。

・・・あれ？

スモーカーって能力者になるのいつ？

つか海兵って任務とかで悪魔の実見付けたら、勝手に食べていいのかなあ？

なんかダメっぽいよね。

上司に提出して元帥が食べる人間選ぶとか？

・・・そんな面倒なことしなさそうだな。

天竜人に献上、とかいう名目で売っぱらってんだろっか？
最低でも1億だしなあ。

「そつちのお嬢ちゃんも？」

と、こつちに回ってきた。

そりゃあね。

悪魔の実の能力者なんて海兵か海賊かの2択しかないようなものだし？

お市の能力つてば汎用性あるし？

警戒するのも当たり前かなあとは思っ。

オレは番外を選ぶけど。

「・・・お嫁さん」

「は？」

はっはっは。

間抜け面！

「・・・イチ、大きくなったらお嫁さんになるの」

恥ずかしがっているように俯く。

どうだ可愛かるう。

そして何も言えまい。

「・・・そ。がんばってね」

もちろん。

目標はスモーカーがローグタウンに帰ってくるまでに結婚だ。

5つ年下の女の子が結婚していて焦るがいい。

たしぎとの仲をからかって遊んでやる。

・・・あ、でもなんだかんだで、スモーカーってばヒナとくつつき
そう。

つかたしぎはゾロまっしぐらな気がする。

ゾロはまったく気付かなそうだけど。

第5片 始まりと終わり・裏(3) (後書き)

クロコダイルは少女趣味ではありません。

仲間にするべきか、今の内に殺しておくべきか、放っておくかの判断をするために観察してました。

クロコダイルって判断してからは速いけど、判断するまでが長いイメージがあります。

主人公の設定は本文中に記述していくつもりですが、わかりづらい、B A S A R Aを知っていないと理解できない等のご意見があれば、主人公設定を1ページにまとめようと思います。

では。

長々とおつきあいがとうございました。

第6片 海賊と悪魔の宴 side・Smoker(前書き)

お気に入り登録、評価をしてくださった方、ありがとうございます。

読んでくださった方が少しでも楽しんでいただければ嬉しいです。

第6片 海賊と悪魔の実 side・Smoker

すさんだな、と港から街を振り返って思う。

海賊王の処刑から2年。

あの日から、世界は変わった。

どいつもこいつも、たいした実力も覚悟もなく海賊になり、食ってけなくて、あるいは恐怖を紛らわすために街を、民間人を襲う。むろん、海軍側でも戦力を増強して対応しているが……。

足りてない、というのが正直な感想。

前にこの街にいた悪魔の実の能力者である大佐は、本部に呼ばれて戻っていった。

他の海兵も実力はあるが、グランドラインの入り口であるこの街に来る海賊は数が多過ぎる。

いつせいに暴れられると手が足りない。

なので通り過ぎるだけの奴は見逃す、というスタンスを取っているが、それですら、手は足りていない。

そもそもグランドラインへの入り方を知っており、なおかつ入る実力と度胸がある海賊が少ない。

ここで足止めを食っている海賊は、苛立ちからか暴れることが少ない。

……他のガキ共とやっていた海賊退治はやめた。

海賊個々の実力という観点なら、前よりもむしろ下がっている。

だがその分、余裕がない。

ちよっとしたことでも大きな騒ぎになり、騒ぎはあつという間に他の海賊に伝染する。

個々は弱くても、数には勝てない。

仲間の何人か、というか12を超えた奴らは海軍に入った。
俺は入っていない。

15になったら本部に行くつもりだ。

今はそのための訓練と資金集めを兼ね、賞金稼ぎの真似事をしてい
る。

一人じゃ無理そうな時は、海兵に協力を頼んでいる。
向こうにしてみれば、協力してるのはこっちなんだろうがな。

・・・ものすごく不本意だが、時々イチが付いて来ることもある。
絶対にまいたと思ったのになんであいつ付いて来てるんだ・・・。
まあ付いて来るのはほとんどが偵察の時に戦闘に参加することはあ
んまりないというか戦闘に参加するときは俺のフォローでイチがい
なけりや危なかったこともあったりした。

・・・どっかに悪魔の実落ちてねえかな。

さすがに10歳にもなつてねえ女に助けられるのは・・・。

・・・まあそれも、あと1年もない間だけだ。

イチはきつと、ずっとこの街に残る。

俺が海軍に入れば、滅多に会うことはなくなるだろう。
もしかしたら、二度と。

「・・・下見？」

「うおっ!？」

斜め下から聞こえた声にのけぞる。

おまえ本気で心配ないな!

「・・・海賊船、増えたわね」

「・・・ああ」

ここはローグタウンの北にある岩場。

さすがに海賊船を堂々と港に泊める奴はいないので、それ以外に何ヶ所かある泊めやすい位置に海賊船は集まる。

ここもその一つで、無差別に暴れそうな奴というのは遠目でもわかるので偵察に来たのだが・・・。

「おまえは海賊が居るところに来なって何回言やあわかるんだ」

「・・・イチ、強いもの。お兄ちゃんより」

「・・・」

このクソガキ・・・っ。

ぶに、とイチの頬を引っ張るが、濡れたような目で上目遣いに見上げられるとこっちが悪いような気がしてくるから理不尽だ。

「・・・はあ」

溜息を吐き出してイチの頬から手を離す。

どうせ今まで何度言っても無駄だったしな・・・。

それに実際のところ、イチのカンはよく当たる。

『こいつヤバそう』とか『ほっといても大丈夫』とか、その類の評価が外れたことはない。

「今日は様子見だからな。手え出すなよ」

「・・・うん」

まあ、今までイチが自分から手を出したことはないんだが。

適当に距離を保って、歩きながら海賊船を観察する。

正直どれも似たり寄ったりに見える。

「・・・あの船」

「あ？」

いきなりイチが立ち止まった。

視線を辿れば、他より少しボロっちい、大きさは中程度の船。ボロいわりに甲板に出てる海賊の表情は明るい、というか躁状態に見える。

とはいえそれは、めずらしいことではない。

「あの船がどうかしたのか？」

「・・・悪魔の実があるわ」

「は？悪魔の実？・・・なんでわかるんだ？」

昔からイチはよくわからん感覚で生きていて、理解できないことを言い出すのは初めてではないが。

・・・そしてそのほとんどが、正しいことであるのだが。

「・・・昨日おうちの食堂にいた人が話してたの。あの船に乗っているわ」

「盗み聞きかよ・・・」

だがまあそれなら、信憑性は高い。

「・・・出直すぞ」

夕方から夜にかけて、船長以下幹部は食事と酒のために船を離れるだろうから。

その時イチは置いて来たいが・・・。

「・・・？なあに？」

「いや・・・」

相変わらずの無表情だが長い付き合いだ。なんとなくわくわくしてるのがわかる。

・・・こいつ絶対ついてくるっていうか置いてったら一人で乗り込む。

はあ、と溜息を吐き出す。

下手に暴走されるより、まだ俺の目の届く範囲に居てくれた方が安

心だ。

空が茜色から藍色に変わる時間。

案の定、イチは俺が家を出るのを待ち構えていた。

文句が口から出そうになるのを抑えて岩場に向かう。

目標の海賊船は、予想通り数人の見張りしか残っていないかった。

「おまえは俺が合図するまでここにいる」

「・・・いや」

「は？・・・っ！！」

『おいこら待て！！』と怒鳴りそうになったのをギリギリで抑える。何一人で先に乗り込んでんだ！？

いくら強くたって、おまえは子供で女だろうが！

急いでイチを追い掛けるが、俺が甲板に登った時にはすでに終わっていた。

見張りだろう海賊が全員倒れている。

・・・物音は聞こえなかつたんだが。

ちらつと黒い手が見えたから、たぶん能力を使つたんだろう。

「・・・・・・」

イチに近付き、唇間とは違って思い切りその頬を引っ張った。

「・・・痛い」

「痛くしてんだ馬鹿」

つか痛いなら痛そうな顔をしろ。

はああ、と溜息を吐き出すついでに手を離す。

・・・なんか俺、最近溜息ばつかな気が。

原因は目の前にいるイチだが。

「っって待て！！」

だから一人で先に行くんじゃない！

イチを追い掛けて船内に入ると、イチは新しく一人の男を気絶させようとしているところだった。

「おまえの能力、本気で便利だな。」

黒い手の一つが男の目と口を塞ぎ、別の二つが体を支えながら首を絞めている。

男が気絶した後は、そのままそつと体を床に横たえた。

「だから甲板でも無音だったのか。」

思わず床に消える黒い手を目で追い掛ければ、イチはさつさと先に進んでいた。

「……。一応聞くが、戻る気はねえのか？」

「……ここまで来て？」

まあその通りだが。

「せめて俺の後ろを歩け」

「……お兄ちゃんがやるとつるさいもの」

「……」

チクシヨウ反論したいけどできねえ。

「……行きましょう。出掛けている人達が戻ってくると面倒だわ」

「……ああ」

確かに口論しているような時間はない。

納得はできないが、だからといってイチを説得できるとも思えない。

それに確かに、イチの能力なら音を立てずに敵を無効化できる。

ここはイチに譲った方がいいと、理解してはいるが……。

……この船にあるっていう悪魔の実食ってみるかな。

イチに守られているのは、なんとなく落ち着かない。

「船長室、か・・・？」

宝物庫を目指してるのかと思えば、イチが入っていったのは船長室らしき部屋だった。

「・・・見付けた」

イチは迷う様子を見せず、ベット脇にあった宝箱を開ける。

・・・鍵を力ずくで壊したのはともかく、なんで場所がわかったんだ？

「・・・食べる？」

「あ？」

差し出されたものを思わず受け取る。

・・・桃？

形は桃だが、黄色に青い唐草模様という明らかに食べ物として有り得ない配色をしてるんだが・・・。

「・・・えい」

「は？・・・っ！！！？」

手に持った実を眺めていたら、いきなり黒い手がそれを奪い、俺の口につっこんだ！

てめえイチ何しやがる！？

つかまずっ！！

「ぐ・・・っ」

手で口を塞ぎ、吐き出しそうになるのを堪える。

悪魔の実ってこんなに不味いもんなのか！？

「く・・・っ。・・・は」

なんとか飲み込み、一発イチを殴ってやるっかと思ったら、ちゃっかり距離を取っていやがった。

「・・・」

しかも防御用だろう黒い手が一本、ゆらゆらと揺れている。

テメエ怒られるってわかってんならするんじゃねえよ。

・・・まあ、最初から食べる気ではいたが。

「・・・何の実だ？」

それは独り言に近かったが、思いがけず返事が返ってきた。

「・・・モクモクの実。ロギア系」

「モクモクの実？」

「・・・うん。お兄ちゃんは煙人間」

「・・・」

言われて集中すれば、腕がゆらりと輪郭を崩した。

「・・・」。とりあえず外に出るぞ」

これから海賊を捕まえたり、他の宝を探す余裕はない。

悪魔の実を食ったことがバレれば追われるだろうが、少なくとも今よりは能力の使い方がわかっていいるだろう。

予想外にあっさりイチが頷いたので、今度は俺が前に出て甲板に戻る。

甲板では見張りがまだ気絶していた。

・・・もしかしたら、俺達がやったってバレないかもな。

第6片 海賊と悪魔の宴 side・Smoker(後書き)

スモーカーが主人公の頬を引っ張るのは叱る時、殴ろうとするのは怒った時です。違いは根底に心配があるかどうか。

章を追加しました。

ついでに5片まで、自分で読み直して見にくかったので改行を増やしました。

これからもレイアウトが予告なく変更になると思います。

第7片 海賊と悪魔の実・裏

すさんでんなー、と自宅兼宿屋の屋上から街を見下ろして思う。

ロジャーの処刑から2年経ったんだけど、ちょっと驚くくらいのスピードで治安が悪くなった。

つか海賊が多くなった。

東の海だから、まだマシなんだろうけど。

それでもローグタウンはグランドラインの入り口で、海賊王所縁の地ってことで立ち寄る海賊は多い。

そっぴや、この街ってロジャーの出身地の割にロジャーの子供の頃知ってる人間いないんだよな。

『海賊王の生家』とかもないし。

ただ単に隠してるだけかもしれないけど。

ロジャーって処刑の時40代半ばくらいだよな？

ブルックの話では50年前にルーキーで、白ひげやガープのちょっと下くらいの年齢だろうから。

・・・この仮定だとルージュとの年齢差がひどいことになりそうな気もするがとりあえず置いておこう。

とにかく、60、70の老人なら絶対に知っていると聞いたのだが、誰も知らない or 話してくれない。
なんでだ？

今はもうない、グレイターミナルみたいなスラムで育ったとか？

・・・さすがにそれは現実的じゃないか。

まあでも、孤児だったという可能性はありそう。

どっちみち、あんまり幸せな子供時代じゃなかったんだろうなあ。

ガープがエースと似たような生い立ちだって言ってたし。

・・・エースの境遇は超絶不幸だと思うよ。
なんでよりもよって山賊に預けるかな・・・。

あ、そっか。

もうエースってコルボ山にいるんだ。

ま、何にもしないけどね。

9歳児に何ができるんだっていうのもあるけど、原作に関わりそう
なところに手を出すつもりはない。

あれはあれで最適最善な道をルフィが選び取っているはずだから、
下手に手を出すと誰がどこで別の不幸になるかわかったもんじゃな
い。

・・・けして原作の名場面が見れなくなるかもしれないからではな
い。
ないったらない。

あ、スモーカー発見。

暇潰しに島一周しながら探してたらすぐに見つかった。

スモーカーって子供達を率いての海賊退治やめた代わりに、海軍に
協力しての賞金稼ぎやってるんだよね。

海軍本部の士官学校に入るために訓練と資金集め兼ねてるんだろう
けど、素直にこの支部の大佐に推薦状出して貰えばいいのに。

そうすればマリンフォードまでの渡航費タダになるし。

・・・知らないだけとかないよな？

「・・・下見？」

「うおっ!？」

こっそり背後から近付いて声を掛ければ、面白いほど仰け反った。
ふっふっふー。

気配を消すのは大得意だ。

「おまえは海賊が居るところに来んって何回言やあわかるんだ」

「・・・イチ、強いもの。お兄ちゃんより」

「・・・」

心配されてんのはわかるけどね、オレはスモーカーより、つか支部の大佐より強いんだぜ？

心配も警戒もするだけ無駄ってもんだ。

・・・って痛い痛い痛い！

ほつぺた引つ張るんじゃねえよ！

じいつと見上げていれば、スモーカーは溜息を吐いて手を離れた。なんか最近諦め良くなったよな。

・・・オレのせい？

海賊船に注意を向けながら歩き出したスモーカーに続く。

次の獲物の品定めか。

マジメだねえ。

オレはお市ボディのおかげか、敵味方それ以外識別のカンがほぼ100%当たるので調査は必要ないが。

・・・あ。

ざわざわざわっと、悪魔の実センサー（仮称）が反応する。

今まで会ったどの能力者よりも強い。

ていうかこれって・・・。

悪魔の実そのもの、だ。

・・・今考えると、能力者っていうのは壁とつか鞘とつかかな役割をしてたんだな。

遮蔽物無しに直接話し掛けられてる状態ってわけだ。

何を言っているのかはわからないが、正直つるさい。

・・・つか、オレって『悪魔』から仲間扱いされてる？
まさか、な・・・。

「あの船がどうかしたのか？」

立ち止まっていたのは長い時間ではないが、それでもスモーカーが疑問を抱くには十分な時間だったのだろう。

問い掛けられて反射的に『なんでもない』と言いつうになったが・・・。

モクモクの実の可能性もあるんじゃないか？

「・・・悪魔の実があるわ」

モクモクの実は悪魔の実凶鑑に載っていた。

もしそれだったらスモーカーに食べさせよう。

そうなかったら売り払えばいい。

最低でも1億・・・、あつたらこれから先一生働かなくてもいいかなあ？

・・・いやいやいや。

一瞬ものすごく心惹かれたが、初心忘るべからず。

原作の流れは変えないって決めたじゃないか。

モクモクの実だったら諦めよう。

違つたら・・・。

「は？悪魔の実？・・・なんでわかるんだ？」

つと、思考が横にズレていた。

まあ当然の疑問だよなー。

スモーカーになら本当のことを言っても問題ない気もするけど。

たぶんスモーカーの中でオレって庇護対象だし。

・・・まあ念のため、適当な嘘を吐いておくか。

「・・・昨日おうちの食堂にいた人が話してたの。あの船に乗っているわ」
お市の表情筋はあんまり動かないので、嘘を吐いてもバレることはほとんどない。
とはいえ実際、あの船の船長らしき奴が昨日うちの食堂に来ていた。悪魔の実は一言も話していないが、妙に羽振りが良かったので売っ払う算段が付いているのだろう。

おそらく今日も飯と酒のために街に出るだろう。

スモーカーも同じ結論に達したのか、いったん帰ることになった。

その際物言いたげな目で見下ろされたが・・・。

「・・・？なあに？」

「いや・・・」

ふっふっふ。

どうせまた危険だから置いてきたいとか考えてるんだろう。

思い通りになる気はないがな！

スモーカーの家の前で待ち構えていれば、案の定ものすごく何かを言いたそうな顔をしたスモーカーが出てきた。
それをサクッと無視して岩場に向かう。

悪魔の実はある船に行けば、予想通り数人の見張りしか残っていないかった。

とはいえ・・・。

スモーカー一人じゃ荷が重いな。

下手に騒ぎを起こして他の船の奴らが来ると困るし。

というわけで最終手段黒い手発動。

目と耳塞いで気絶させて静かに床に置く。

無音で目撃者無しでついでに体力吸収もできてちょー便利！
一人無言で勝ち誇っていたら、やっと甲板に登ってきたスモーカー
にほっぺた引っ張られた。

「・・・痛い」

「痛くしてんだ馬鹿」

馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ。
って痛い痛い痛い本気で痛い！！
涙出てきた！

離せー！と念を込めて見上げれば、はああと妙に長い溜息を吐き出
しながら手を離れた。

・・・年寄り臭いよ？

言うともたほっぺた引っ張られそうだけど。

あつくまのみ

悪魔の実センサーが反応する方、というかぶっちゃんけつるさい方に
向かって進む。

・・・いやホントうるさいよおまえ？

おかげで他の気配が感じにくい。

しかたなく黒い手を前方に出して探知機代わり。

これ地味に疲れるんだよなあ。

と、この部屋か。

船長室かな？

ベタにベットの下にあった宝箱を黒い手で引っ張り出す。

鍵・・・、面倒だから壊しちゃえ。

バキツと蓋を開ければ、桃っばい形の黄色と青の実。

・・・うわ絶対食いたくねえ。

けどモクモクの実だったので、スモーカーには食ってもらわねば。

スモーカーに渡したが、手にとって眺めている。
やっぱその配色は食べるのを躊躇うか……。
でも……。

なんか苛ついてきた。

「……えい」

「は?……っ!?!?!?」

どうせいつかは食べるんだから今すぐ食べる。

そいつ本気でうるさいんだよ。

例えるなら隣のレジでキャンキャンわけわかんねえ文句つけてるクレーマー?

聞いてるだけでムカついてくる。

人の体に入ってしまったえばまだマシ、なはず。

「ぐ……っ」

あはは。

スモーカーが涙目になってるー。

そんなに不味いのか。

それでも根性で飲み込んだスモーカーから距離を取った。

いやさすがに悪いことした自覚はあるんだよ?

後悔してないだけで。

「……」

黒い手を一本前に出して威嚇。

オレだって殴られたくはない。

しばし無言で見つめ(睨み?)合ったが、例によって先に諦めたのはスモーカー。

激甘だな。

さて。

とりあえず家に帰って寝るか。
オレの目的は果たしたからな。

第7片 海賊と悪魔の実・裏（後書き）

主人公が言っている通り、原作の流れを変える予定はありません。

第8片 能力と代償 side・Smoker(前書き)

流血表現があります。苦手な方はご注意ください。

第8片 能力と代償 side・Smoker

時間が時間なので、イチを家まで送る。

あとちよつとだな、というところでイチの足が止まった。

「イチ？」

「・・・血の臭い」

「は？・・・おい、待て！」

いきなり走り出したイチを追い掛ける。

足の速さ自体は俺の方が上だが、人混みの中を障害物を避けながら走るとなるとイチの方が速い。

イチの家である宿屋の前に着いた時には、すでにイチは中に入っていて・・・。

ここまで来ればさすがに、俺でも異変に、濃い血臭に気付いた。

「イチ！！」

予想はしていたが、そうでなければいいと思っていた状況。

海賊が何人が血を流して倒れていて・・・。

イチの両親も、壁際に倒れていた。

「パパ！ママ！」

まず目につく傷は銃創。

海賊同士の争いに、巻き込まれた？

「なんだあ？ここん家の子供かあ？」

「ちようどいいや。給仕がいなくて困ってたんだ」

「ぎゃははは！おい、嬢ちゃん。酌しろ」

「もうちよつと育ってたらアツチの相手もさせるんだがなあ？」

「なんだおまえあんなガキが好みなのかよ？」

「「「ぎやはははは！」「」」

「・・・・・・・・・・」

品のない笑い声を上げる海賊達に、怒りで体が震える。
なんでこんな奴らのせいで・・・・・・・・。

「・・・・・・・・パパ？ママ？」

「っ！・・・・・・・・イチ！」

そうだ。

優先順位を間違えてはいけない。

まずは手当てを・・・・・・・・。

「・・・・・・・・息、してない。心臓、止まって・・・・・・・・。あ、ああ。

あああああ

「イチ！」

その肩を掴んで振り向かせる。

思わず息を飲んだ。

イチの目には、何も移っていない。

ぽっかりと、暗い闇のような空洞が・・・・・・・・。

「・・・・・・・・いや。いやよっ。いやあああああ！！」

「っ！！？」

複数の黒い手がイチの体を囲むようにして現れ、思わず後ろに飛び退る。

これは・・・・・・・・。

「イチ！」

黒い手はその鋭い爪で海賊の体を貫く。

どう見ても全員即死だ。

それなのに、黒い手は死体に対し攻撃を続けている。
もう原型を留めてすらいねえ。

「イチ!!」

イチが能力を使うところは何度か見た。

けど『これ』は何かが違う。

本能的に目を背けたくなるようなおぞましさ、『これ』にはある。

「イチ!もうやめろ!全員死んでる!イ・・・」

イチの目が閉じられていた。

今まで気付かなかったが、おそらく気を失っている。

黒い手に支えられて立っているから、そう見えなかっただけで。

・・・まさかこれは全部、無意識なのか?

無意識で・・・能力が暴走している?

「・・・イチ!!」

海賊達に攻撃を加えていた黒い手は、動かない獲物に飽きたのか何
なのか目標を変える。

・・・いや、目標を失った。

無差別にそこら中に攻撃をして・・・。

・・・?

おかしい。

俺は一度も攻撃されていない。

これだけ縦横無尽に動いていて、一度も俺に当たっていない!

・・・イチの意思、か?

「・・・。。イチ!!」

賭け、だった。

イチの側に近づけるか、どうか。

・・・後から考えりゃ、この時俺は煙になる能力を持っていたのだから、どっちみちダメージを受けることはなかっただろうが。そんなことにも気付かないほど、俺は平静を失っていた。いきなりの事態に動転していたのもある。けれどそれより、黒い手が怖かった。

「イチ！」

やはり黒い手は俺を避けている。

周りの家具や壁なんかは攻撃しているのに、なんで俺だけを避けているのかはわからねえ。

けど都合だ。

イチが気を失ったから黒い手が暴走しているのだとすれば、イチさえ目覚めれば止まる。

「イ・・・」

肩を揺さぶろうとした手が止まる。

イチは泣いていた。

閉じられた目から、後から後から涙が零れ落ちてくる。

「っ!!!?!」

ビシッと天井に亀裂が入る。

崩れるっ!!!

「イチ!!」

とっさにイチを庇った。

その後の記憶は、ない。

目が覚めた時、そこは海軍の救護室だった。

隣にイチもいて、怪我がないことには安堵したが……。

その手首に、手錠が嵌められていた。

海楼石という海と同じ性質を持つ物質でできていて、悪魔の実の能力を封じるのだとか。

イチの場合は拘束目的ではないので、片方の手首にぶら下がっているだけだったが……。

「……イチ、どうなるんスか？」

黒い手に庇われて俺とイチは無事だったが、建物自体は完璧に崩壊したらしい。

……それに、相手が海賊とはいえ、イチは人を殺している。

そのこと自体は罪にならないそうだが……。

選択肢は2つしかない。

このまま海楼石を身に付けたまま暮らすか、海軍で能力の制御を学ぶか。

海楼石を身に付けている場合でも海軍の監視下にいなければならぬ。

……海軍への入隊を勧めるように言われた。

確かにこのままこの街に残っても、今まで通りに暮らすことはできないだろう。

それは家族と家を失ったというだけではなく、イチの能力の大きさをこの街の人間が知ってしまった。

俺でさえ、怖ろしいと思った。

他の奴らなら尚更だろう。

顔見知りの海兵が、代わり代わり俺達の様子を見に来る。

かつての仲間の顔もあった。

そいつらの浮かべている表情が、怯えではなく同情なのがまだ救いか。

「……そういや、俺も悪魔の実を食べたと言ったらすっ飛んでいった奴がいたが、あいつはどこに行ったんだ？」

「………う」

「イチ？」

目が覚めたのか？

ベットの上で目を開けたイチは、そのままハラハラと涙を零した。嗚咽もなくただ涙だけを流す様子に、何も言えなくなる。

「……イチのせいだわ」

「………違う」

「……イチがぜんぶ悪いの」
「違う！」

「……イチが居れば、パパとママは死ななかったわ」

「イチ！！」

おそらく今のイチに、俺の声は聞こえていない。己を責め続けるイチに、何を言っても届かない。

くそ………つ。

俺には何もできないのか！？

気が付けば、イチを抱き締めていた。それしか俺にできることは、ない。

「……お兄ちゃん」

もういい、と言うように名を呼ばれる。

イチは泣きやんではいたが、すぐに俯いてしまった。

「・・・イチ、これからどうなるの？」

イチの視線の先には海楼石の手錠。

それが何のためのものか、気付いてしまっているのだろう。

「・・・海兵？」

「・・・海兵？」

「ああ。海軍本部の士官学校に、ここの大佐が推薦してくれる。・・・

・そこなら、能力の使い方を教えてくれる人がいる」

「・・・」

イチは驚いたように、ゆっくりと瞬きをした。

・・・もしかしたら、海軍に捕まったとも思っていたのかもしれない。

相手が海賊で、事情があったとはいえ、殺してしまったのは、事実なのだから。

「・・・そこなら、生活の面倒もある程度見てもらえる」

おじさんやおばさんがいなくても、生きていける。

「・・・それがいいのかもね」

しばらく考えた後、イチはそう言って頷いた。

やけになって、適当にそう言っただけにも見えたが・・・。

「・・・イチ、海兵になるわ」

もう一度はつきりと口にした時には、その瞳に決意が籠もっていた。これなら大丈夫だろう。

妹分の自立に少しだけ寂しい気がしなくてもないが、そのことに安堵した。

「・・・お兄ちゃんも行くの？」

「あ？俺？」

なんだいきなり？

そりゃいつかは行く気でいたが……。

「……悪魔の実、食べたでしょう？」

「……」

そっぴや悪魔の実の能力者は特例扱いで年齢が足りなくても入隊できるってさっき言ってたな。

イチのことだと思って聞いていたから、俺にも当て嵌まると思わなかった。

……もしかして俺も対象に含まれてたのか？

じいっと俺を見上げてくるイチの目に期待が籠もっているようで、なんとなく居心地が悪くなる。

「……後で聞いてみる」

「……そう」

イチはまた俯いて、何かを考え込んでいる。

おじさんとおばさんのことだろうか？

「……イチ、がんばるわ」

「……ああ」

俺も、頑張らねえと、な。

第8片 能力と代償 side・Smoker(後書き)

・・・これだけやっとしてお互いに恋愛感情がないというのは説得力がない気がしてきました。

けれどお互いにお互いを子供扱いしているので、恋愛対象になっていません。

14歳にとって5歳の年齢差は大きい、はず。

2011/06/16 第24片と矛盾があったので修正。

第9片 能力と代償・裏

ごめんなさい。

ごめんなさい。

イチのせいだわ。

イチがぜんぶ悪いの。

パパとママが死んだのは、イチのせい。

イチが居れば、パパとママは死ななかつたわ。

イチが家を抜け出して、お兄ちゃんに付いて行ったから。

おうち来ると知っていて、イチがあの人達を放置したから。

イチがあの人達を、ちゃんと全部殺さなかつたから……。

はた、と我に返る。

おおおオレ今完全にお市になつてたー！！！！？

あ、危なっ！

つか怖っ！

本気でお市怖っ！！

オレそのうち乗っ取られるじゃ……っ。

「……………」

パニックが一周して逆に冷静になった。

あー、うん。

元々その兆候はあつた。

他人の体、それも性別も年齢も違つて体になつても違和感がなかつた

り。

特に意図してなくても、しゃべる時はお市の口調になってたり。肉体と能力だけでなく、精神までお市になりかけているのだろう。最初から完全にお市になってないのは、オレが『オレ』であった記憶があるから。

・・・どうすっかな。

選択肢は二つ。

足掻くか、諦めるか。

諦めるのは簡単。

何も考えなきゃいい。

そうすれば体が勝手に『お市らしい行動』を取ってくれる。

それを続けていけば、完全にお市になる日は遠くないだろう。

だが・・・。

何も考えないのって案外つらくね？

ふとした瞬間に我に返って自分がした行動にぎゃー！！と喚きそつな気がする。

・・・というか絶対する。

つかさつきした。

だから足掻いてみよう。

足掻いたところでお市化は止まらないだろうが、徐々に進む分なら違和感ないはずだから。

もし途中で耐えられなくなったら、その時は諦めてお市になるろう。完全になってしまえば、少なくともこの件で悩むことはなくなるだろうから。

・・・よし。

とりあえず足掻こう。

具体的には黒い手を使うのを控えよう。
どうも黒い手を使い過ぎるとお市化が進むっばい。

今回暴走したのも、そもそも悪魔の実があつた海賊船で黒い手を使い過ぎたからだ。

不安定になつていたところに衝撃を与えられてキレた、ということころだろう。

・・・黒い手便利だつたんだが。
でもま、しかたないか。

しばらく使わないようにしよう。

・・・で、オレはなんでスモーカーに抱き締められているのかなっ
!?

気付くの遅っ！とか自分でも思うけど！
今までそれどころじゃなかつたんだよ！

「・・・お兄ちゃん」
とりあえず放せ、という意味を込めてスモーカーを呼べば、希望通り放してはくれたんだが・・・。

・・・うん。

ごめんなさいごめんなさんごめんなさい謝るから止めてその心の底から心配してますっていう顔止めて。

罪悪感がっ。

罪悪感があっ！！

「・・・」

クリティカルヒットを食らつた気分です。

良心が痛い……。

子供の純粋な瞳ほど威力がある攻撃ってないよな……。

「……イチ、これからどうなるの？」

とつと話を逸らしてしまおうという目論見もあったが、これは純粹に気になっていた。

なんでオレ手錠付けられてんの？

いや拘束されてるならわかるよ。

暴走した前科があるわけだし。

でも左手首にだけ嵌まっている状態なのはなんで？

「………。イチ、海兵にならないか？」

「……海兵？」

「ああ。海軍本部の士官学校に、ここの大佐が推薦してくれる。・・

・そこなら、能力の使い方を教えてくれる人がいる」

「………」

いや正直能力の使い方はオレが一番よくわかっていると思うのだが。

「……そこなら、生活の面倒もある程度見てもらえる」

あ、そっか。

オレって家なし孤児だ。

となると、士官学校に行った方がいいな。

・・・この街の人間が、オレを受け入れると思えないしね。

オレが言うのもなんだが、お市の能力は凶悪過ぎる。

野放しにされているのを、許すとは思えない。

どうせ海軍の監視下に置かれるのならば、それを利用した方がいい。

・・・逃走して賞金首という選択肢もないわけではないが、それは

正直めんどくさい。

「……それがいいのかもね」

で、この手錠は何？

・・・あ、もしかして海楼石？
効かないから気付かなかった。

しかしなんとというか、海軍の対応甘いな。

オレって被害者扱いなんだろうか？

何十人も殺した凶悪犯だぜ？

あの時の記憶はぼんやりとしているが、それでもうつすらと覚えている。

両親を殺した奴らを黒い手で貫いて殺した。

それだけなら正当防衛と言えなくもないが、それ以外にもウチの宿屋に泊まっていた宿泊客全員を殺している。

・・・ま、全員海賊だったけど。

今のこの街で宿屋に泊まるような人間、海賊だけなんだよね。

普通の観光客や商人がまつたく居ないわけではないけれど、酒場を併設しているところには大抵海賊が来るので一般人は泊まらない。

両親も、場所を移すべきかとか酒を出すのをやめるべきかとか相談していたところだった。

・・・遅過ぎたけど。

しかしまあなんとというか。

正直何も感じていない自分に一番へこむなあ。

この手で人を殺したことも、両親が死んだことも、なんとも思わない。

そりゃ、『可哀想に』くらいは思うけど、現実味が全然なく薄っぺらい。

オレってこんなに薄情だったけ？

お市のせいにしてしまえば、楽になるだろうけど・・・。

・・・やめた。

悩んでも意味がない。

答えの出ない問題は、とりあえず放置して後回しにする。

そうすれば、他人や状況が勝手に解決してくれることもあるし、自分の見方が変わって案外簡単に答えに気付いたりする。

たまに放置したせいでどうしようもなくぐちゃぐちゃにこんがらがったりもするけど、そうなればそうだったですっぱり諦めがついて捨てられる。

・・・まあ大抵、他のことが忙しくて忘れてるだけだけどね。

というわけで今は前進。

「・・・イチ、海兵になるわ」

だって海賊からは海兵になれないけど、海兵からは海賊になれるじやん？

だからとりあえず海兵。

主に保身から。

9歳の女の子の現状だと、海軍の方が待遇いいと思うんだよ。海賊でも白ひげとかなら別だろうけど。

「イチ・・・」

スモーカーに見つめられ、思わず俯く。

真面目に正義とか信念とか善意とかで海兵を目指しているスモーカーを差し置いて海軍本部入りとなると、さすがに後ろめたさが・・・
。つてスモーカーも悪魔の実食べたじゃん。

「・・・お兄ちゃんも行くの？」

「あ？俺？」

「・・・悪魔の実、食べたでしょう？」

「・・・・・・・・」

すっかり忘れてたっていう顔だな。

じいっと見つめてみると、ばつが悪そうに視線を逸らされた。
たまにスモーカーって抜けてるよな。

「・・・・後で聞いてみる」

「・・・・そう」

ロギア系だからほぼ確実に入れるだろうけど。

「・・・・・・・・」

しかし14歳児と一緒にだと心強いか感じている精神年齢40歳つてどうよ？

情けないというか恥ずかしいというか・・・。

いつの間にかスモーカーに依存していたらしい。

少し離れないとなあ。

このままいつたら他人なのに小姑だ。

「・・・・イチ、がんばるわ」

本当に、いろいろ頑張んなきゃなあ。

第9片 能力と代償・裏（後書き）

最近、裏を書くとは無性にスモーカーに謝りたくなります。

主人公が強い感情を持たなかったり、感情が長続きしないのはお市と混ざりかけているからもあります。

喜怒の感情はお市がストッパーになり、哀怨の感情は『オレ』がストッパーになっています。

第10片 後始末と準備 side・Kuzan (前書き)

時間軸はオハラの本スターコールの少し後くらいです。

めずらしく短いです。

第10片 後始末と準備 side・Kuzan

「あらららら」

受け取ったばかりの報告書を見て、思わず溜息を吐き出す。

こんなことになるなんて、ねえ……？

2年前の自分を、ちよつと後悔。

あの女の子、無理矢理でも海軍本部に連れてくればよかった。

……まあそれでも、あの子の親の運命は変わらなかったらどうだろうか。

2年前、海賊王の処刑の時に出会った少年と女の子。

海軍志望の少年と、悪魔の実の能力者の女の子。

なんかあつたら連絡してくれと、ローグタウンの支部の人間に頼んでいた。

それで今回、普通なら中將まで上がってこないような報告を手に入れたんだが……。

「少年は悪魔の実、それも自然系を食べて、女の子は両親を殺されて能力を暴走、か」

文字にすればそれだけの、この世の中めずらしくもない話。

それでもちよつとだけ心が痛むのは、あの二人を実際に知ってしまったっているからか。

「……ま、言い出したのは俺だ。面倒みなきやだね」

将来有望そうなあの少年が、海軍本部に入ったら部下にまわしてくれと頼んでいたのは俺だ。

実際に入れるかどうかは五分五分だと思ってたんだけど……。

まさか悪魔の実を見つけたとはね。

しかも希少な自然系。

「運も実力の内、か」

自然系能力者なら、まず間違いなく佐官以上にはなれる。そこからどれだけ出世できるかは、本人の努力次第。

ま、今はまだ能力の使い方もよくわかっていないただのガキだけど。

「鍛えてあげましょ。・・・女の子の方もね」

海軍の士官学校に入るのは、少年だけでなく女の子も。

あの女の子は孤児になり、家も能力を暴走させた際に崩壊している。なにより、制御できない強大な力は周囲の迫害を呼ぶ。

だから保護、という名目がある。

実際には監視という意味合いが強いとしても。

・・・ま、あの子が本心から海兵になりたいと思ったなら、それは純粹な保護になるのだけど。

「さあて・・・。これから忙しくなりそうだな」

けれどそのくらいで、ちょうどいいのかもしれない。

余計なことを考える暇なんか、ないくらいが。

「・・・コング元帥のここに行きますか」

2人分の配属願いを、出しに行かなければ。

第10片 後始末と準備 side・Kuzan（後書き）

青雉は「申請を出しに行った」のであって、「承認が降りた」わけ
ではありません。

つまり主人公は青雉の部下になりません。

ようやく第一章終了です。

もっと短くサクッと終わらせる予定だったのですが・・・。
説明を全部本文中にキャラの語らせたのが敗因だった気がします。

次からは士官学校編。

だらだらっとした日常を書いていく予定です。

第11片 マリンフォードへ side・Smoker

俺達は今、海軍本部のあるマリンフォードに向かっている。移動方法は当然船で、詳しく言うなら海軍の巡回船だ。

東の海にある海軍基地を何ヶ所か経由して、最終的に1ヶ月ほどでマリンフォードに着くらしい。

東の海からグランドラインに入る方法というのは、基本的に二つしかない。

一つはローグタウンのすぐ傍にあるリヴァースマウンテンから入る方法。

もう一つが逆端、マリージョアで船を乗り換える方法。

基本的に前者が海賊、後者が海軍および一般人が取る方法。

まあ目的地がグランドラインに入ってすぐなら海軍もリヴァースマウンテン経由を選ぶらしいが、今回それはどうでもいい。

マリンフォードはマリージョアの近くなので、本来ならば迷わずマリージョア経由を選ぶ、はずだった。

何事にも例外があるってやつだ。

例外はカームベルトを越える方法。

普通なら海軍の軍艦だろうがそんなことはやらねえが、たまたま本部長将の一人が休暇で東の海に來ているらしい。

その中將をドーン島で拾ってそのままカームベルトを抜ける予定だ。その方が早いからと。

・・・そんな理由で大型の海王類がうようよしているカームベルトに入んのか。

まあ、実際に何度も越えているらしいので危険は少ないんだろうが。

「海軍本部長、ねえ・・・」

どんな奴なんだろうか？

ちなみにこの辺りの情報は雑用をやっている時に近くにいた海兵が話してくれたものである。

一応今の俺達は『客』扱いなので、雑用とか訓練はやらなくてもいいのだが暇だ。

どうせ海軍に入ればやることになるのだ。

だったら今のうちから慣れておいた方がいい。

・・・多少逃げが入っていることは、自覚している。

いや逃げているのはイチの方だが。

どうもイチが能力を暴走させた一件以来、イチに避けられている気がする。

といつても3食食事の度に顔を合わせているし、雑用をしている時にイチも手伝ったりすることもある。

ただ時々、ふらっと居なくなる。

最初のうちは船で迷子にでもなってるのかと探したが、どうやっても見付けられなかった。

他の奴らに居場所を聞いて向かってても、俺がつく頃には移動している。

2、3回繰り返し返せば俺を避けているのだと気付いた。

理由に予想が付くだけに、何も言えなかった。

一人になりたいならそうしてやるうと、今では放っておいているのだが・・・。

「・・・・・・・・」

いや、そんなのは建前だ。

どう扱っていいのかわからねえ。

思わず髪を掻き回す。

ああチクシヨウ。

なんで俺がイチのことで悩まなきゃなんねえんだ。

ドーン島で乗船した中将　　ガープだったか。
ガープ中将はなんつーか、海軍将校と聞いて予想してたのと全然違
う奴だった。
あんまり細けえことは気にしないみてえで、よく言やあ気さく、悪
く言えば威厳がない。
アロハシャツ着てるし。
けど海軍本部中将っていうのはマジらしく、他の海兵達の空気がな
んとなく引き締まっている。
こんな普通そうなおっさんがねえ。

「お！おまえさんらが海兵になりたいという子供達だな！」

「はあ……」

一応挨拶をしておいた方がいいと引き合わされたが、正直こつこつ
タイプは苦手だ。

「スモーカーッス」

「そうかそうか。煙の坊主だな！」

俺の頭に手を置いてぐらぐらと揺さぶる。

これで撫でてるつもりかっつか子供扱いすんな。

煙になって逃げようかとも思ったが、後ろにイチがいるためそれ
できない。

イチは久し振りに俺の背中にひつついて……、つか盾にしてねえ
かおまえ？

「そっちの嬢ちゃんは？」

「……イチ」

名乗りはしたが、俺の後ろから出て来る様子はない。

「俺はガープだ。・・・怖くはないぞ?」

少しだけ困っている、というよりは残念そうな顔をしている。
たぶんガープ中將は子供好きなんだろう。

・・・しかしイチがここまで誰かを避けるのは初めて見た。

人見知りはするくせに物怖じはしない奴なんだが。

「イチ」

「・・・」

出て来いと言う意味で声を掛けたが、しがみつく力が強くなっただけだった。

「ハア・・・。すみません、こいつ人見知りなんで」

理由はそれだけじゃないだろうが、本人の居る前で問い質すわけにもいかない。

「むう・・・。残念だが仕方ないな。直にカームベルトに入る。邪魔にならないところにいるか、心配なら船室の中に入ってる」

「ツス」

カームベルトを越える時はいったん他の作業を全部ストップする。

半数が交代でオールを漕ぎ、4分の1が見張り、4分の1が大砲の準備というところか。

見張りの多さが危険性を物語っている、のだが・・・。

ガープ中將は特に気負った様子もなく船首近くで待機している。

イチは、と見ればこれまた緊張感の欠片もなく、船縁から海を覗き込んでいた。

おまえ本気でマイペースだな、ついかさつきまでと態度違い過ぎだ。

「あの中將がどうかしたのかよ?」

「・・・あの人、他の人と違うんだもの」

「違う?何が?」

「・・・空気の色」

「は？」

意味がわからん。

どういう意味か聞こうと思ったが、やめた。

カームベルトに入ったらしい。

周りの海兵の緊張が伝わってくる。

こんな中で呑気に世間話してたら邪魔なだけだ。

イチと同じように海を覗き込んでみるが、波すらないそれは見えていて面白くもなんともない。

何が楽しくてこんなもん見てんだ？

・・・ん？

「うおっ！！？」

気泡が見えた気がした、直後巨大な海王類が水面に顔を出す。とほぼ同時に巨大な黒い手が拳を海王類の頭に叩き落とした。

「・・・」

海王類は気絶したらしくそのまま沈んでいく。

一拍置いてからイチに視線が集まった。

「・・・必要なかったみたいね」

イチの視線の先は、手に砲弾を持っているガープ中将。

・・・は？

なんで投げる直前みたいな体勢をしてるんだ？

・・・まさか投げて海王類に当てるつもりだったのか？

「・・・イチ、中に入ってるわ」

「あ、ああ」

なんとなく船室に入るイチを見送って・・・。

「何をしている！！見張りに戻らんか！！」

「……はっ!」「」

ガープ中将の一喝で、俺も含めてボーツとしてた奴らが正気に返った。

イチつつーか悪魔の实の能力者って規格外だよなあ。

という認識はすぐに覆されたが。

その後何度か海王類と遭遇したのだが、その度にガープ中将が砲弾を『投げて』追い払ったり気絶させたりした。

……あの中将、能力者じゃねえくせにメチャクチャだ。

手で投げてなのに、普通に大砲で撃つより速く威力もあるって何事だ。

海軍本部の中将ってこんな奴らばっかなのか……?

やがて船としては何の被害もなくカームベルトを抜けたが……。

疲れた。

見ていただけだが精神的に疲れた。

非常識はイチで慣れているつもりだったんだが……。

「なんだ坊主疲れた顔しおって」

「……スモーカーツ」

「そうか。坊主は海王類見るのは初めてか?」

「……」

こいつ俺の名前覚える気ねえのかよ。

「……海に出たの自体、初めてツスから。海王類見んのも、船上での戦闘も初めてツスよ」

あれを戦闘と言っていいのならば。

「ふむ。その割には落ち着いてるな」

「あんたがメチャクチャ過ぎて呆れてるだけツス。……俺は戦つてねえし」

自分だけであんなもんと戦えと言われたら、きつとパニックを起こしている。

「戦闘自体は数こなしてるつもりだったんすけど……。所詮数だけだったか」

海王類のような巨大な生き物と戦ったことも、ある程度以上強い奴と戦ったこともない。

「ま、これから経験すればいいだけのことはあるが。」

「坊主はなんで海兵になろうと思ったんだ？」

「は？」

なんだいきなり。

「青二才に聞いたが、悪魔の実を食う前から海軍本部を目指していたらしいじゃないか」

青二才って誰だ？

海兵の誰かつぽいが。

「理由、すか」

そついやいつから海兵を目指したんだつたか。

よく覚えてねえが、海賊退治をやり始めたのと同じ時期だろう。

理由はどつちも、チビ共が海賊に怪我をさせられたからで……。

ああいや、違った。

「海賊がいると、笑顔が消えるんすよ」

「笑顔？」

「ローグタウンは知ってんでしょう。海賊王の処刑の前から海賊が多くて、酒場でたむろつてたり、街の奴らに因縁ついたり。まあ大怪我させられたり殺されたりつてことはなかったんすけど」

「……………」

「海賊が入ってきたら店を出てつたり、道を歩いてたら端に寄つたり。そんななおかしいでしょう。俺らの街なのに」

だから海賊がいなくなればいいと、子供だった俺は単純に思ったん

だ。

「・・・海賊が憎いか？」

「憎いつつーか嫌いッスね」

「ではロジャーはどうだ？憎いか？」

「は？」

ロジャー？

・・・ああ海賊王か。

「なんでッスか？」

「海賊が増えたのは、ロジャーのせいだろう？」

「ああ・・・」

それはそうかもしれない。

けど。

「別に海賊王だけのせいってわけじゃねえでしょう。きっかけがないであれ、選んだのはそいつ自身だ」

正直海賊王の言葉がなくても、今海賊をやっている奴らがまともな職に就いていたとは思えない。

「余計なことしてくれたとは思いつし、正直最期にしゃべらせたのは海軍の失敗って気もしますけど、もう死んでる奴じゃないッスか」
憎んだところで意味がない。

「・・・そうか」

しかしなんでそんなことを聞くんだ？

それになんか、知っている奴のことを聞くような聞き方だった。

「な」

「お！もうじきマリノフォードに着くな！立派な海兵になるように頑張れよ！俺は準備があるからもう行く」

「・・・」

言いたいことだけ言って去って行きやがった。
なんだっただんだ一体。

第11片 マリンフォードへ side・Smoker (後書き)

ガープの若い頃の口調が特徴無くて書きづらひ・・・。

エースの回想でロジャーが悪く言われ過ぎているのが気になったので、スモーカーに反論させてみました。

まあロジャーの生前の行い如何に寄っては言い過ぎではなくなりませんが。

第12片 マリンフォードへ・裏

失敗したなあ、じゃがいもの皮を剥きながら後悔する。

マリンフォードにスモーカーと向かうことになって、まあ知ってる人間の方が楽だよなあと軽く考えてたんだが……。

スモーカーは悪魔の実際の能力者になったんだった。

おかげで近くにいと背筋がざわざわする。

……ま、どうせ海軍本部に行ったら常に誰か能力者が近くにいるような状態だろうけど。

今は耐えきれなくなったら、というかキレそうになったらスモーカーから距離を取ることになっているが、そのうち慣れねえとなあ。

ちなみになんてじゃがいもの皮剥きなんぞしてるのかといえば、暇潰しのために雑用を申し出たからだ。

スモーカーも雑用はやっているが、内容は主に掃除か武器の手入れ、あとは単純な力仕事。

オレがやっているのは医務室の整理か調理場の手伝い。

家の手伝いをしてたから一通りの料理ができるってのもあるだろうが、単純に見た目の問題だろう。

お市が掃除してるところ想像したらシンデレラにしか見えなかった……。

なんか見てるだけで罪悪感わく眺めだよなあ。

そんなわけで料理の下拵えばかりしている今日この頃。

好きだから別にいいけどな。

東西南北の海から海軍本部に行くには、基本的にマリージョアで船を乗り換える方法を取る。

基本じゃないのはカームベルトを越える方法で、本当によっぽどの緊急時にしかやらない方法らしい。

あれ？海軍の船って普通にカームベルト越えてないっけ？と思ったのだが、よくよく思い出すと船底に海棲石を敷くことを思い付いたのはDr. ベガパンクだったか。

時期はわからないが、コビーの言い方では最近のような印象を受けた。

つまり約20年後。

海棲石を使った手錠や牢なんかはすでに使われてるんで変な感じがあるけど、普通は拘束具をステルス技術に使おうなんて考えつかないか。

さすが天才。

それはさておき、緊急でも何でもないのに普通はやらないカームベルト越えをする理由、は中将が許可を出したから。

・・・この時点で嫌な予感でしたんだよ。

休暇で東の海に来るような中将、っていったらガープしか思い付かなかった。

この予感は、新聞に『インペルダウン初の脱獄者』金獅子のシキ”』という記事を見て確信に変わる。

ああ絶対ガープだ。

時期が一致する。

・・・別にガープが嫌いなわけではない。

嫌いではないが、思考回路が斜め方向を向いているというイメージがある。

悪意無く面倒事を起こすトラブルメイカー。

遠くから見ている分にはいいが、関わりたくはない。

しかも・・・、ガープって子供好きだと思っただよ。

子供好き自体は悪いことではないが、ガープの愛情表現は悪い。ジャングルに放り込んだり、千尋の谷に突き落としたり、風船をくくりつけどこかの空へ飛ばしたりなんてのは愛情表現とは言わない。普通に殺人未遂、または幼児虐待と言っただ。

『海兵になりたがっている子供』なんていう触れ込みで気に入られでもしてみろ。

同じ事をされない保証はない。

スモーカーはロギア系なんでやられても平気だろうが、オレ、つかお市は防御力高くねえんだよ。

同年代の子供よりは高いだろうが、一般の成人男性と同程度だ。

放り投げられただけでも当たり前所が悪けりゃ死ぬ。

黒い手を使えば避けられるだろうが、できるだけ使わないと決めただけだ。

身体能力だけでガープから逃げるのは無理。

だから精神的に距離を置いておく。

というわけで、すまんスモーカー。

しばらく盾になってくれ。

煙なんだから大丈夫だろ。

・・・ガープに首ぐらぐら揺さぶられてるけど。

・・・大丈夫、だよな？

「そっちの嬢ちゃんは？」

「・・・イチ」

なんか興味を持たれている気がする。

年齢と外見故か、悪魔の実の能力者と思われているからか。

・・・後者っぽい。

こういうところも苦手なんだよなあ。

ルフィと同じで、外見に騙されなくて本質を見抜く。外見で騙しまくって適当に生きているオレからしてみれば天敵だ。

「俺はガープだ。・・・怖くはないぞ？」

怖がっているわけではない、とは言いつれない。

かすかに、ほんのかすかに、オレの中に恐怖がある。

敵ではないとわかってはいるのに、怖ろしい。

相手が強いからか？

それもあるが・・・。

威圧。

おそらく本人は無意識、それどころか抑えようとしているはず。

なのに隠し切れていないこれは・・・、霸王色の覇気？

ぎゅっとスモーカーの服を掴んでいた手に力が入る。

怖いという感情を、敵わないという想いを、この体になって初めて

感じた。

・・・ああ、オレ浮かれてたんだ。

お市の体と能力で、なんでもできるような気になっていた。

この世界にはもっと強い人間など、いくらでもいるというのに。

・・・真面目に訓練に参加するか。

よし。

決意を固めているうちにガープとスモーカーの話は終わったらしい。

カームベルトに入る準備でみんなバタバタと動いている。

邪魔になるかなあとは思ったけど、船縁に陣取っても文句は言われ

なかった。

ならいつか。

カームベルトってどんなにか興味あつたんだよね。

しかし身長低いと不便。

背伸びしないと海面が見えない。

隣で普通に立っている身長差約40cmのスモーカーが憎たらしい。

「あの中将がどうかしたのかよ？」

あー・・・、この時点で覇気って言っても通じないよな？

ていうか何で知ってるのかと突っ込まれるだけな気が・・・。

「・・・あの人、他の人と違うんだもの」

「違う？何が？」

「・・・空気の色」

「は？」

意味がわからんという顔をするスモーカー。

オレも同じ立場だったら『どこの電波受信してんだ』くらいは言うだろう。

固有名詞を出さずに説明するのがめんどくさい、とか思ってたらタイミング良くカームベルトに入った。

おお。

本当に波がない。

風もないからオール漕ぐ人は大変だろうけど、ちょっと面白い光景だよなあ。

・・・スモーカーに『何が楽しいんだこいつ』って顔されたけど。

・・・ん？

なんか海面の色変わった・・・？

って、うわあ！！

ザパアと海面から顔を出す巨大海王類。

反射的に、というか無意識に黒い手で拳骨を落としていた。

びびびびっくりしたびびっくりしたびびっくりしたあ！！！！

心臓バクバクいつてんだけど!?

・・・驚き過ぎたからか表情はまったく動いてないけど。

なんとか落ち着いてから振り向くと、みんな呆気に取られた顔でオレを見ていた。

やっぱり?

ガープなんか砲弾を投げる直前の姿勢で固まっていた。

周りにはたくさんの砲弾が並んでいる。

「・・・必要なかったみたいね」

オレが何もなくてもガープに任せときゃ大丈夫だったんじゃない。

黒い手使いたくなかったのに、無駄なことした。

「・・・イチ、中に入ってるわ」

こんな心臓に悪いの二度とゴメンだ。

船室に籠もって本を読んでいたが、船内の空気を緩んだこと「カームベルトを抜けたことには気付いていた。

もうすぐ着くかなあと思いつつ予想外に面白かった『グランドライ
ンのふ・し・ぎ 世界薬草毒草大全』を読み進めていたら、ドア
の外に気配を感じた。

うわぁガープだよ。

ちなみにこの本は船医が『ふざけたタイトルと内容だけど、薬学の
基礎を学ぶには最適』と貸してくれたものである。

ふざけた内容で役に立つのか疑問だったが、『あの島行ったら見た
こと無い草があったから食べてみた。人体に与える影響はx x x。
自分で確かめたから確実だよ』みたいな口語体で全編書かれてい

る以外内容はまともだった。

これで全て実体験のノンフィクションじゃなければ作者を尊敬できるんだけど。

紙一重で天才だった人なのか、天才の紙一重だった人なのか……。

……って現実逃避してたらドアをノックされた。

ガープなら勝手に入ってくるかと思っただが。

「……はい？」

今からでも逃げようと思えば逃げられるが、後から上官権限とかで呼び出される方がめんどくさい。

だったら今のうちに、他の人間ががいないうちで話を済ませてしまった方がいいだろう。

能力のことを聞かれるに決まっているのだから。

「ガープだ。ちょっといいか？」

「……」

嫌だっと思ったら帰るのか？と思いつつ頷く。

士官学校の入学前に、能力の実演か説明を求められるのは予想していた。

当たり前だが、今までに前例のない能力なのだから。

「嬢ちゃんは、海賊が憎いか？」

「……」

って予想外の質問された！？

ていうかそれ無神経過ぎない！？

普通の親を殺された9歳児だったらトラウマ決ってるよ！？

「……別に、憎くはないわ」

これは本当。

そこまでの感情はない。

「だが・・・」

「ガープは何か言いかけて止める。言葉を選んでいるのだろう。」

「どの言葉を選んだとしても、その話題自体が9歳児にはダメだと思うけどな。」

「・・・パパとママを殺した人達は、もう居ないもの」

「3割減で懸賞金を受け取りました。」

「全部で300万ベリー弱。」

「高いのか安いのか・・・。」

「まあ自分の生活費に困らなくて済むのはありがたい。」

「士官学校って食と住しか保証してくれねえんだよ。」

「・・・あなたは海賊が憎くて海兵になったの？」

「違う」

「即答された。」

「なんかちよつと必死な感じもする。」

「・・・イチも同じよ？憎んでも意味がないもの」
「海賊全体を憎んだところで、意味はない。」

「・・・パパとママを殺した人が悪いの？海賊が悪いの？大海賊時代を作った海賊王が悪いの？止められなかった海軍が悪いの？何にもしてくれない世界政府が悪いの？」

「・・・」

「・・・ぜんぶ全部憎んで、それで何になるの？」

「子供の言うことじゃねえなと思いつつ、オレの本心だったりする。」

「きつと全部が、少しずつ悪い。」

「だから憎むことができない。」

「対象が広過ぎて、多過ぎるから。」

全部憎んでいたら疲れてしまう。

「……イチは何も憎んでないわ。ただ、悲しいだけ」

「……そうか」

ていうかなんでそんなこと聞いたわけ？

「……どうし」

「お！船が着いたな！忘れ物しないように気をつけろよ！」

「……」

テメエ言いたいことだけ言って去ってくんじゃねえよ。

つかオレの能力どうでもいいわけ！？

第12片 マリンフォードへ・裏（後書き）

主人公にはスモーカーとは逆の極論を語らせてみました。

2011/05/03 追記：

誤字の指摘をいただいたので直しました。

蛇足メモ：

この時点で主人公9歳130cm、スモーカー14歳170cm。
最終的には主人公は160cmくらいの予定。

戦国時代の女性としては高過ぎるけど、ONE PIECEのキャラとしては低い。

ナミより10cm近く低いのはおかしいので変えるかも。

スモーカーは190cm、大将ズは300cmくらいの予想。

第13片 上層部の思惑 side・Garp

「……………」

自宅に向かっていた足を方向転換させ、海軍本部に行き先を変える。コートは着ていないが、俺の顔を知らない人間の方が少ないから大丈夫だろう。

センゴクの部屋に向かうが、特に誰にも呼び止められなかった。

「入るぞ」

「…………ノックをしろ。返事があるまで入るな。海軍本部に来る時はコートを羽織れ」

「固いこと言うな」

恒例のようなセンゴクの小言を聞き流しソファに座る。

「土産だ。茶あ淹れてくれ」

「……………はあ」

センゴクは溜息を吐きつつも、手元の書類を片付け電伝虫でどこぞに茶を頼んだ。

それが届くまで会話はない。

やがて茶が届けられ、センゴクは部屋の内鍵を閉めた。

「…………金獅子のことか」

「違つぞ」

「そうか。違…………、違うのか!?!」

「何言ってるんだ。あいつはしばらく仕掛けてこないだろうと、電伝虫で伝えただろうが」

何を聞いてたんだ?

「……………。そうだな。おまえに普通を求めた俺が悪かった。

それで、何の用だ?まさか土産を渡すためだけに来たとかは言わな

いだろうな」

「言うか。俺だってそこまで暇じゃない」

「2週間も休暇を取った奴の言葉とは思えないな」

「……………」

こいつ、忙しい時期に休んだのを根に持っているな。

だが俺だって、休んでいる間に色々問題が起きただけで、問題が起これるとわかっていて休んだわけではない。

「報告は受けてるんだろう？東の海から来た、士官学校に入る子供達のことだ」

「ああ。どっちも能力者の子達だな。年齢が足りないから、士官学校に通いながら能力の使い方を学ばせるつもりだが…………。その子達はどうした？」

「ちよつと話をしたんだが…………。思想が危ないかもしれないな」
「なに？」

この大海賊時代、海軍から海賊に墮ちる人間もいる。

そのほとんどが欲から墮落する人間だが…………。中には理想故に、墮ちる人間もいる。

「煙の坊主の方は、ちよつと理想を追い過ぎている感じがしたな。

ま、あの年頃じゃその方が普通なのかもしれないが」

世界貴族や各国の王族の実態を知れば、シヨックを受けるかもしれない。

「とはいえ問題はないだろう。良くも悪くも真っ直ぐな坊主だ。悩んでいればすぐわかる」

「…………ふむ。一応注意するように言っておくか。なにせ自然系能力者だ」

悪魔の実の中でも最強種と言われる自然系だ。

…………煙に何ができるのかはよくわからんが。

「少女の方もか？」

「いや、あつちは正義がない」

「ない？犯罪の手を染めそうという意味か？」

「いや違う。上手く言えんが……。正義がないと言うより、自分がないと言うか……。うむむ、これだと違うな。善悪の観念はあるし、自分の意見も持っている。だが……。なんとなく虚ろな感じがした。心はあるのに、心の真ん中だけがすっぽり抜けている」

「……。それは、親を亡くしたばかりだからじゃないのか？」

「そうかもしれんし、そうじゃないかもしれん。……。しばらく様子を見た方がいいだろう。俺のカンが当たっているのなら、あの嬢ちゃんは近くの人間の影響を受けやすい。どう変わるか予想が付かん」

「……………」

センゴクは何やら考え込んでいる。

……。センゴクも大変だな。

本来人事に関する決定権を持っているのはコング元帥だが、ここ2年はマリージョアに詰めっ放しだ。

政治的なことが絡んでいるから仕方ないとはいえ、そんな状態で采配が振れるはずがない。

よって大将の中で最もこういうことを得意とするセンゴクに全権が預けられているんだが……。

こういう時、地位なんて持っているもんじゃないと思う。

中将くらいの方が自由に動けていい。

「なあセンゴク。あの嬢ちゃん、俺に預けてみないか？」

「無茶言つな。おまえがどうやって能力の使い方を指導する？」

「海兵に必要なのは悪魔の実の能力じゃないだろう。むしろ能力が使えない時の戦い方も必要じゃないか？能力が暴走しても、俺なら

止められるしな」

もっとも能力を暴走させたのは一度だけで、原因もはっきりしている。

どちらかと言えば制御はできている方だろう。

「・・・決定は変えん。おまえの言う通りなら、尚更おまえに預けられるか。おまえみたいな性格になったらどうしてくれる」

「ケチ」

「・・・」

ビキ、とセンゴクの額に青筋が浮いた。

「とにかく！決定は変わらん。予定通りスモーカーはクザン中将、イチはサカズキ中将預かりとする！」

「ふーん、だ。ま、青二才共のお手並み拝見だな」

俺のところに来ないのは残念だが、能力の相性的にも性格的にも悪くはない選択だろう。

「少し気に掛けるよう伝えてくれ。・・・ドラゴンの時みたいなのは、ゴメンだからな」

「・・・ああ」

理想故に、正義故に争い合うのはきつい。
それが家族なら、なおさら。

第14片 顔合わせ(1) side・Smoker

「おいコラ待て。てめえイチ！うるちよろするんじゃねえ！！」
とっさにイチの首根っこを掴んで引き戻す。
なんでこんなことになってんだ……。

マリンフォードに無事に着いた。
それはいい、つかそうじゃなきゃ困る。
入隊手続きつーか入寮手続きを済ませた。
まあ当たり前の行動だ。

実際に訓練や講義が始まるのは3日後らしい。
明後日北の海から着く予定の船にも入隊者がいるらしいから、ま
めて済ませたいという気持ちはわかる。
イチが買い物に行きたいと言い出した。
……寮の備品は一通り揃っているし食事は用意されるが、心情は
わからなくもない。

ここまではまあ納得できる。
納得できないのはなんで俺がそれに付き合わされているのかだ。

寮は当然、男女で別の棟になっている。
俺としてはそこで別れて、次に会うのは3日後のつもりだったのだ。
今日は自主訓練をしてから寝ようと、そう思っていたのに……。
寮の管理人から呼び出しをくらった。
一人で買い物に出掛けようとしていたイチを見咎めた女子寮の管理
人が、男子寮の管理人に連絡を寄越したらしい。
一人で行かせるのは不安だからついて行ってやれと。

・・・買い物くらい一人でさせるよ。

ここはローグタウンより遥かに治安が良いマリンフォードで、海軍本部は島のどこにいても視界に入る。

つまり迷子になる可能性は低い。

仮になったとしても、どの人間に聞いたところで道は教えてくれるだろう。

付き添いは必要ないと、そう思うのだが・・・。

・・・まあ、別に用事があるわけではないから諦めるか。

俺も買つときゃなんねえもんがあるだろうし。

マリンフォードの商店街には、東の海では見たこともないようなものが多くあった。

だから物珍しいのはわかるがうるちよろするんじゃねえ。

人通りの多さもローグタウンとは比べ物になんねえんだよ！

「・・・過保護」

「ああ？」

誰のせいだ。

「・・・手」

「手？」

がどうした？

差し出された手を見るが、別に怪我をしているわけでもなんでもねえ。

「・・・つなぐ？」

「・・・」

確かに、迷子防止にはそれが一番なのかもしれない。

・・・なんか視線を感じる。

悪意は感じねえが……。

「つか、おまえ何買いに来たんだよ？」

「……冷蔵庫」

「冷蔵庫？」

なんだってそんなもんを？と思ったが、イチは実際に小型の冷蔵庫を買った。

持ち帰れない大きさではないが、寮まで運んでくれるらしい。

イチが士官学校生ということにもものすごい驚いていたが。

他にもコーヒーマルやカップ、豆、砂糖壺などを買っていた。

食堂に行けば飲み物も出てくるのになんでわざわざ。

「もういいのか？」

「……あとタオル」

「ああ俺も買っとくか」

訓練が始まれば大量に消費するだろう。

士官学校にいる間、生活に必要なもんは一通り支給されるが、それは最低限のものだけだ。

それを知った時には金貯めといてよかったと思った。

賞金稼ぎの真似事で稼いだ金は、家に置いてきたつもりだったが母親に突き返されていた。

イチ経由で船が出航してから渡させるという方法で。

……その際ム力つく手紙が付いていたがとりあえず無視だ。

必要そうなもんを一通り買って寮に戻る。

ちよつど夕食時だったので、部屋に荷物を置いてすぐ食堂に向かったんだが、ここでも何故か注目された。

ガキがめずらしいのか？

「・・・おいしい」

「・・・そうか」

食事は朝昼夕とすべてバイキング形式。

メニューは多岐にわたり、見たことねえもんが半分くらい。

不味くはねえが馴染みのない味。

イチは気に入ったみたいだが。

「明日はどうすんだ？」

「・・・図書室に行ってみるわ」

「ふうん」

俺は開放されてる訓練場に行ってみるか。

入学初日というか施設の案内がある日。

俺は寮の管理人に呼び出されて女子寮の入り口に来ていた。

・・・なんでだよおかしいだる目的地は同じ敷地内っつーか目と鼻の先だぞ!?

なんでわざわざ迎えに来なきゃなんねえんだよ!?

「あなたがスモーカー君ね？」

「ああ?」

内心文句を言いつつ入り口で待っていれば、出てきたのは俺より年下でイチより年上だろう女。

寮から出てきたってことはこいつも士官学校生か。

よく見れば後ろにイチもいる。

「私はヒナ。北の海から来たの。能力者同士、これからよろしくね」

「あ、ああ」

差し出された手を握る。

つか聞き流してたが、『能力者同士』？

「現在士官学校に籍を置いている能力者は私達3人だけなのでつて。仮配属されているのも、3人」

「仮配属？」

「あら。聞いていないの？簡単に言っ飛ばせば、実戦訓練よ。能力者や、めずらしい武器を使う人は、士官学校に通いながら上官に師事するのですって。誰かはまだ聞いていないけれど、私達の上官は悪魔の実の能力者でしょうね」

「へえ」

そんな制度があるのか。

「今日士官学校の説明が終わったら、上官に引き合わされるはずよ。それよりそろそろ行きましよう。いくらすぐそことはいえ、初日から遅れたくないわ」

「ああ」

しかしこいつ、イチとは真逆の意味でマイペースだな。

第14片 顔合わせ(1) side・Smoker(後書き)

ヒナの出身地がわかったら直します。

北の海にしたのは、ルーキー達の出身地からのイメージ。

あくまで私のイメージなので根拠はまったくないです。

北の海：バルト海（北欧）、西の海：地中海（南欧）、南の海：インド洋、^{オセアニア}東の海：カリブ海？アジアの気もする

・・・ローは北欧っぽくないですが、シロクマが居るなら北極圏かと。

医学と潜水艦・・・ドイツ？

こんなにはつきり実際の地理に対応していませんが。

「や」

「…………… ああ、2年前の丸眼鏡」

「殴るよ?」

まったく。

かーわいくないったら。

「あんたが俺の上官ツスか」

「そ。口の利き方には気をつけなさい」

「あんた能力者だったんスか?」

「……………俺の話聞いている?」

「?聞いているツスけど?」

「……………」

もしかしてこいつ、敬語使えないだけ?

……………この歳じゃ有り得るか。

ま、いつか。

その辺のことは士官学校で教えるだろうし。

「いちお、自己紹介しとくよ。俺はクザン。階級は中将。ヒエヒエ
の実の氷結人間。おまえさんの仮上官」

「はあ。俺はスモーカーツス。モクモクの實の煙人間。……………仮っ
てどういう意味ツスか?」

「そのまんま。おまえさんが士官学校卒業するまでってこと。……………
まあ仮配属先にそのまま配属されることが多いんだけど。卒業する
時点で正式に決定される」

「へえ」

あんまり興味なさそうに頷かれた。

「どこに配属されようが、やることは一緒じゃないツスか」

「・・・まあそうだけどね」

それでも上官によって色々違う。

「ま、適当にがんばんなさいな。卒業できなくても引き取ってあげるから、安心していいよ?」

「・・・それでいいんスか」

「自然系ってだけで使い道はあるからね。頭パーでも」

「・・・」

ひくり、とスモーカーの顔が引き攣った。

「ん?知らない?ていうか聞いてないの?仮配属された人間って卒業できないこと多いんだけど」

「?なんでツスか?」

「そりゃ、実践に引つ張り出されるからに決まってるでしょ。今はともかく、使えるようになったらしょっちゅう講義休む羽目になるし、そもそも戦闘に特化するなら知識は要らないしね。本人のやる気がなくなんのよ」

「・・・はあ」

いまいち納得していない顔をしている。

まあ無事に卒業してくれるなら、それに越したことはない。

「頭パーだと大佐止まりだから、最低限の勉強はしといた方がいいんだけどね」

准将以上は書類仕事も重要になってくるんだよ。

「で、仮配属って何するんスか?」

「ん・・・」

ぶつちやけ、仮配属って配属先の人間にすべてを任されてるんだよね。

今回は『能力の使い方教える』という指令が来ているけれど、それ以外は何も言われていない。

実戦に連れていくか訓練だけにするか、訓練にしても能力だけか体術もか、六式や覇気を教えるかどうか。実は何も考えていない。

「とりあえず、今のくらい能力を使えてるのが見る。具体的には俺の部下と模擬戦。実戦に連れてくかどうかはその後で決める。・・・そういえばおまえさん、武器って何か使うわけ？」

「いや、基本的に素手ツスけど」

「そ。何か試してみたいのあったら申請出しときな。大抵のもんは揃ってるから貸してくれる。・・・何か質問は？」

「その模擬戦って今からツスか？」

「いや明日。士官学校の講義終わったら第4訓練場に来な。相手はその時紹介する」

「仮配属って全員同じことするんスか？」

「・・・さあね。配属先に任されてるから何が聞きたいのかは、だいたい予想が付く。」

「妹ちゃんは年齢が年齢だからね。訓練だけで実戦には連れてくれないんじゃない？」

「・・・よな？」

いくらサカズキでも。

「妹？・・・もしかしてイチのことツスか？」

「え？違うの？」

お兄ちゃんとか呼ばれてないっけ？

「家が近所だっただけツス」

「へー・・・。その割に仲いいっつか過保護だね」

「・・・・・」

ものすごく不服そうな顔をされた。

「他に質問ある？」

「・・・サカズキ中将ってどんな人ツスカ？」
「やっぱり過保護じゃん。」

・・・しかし正直に答えていいもんかどうか。

「・・・まあ、ドが付く真面目人間だね」
嘘ではない。

「いも・・・、じゃなかった。イチちゃんが心配？」

「・・・まあ。大丈夫だろうとは思っくんすけど。・・・あいつあれ
で人見知りするし」

「ふうん」

いいお兄ちゃんだったこと。

血が繋がってなくてもね。

・・・本当は、二人一緒に俺が引き取ってあげたかったのだ。

ていうか仮配属できる能力者は一人までだなんて知らなかった。
後から知ったんだけど、能力者の配属基準ってのはちゃんとあって、
上官が能力者ってのは当然として、能力の種類で配属先が決まる。

第一に上位種。

これは滅多にない、というか今まで一度もなかったらしい。

海兵になる能力者の人数考えたらそんなもんだ。

第二に下位種でない同系種。

これは基本的に動物系に適用される。

第三に能力の相性が悪い、上官からしてみれば簡単に勝てる能力。

この全部に当て嵌まるような人間がいない時に限って、覇気が使える
非能力者が選ばれることもある。

俺はこれでガーブさんが最初の上官だった。

要は暴走しても止められる人間を選ぶってことなんだけど・・・。

なんで選りにも選ってサカズキ？

どう考えても教育係には向いてないと思うんだけど。

しかもちっちゃい女の子相手。

・・・イチちゃん、泣いてなきやいいけど。

「・・・心配なら見に行ってみる？」

俺も心配だし。

「？別に訓練で危険も何もねえでしょう？」

「・・・」

まあそうだけど。

いやでもサカズキだし・・・。

「どうせ夕食ん時に会うんすから、今行かなくても」

「・・・そ」

ま、どうしても駄目そうだったら転属願い出すでしょ。

・・・サカズキの方が。

第15片 顔合わせ(2) side・Kuzan(後書き)

「大丈夫だとは思っけれど、人見知りをするから心配だ」

「人見知りをするから(しばらくは)大丈夫だろう」

日本語って難しいから面白い。

第16片 顔合わせ(3) side・Sakazuki(前書き)

赤犬の口調が本気でわかりません・・・。

おかしいところが多々あるとは思いますが、ご容赦下さい。

海賊と戦うだけが海軍ではない。

若手の育成も大切だ。

次代の人材がなければ、今いくら悪を滅ぼしたところで意味はない。

・・・が、しかし。

「・・・イチ、です。よろしく願います」

「・・・」

どがあしろ言うんじゃ。

予想より更に小さい体を見下ろして、思わず溜息を吐き出した。

9歳だとは聞いていた。

女だとも聞いていた。

だがしかし、わしの3分の1程度の身長とは思わなかった。

何をさせればいいのか、何ならできるのかがわからん。

「・・・わしはサカズキじゃ。今日からおまえの上官になる」

「・・・よろしく、願います」

意味がわかってきているのかいないのか。

見上げてくる瞳は聡明そうだが、その顔は頑是無い。

・・・まあ、わし相手に怯えずに真っ直ぐ見上げる度胸は認めよう。

「能力者じゃあ聞いたが、何の能力じゃ？」

「・・・ネンネンの実」

「ネン？」

年、燃、捻・・・、念、か？

黒い手のようなものを操ると聞いている。

「何ができる？見せてみい」

「……………」

ずるりと床から生えた手に、思わず瞬く。

その手はわしの机から書類を一枚持ち上げ、しばし弄んだ後に元に戻し、そのまま床に引っ込んだ。

…………ふむ。

「一度にいくつ出せる？」

「…………2本まで、だったら」

つまり自分の手と同じように動かせるとみるべきか。

しかし先程の手は指が異様に長く、鋭く尖った爪をしていた。

細かい動きは無理で、その代わり攻撃力は高いのだろう。

「……………」

「っ！？」

手元にあったペンを投げつける。

左肩に当たる軌道。

刺さってもたいした怪我にはならないだろう。

「ダメ…………っ！」

「…………自動でも動くか。そんな代わり制御が甘くなるようじゃのう」
床から生えた2本の手。

片方はペンを受け止め、もう片方はわしを押し潰す寸前で止まっていた。

…………わしは自然系だから攻撃されても構わなかったが、机の上の書類を考えると止まってくれてよかった。

「大きさも変えられるようじゃの」

「……………」

ペンを受け止めたのは女か子供のような細い小さな手だが、わしに攻撃をしようとしたのは5、6mはある大きなものだった。

「それだけ動かせるなら充分じゃ。次の出撃には着いて来い。それまでは体力作りでもしちよれ」

「・・・はい」

こくり、と小さく頷く。

足手纏いにはなるだろうが、死ぬことはないだろう。

予想外に赤犬がひどい人間に見える・・・。

実際は主人公の方がよっぽどひどいことを考えているのですが。

赤犬は悪い意味で平等な人だと思います。

女だろうが子供だろうが、海軍に入った時点で殺し殺される覚悟はしているはず。

怪我也傷も負って当たり前。

能力的にできないのは仕方ないが、今更怖じ気づくのはただの甘えだ。

実はギリギリまで赤犬を子供好き(だけど不器用)にするかどうか悩んでいました。

第17片 顔合わせ・裏(1) (前書き)

前半は捏造士官学校の説明なので、読まなくても支障はまったくありません。

第17片 顔合わせ・裏(1)

士官学校「エリート」という認識があったんだが、この世界では別に
そうでもないらしい。

いやエリートでないとと言うと語弊があるか。

士官学校を卒業できれば即少尉だし、卒業生のほとんどは佐官にな
っている。

逆に言えば、佐官までにしかなれていない。

中退者の方が階級が上ってどうなんだ……。

……まあこれは、士官学校の成り立ちに関係するんだけど。
そもそもは海軍将校向けの専門学校のような形で開設された。

この世界の海軍は基本的に徒弟制度。

上官が必要な知識、技能を全て教える。

でもまあ人間得意不得意があるわけで。

というか強さだけで出世できる海軍の制度では苦手な分野の方が多
い上官がほとんどで。

当然それを補うための部下が配属されてはいるのだが、人に教えら
れる程じゃなかったり人に教えるのが致命的に下手だったり。

……専門家ほど『なんでわからないのかわからない』っていうの
はどこの世界も共通らしい。

教えるのが上手い専門家も中には居るが。

そんなわけで最初は、将来有望なのは別の部隊に預けたりしていた
らしい。

ここで問題が起こった。

誰だって、せっかく育てた部下を余所にやりたくはない。

優秀なら、なおさら。

返せ返さないで争いになったり、勉強中とはいえ実践に出ているのだから死ぬこともある。

そんな時に責任の押し付け合いになったり。

で、当時の元帥だか誰だかが学校の設立を思い付いたらしい。

怪我や高齢で前線を退いた人間の雇用にもなつて一石二鳥！・・・とまで考えたかどうかは知らんが。

学校がある程度軌道に乗ったところで、新人　これから海兵になろうとしている本当の意味での新人と、支部から本部に異動になった海兵も受け入れるようになった。

この時点で名前が『士官学校』になったが、すでに海兵になつていても通うことはできる。

割合としては本部の海兵が1、支部から来たのが7、丸っ切りの新人が2というところか。

・・・支部からの人間が多過ぎると、誰でも思うだろう。

入学条件が厳しいので、入れるだけの実力を付ける間支部で経験積んだ方がいい、というのもある。

主に金銭的な問題で。

だがここまで支部からの割合が増えたのは2年前から、つまり大海賊時代が始まってから。

本部、というか世界政府から『使える人材を寄越せ』とせつつかれて実際に送つたはいいが、送られた本部にそれを割り振る余裕がない。

よって一時的に士官学校に入れて放置。

デスマーチか。

・・・まあ、受け皿があるだけマシなんだろうが。

ここで最初の疑問『卒業生より中退者の方が階級が高い傾向にある

のは何故か？」に戻る。

中退者と言うから誤解を与えるが、要は引き抜きなのだ。戦闘能力が高かったり、将来有望そうだったり、専門知識を身に付けている人間は在学中だろうと仮配属という形で実戦に出る。

実戦に出ている間授業には遅れるし『このままウチ入れ』と上官から勧誘されるし給料上がるので学校を辞めてしまう。

優秀な人間ほど卒業できない皮肉。

といっても卒業生が劣っているわけではないし、卒業後に配属先で冷遇されるということもない。

むしろ重宝される。

万能タイプだから。

・・・器用貧乏とも言っが。

士官学校って、影で『副官養成所』って呼ばれてるんだよな・・・。

ちなみに士官学校は単位制で、3年以内に卒業できなかった人間は退学。

退学になって受け入れ先がないと雑用からだが、その場合は海軍自体を辞めてしまうのがほとんどだ。

東西南北の海で賞金稼ぎになったり、戦いとは関係ない職に就いたり。

海軍将校の恐ろしさを嫌というほど知っているので海賊になることはないらしい。

さて。

悪魔の实の能力者には、絶対に仮配属制度が適用される。

当たり前といえは当たり前だ。

士官学校に悪魔の实の能力者はいない。

よって能力の使い方を教えられる人間もいない。
だから仮配属されたのはわかる。

それはわかるが！

なんでオレの担当が赤犬！？

明らかに人選がおかしいだろうが！！

どう考えても子供にも教えるのに向いてねえよ！！！！

チクシヨウいつか覚えてやがれ人事部！！

あるのか知らねえけど！

「・・・・・・・・」

冷静に考えてみれば、納得できる選択ではあるのだけど。

スモーカーの担当は青雫、ヒナの担当は黄猿。

スモーカーは青雫と同じロギアで、煙。

周りの空気ごと凍らされれば動けなくなる。

ヒナの能力はどちらかと言えば近接格闘向き。

上手く使えば防御に使えるだろうが、現時点でそこまで制御はできていないだろう。

だから黄猿に遠距離からレーザーでも撃ち込まれば手も足も出ない。

オレの黒い手は近中遠どのレンジでも使えるが、赤犬のマグマは氷や光と違って触れた方が怪我をする。

ついでに赤犬は子供相手でも容赦しねえだろ。

暴走した時に殺せる人材を、という上層部の思惑があからさま過ぎていつそ清々しいわ。

内心やさぐれながら赤犬を見上げていると、思わずといった感じで溜息を吐かれた。

溜息を吐かれた。

・・・黒い手でビンタかましてやりたい。
いや待てオレ冷静になれ。

あれは上官だ、つか赤犬だ。

やったら絶対反撃されるっつか殺される。

睨まないように気をつけながら赤犬の言葉を待つ。

・・・スモーカーとヒナは今頃どうなってんのかなあ？

「能力者じゃあ聞いたが、何の能力じゃ？」

「・・・ネンネンの実」

「ネン？」

まあ、前例がない上にどんな能力か想像できない名前だよな。
どうせ報告はあがってんだろっけど。

「何ができる？見せてみい」

「・・・」

攻撃していい・・・はずないか。

無難に机の上の書類を持ち上げて元に戻す。

この程度ならお市化が進むことはない。

「一度にいくつ出せる？」

「・・・2本まで、だったら」

ということにしておこう。

実際には100本くらいなら出せるけどな。

けどその分、一つ一つの大きさが小さくなるというか巨大化できない。
い。

細かい制御もできなくなるし、完璧に操るには2本が限度。
だから嘘ではない。

・・・つて、は!?

「ダメ・・・っ!」

「・・・自動でも動くか。そんな代わり制御が甘くなるようじゃのう」

あああ危なっ!!

ついうっかり殺りかけた!

ロギアに効くのか知らねえけど!

いきなりペン投げてくるんじゃないよ!!

しかも今確実に『多少の怪我は許容範囲』とか考えてただろ!

怪我はしねえけど殺しかけたじゃねえか!!

・・・いやオレも、普段はこのくらいで殺そうとしたりしないよ? ただ赤犬に対してはいい感情がないっていうか警戒をやめられないっ! かで黒い手が過剰反応しただけで。

「それだけ動かせるなら充分じゃ。次の出撃には着いて来い。それまでは体力作りでもしちよれ」

「・・・はい」

いきなり実戦かあ。

ま、すでに海賊を殺しているから、今更なんだけどね。

第17片 顔合わせ・裏(1) (後書き)

「デスマーチ」

直訳：死の行進

IT用語(意識)：失敗するってわかっているのにやめられないプロジェクト。主に期間的な意味で。残業時間を自慢し始めたら末期。

戦争中の囚人・捕虜の移動のことではないです。

どちらかといえば「ブルックスの法則が」正しい。

ブルックスの法則：「遅れているソフトウェアプロジェクトに人員を追加すると、そのプロジェクトはさらに遅れる」

第18片 顔合わせ・裏(2)

寮の食堂は男女共用、つか女子は男子寮に行かなきゃなんない。人数的にそれは仕方ないと思うんだが、寮母さんの過保護なんかなんねえかなあ。

オレが一人で行動しようとするのと止められる。

街への買い物はまあしようがねえかと思ったが、隣の建物である男子寮に行くのにそれってどうなんだ。

・・・更にめんどくせえことにヒナもそれに同調してるっぽい。

ヒナとは昨日知り合った。

わざわざ隣の部屋のオレに挨拶に来たから。

・・・それがなくても気付いていたが。

部屋で寝てたらいきなり背筋がざわわして飛び起きた。

悪魔の実の能力者、で女、そしてスモーカーの同期。

思い当たる人間はヒナだけだった。

とはいえヒナに会えたのには感動した。

ストロベリーブロンドの美少女。

美少女(超重要)。

やっぱりどうせ知り合うなら可愛い女の子がいい。

・・・これで悪魔の実の能力者でなければ尚良かったんだが。

ヒナの部屋はオレの隣。

お互いに自室にいると背筋がざわわする。

・・・スモーカーと同じ船にいたおかげで多少は慣れたけどね。

ちなみにオレもヒナも一人部屋。

たぶんスモーカーも。

寮は本来4人部屋なのだが、仮配属の人間は個室。出撃とかで就寝時間がずれたりするから。

これは本気で助かった。

協調性に欠けている自覚はある。

そのうち夜中抜け出したりする予定もあるしね。

男子寮の方は割と抜け出す人間いるんだけど、女子寮はそうでもないだろうしなあ。

実はマリソフオードには歓楽街があったりする。

ただの居酒屋から、綺麗なオネーサンの居るような店まで揃っていた。

独身男性が多いところなんてそんなもんだ。

・・・スモーカーに『絶対に行くなよ』と釘を刺されたが。

言われなくても行かねえよ。

この体でナニをどうしろと？

「イチはどうだった？」

「・・・ん」

ぼーっと飯食いながら考え事してたらヒナに話し掛けられた。

隣の席にヒナ、むかえの席にスモーカー。

この3人で飯を食っていると滅茶苦茶注目される。

子供が少ないってのもあるけど、この視線ってヒナが美少女だからだよなあ。

恋愛対象にするには子供過ぎだからただの観賞用だけ。

ヒナは12歳。

最初は支部に行くつもりだったらしいけど、悪魔の実の能力者を教育できないからって本部に回されたらしい。

男ばっかの海軍では貴重な美少女成分だ。

・・・あ、オレも一応美少女に入んのか？

「・・・サカズキ中将？ 厳しそうな人だったわ
いきなり攻撃されたし。」

「ふうん・・・。ボルサリーノ中将が言っていたのだけど、あんまり
厳しいようなら転属願いを出してもいいらしいわ」

「・・・」
思わず目を瞬かせる。

転属願いのことは知っていたが、『厳しいから』って理由で受理さ
れるはずがない。

悪魔の実の能力者がめずらしいからか？

・・・いや、赤犬が『厳しすぎる』と有名なせいか。

「・・・厳しいけれど、理不尽な人ではないわ」

赤犬は誰よりも自分に厳しいからな。

これで青雫みたいな態度だったら刺している。

「そう？ ならいいのだけど・・・。スモーカー君の上官は？」

「あ？ あ・・・」

ヒナの興味がスモーカーに移ったので飯に集中する。

マリンフォードはマリージョアの近くなので、世界中のものが集ま
る上に和風趣味が多い。

なので醤油と味噌が普通に使われている。

海軍入ってよかった・・・っ。

こっそり感動しつつスモーカー達の話聞いていけば、しばらく模
擬戦で実力を確かめつつの訓練らしい。

いきなり実戦に出るのはオレだけか。

「イチは明日から何をするの？」

「・・・体力作り」

をしとけと言われた。
なんとなく『しばらく放置』っぽい印象を受けたが、それならそれで有り難い。

試してみたいこと、というか試してみたい武器がある。

黒い手を使わないで済ますためには、武器が必要だ。

お市の武器といたら双頭雑刀だろう。

借りる申請はすでに出してある。

・・・この世界に存在すると思わなくてもものすごく驚いたが。

「あらかやっぱり、そうなのね」

「・・・?」

何が？

聞こうと思った時には次の話題に移っていた。

・・・まあいいか。

しかしヒナとスモーカー、ほぼ初対面のくせに普通に話してるよな。というかヒナがスモーカーに興味を持っている？

・・・なんとなくイラツとするのは何故だろうか？

とりあえずスモーカーは痛い目を見ればいい。

ぼーっと二人の会話を聞いているというか聞き流しているうちに、二人とも食事が終わったらしい。

ヒナに付き添われて部屋に戻る事になった。

・・・いや付き添い要らんのだけど。

「おやすみなさい、イチ。夜更かししちゃダメよ」

「・・・おやすみなさい」

お姉さんぶりたい年頃なのだろうか？

・・・まあいいか。

ポフツとベットにダイブ。

「・・・」

濃い一日だったな、色々。

第18片 顔合わせ・裏(2) (後書き)

理由が納得できるので、攻撃されたことをまったく気にしていない主人公。

なので誰にも話していません。

このことをスモーカーとヒナに話したら、即転属願いを出させられていたでしょう。

第19片 出撃 *side・original* (前書き)

オリキャラ視点。

サカズキの部下で、階級は中尉が大尉。

将校ではあるが、サカズキに意見できる地位ではない。

第19片 出撃 side・original

『絶対的正義』

それは海軍が掲げる正義であると共に、サカズキ中将が掲げる正義でもある。

悪は全て滅ぼすというその理念に俺は賛同しているし、他のサカズキ中将の部下もそうだろう。

言い換えれば、俺達にとってサカズキ中将こそが正義で、その判断に疑問を抱いたことなど今までなかったのだが・・・。

「・・・」

さすがにこれは、どうなんだろう？

俺達から戸惑いの視線を向けられている人物、というか子供。

士官学校生であることを示すバッジこそ付けてはいるが、私服である淡いピンクのワンピースにサンダル。

・・・いや士官学校に制服はないから、私服なのは当たり前なのだけど。

けどスカートって、え？

・・・サカズキ中将にそれとなく聞いた奴の話によれば、『動きやすいのならば問題ない』と言われたらしい。

まあそうだけどさあ。

ものすつごい場違い。

海軍に護衛されているどっかの貴族の娘って言ったら、100人中100人が信じる。

・・・武器を持ってなければ。

イチという名前らしい子供は、自分の身長より大きな薙刀を抱えていた。

刃の部分が2重になっているめずらしい造りの薙刀だ。それなりの重量があるだろうそれを軽々と持ち歩いているのだから、まったく戦えないってことはないんだろうけど……でも9歳児だぜ？

「……ま、俺が口出することじゃないけど。イチって子供は、サカズキ中将の後ろを付いて回っている。今回は初回だから、仕事全部免除、つか見て覚えろって感じ。雑用で役に立つとも思えないしな。」

「……戦闘でも役に立つのかわかんねえし。悪魔の実の能力者だとは聞いてるけど。」

目標の海賊を撃破した帰り道、補給のために寄った島。上陸してすぐに、港の方向が騒がしくなる。海賊の襲撃があったらしい。少し遅れて本船の見張りから連絡があった。

「……運のねえ奴ら。選りにも選ってサカズキ中将が居る時に襲撃するなんて。同情には、値しないけれど。」

「ジョリー・ロジャーを本部に照会しても該当の海賊団はないらしい。結成したばかりか、小者か。」

「雑魚か。……イチ、出れるか？」

「……はっ!?!?」「」「」

「……はい」「」

サカズキ中将の言葉に慌てたのは俺達だけで、本人は平然と頷いた。

「ちよっ！待ってください、中将！いくらなんでも危険です！！」
副官がめずらしくサカズキ中将に意見する。

まあ、なあ……。

「いくら無名とはいえ、グランドラインの半分まで来るような奴らです。それに旗を偽っているだけで懸賞金が掛けられている可能性も……」

「貴様には聞いとらん。判断するのはイチじゃ。……できるな？」

「……捕まえれば、いいの？」

「いや。殺せ」

「……」

子供は港の方に視線を向け、何か考えるようにしてから頷いた。

「……できるわ」

「なら、行け」

こくと、子供はあどけなく頷いて走り出す。

「中将！？まさか一人で！？」

「全員わしが許可を出すまで手出しするな」

「中将！！」

「黙れ」

「……」

これ以上騒ぐならおまえも殺すと、そういう視線を向けられて副官は黙り込む。

……サカズキ中将の場合、脅しじゃなくて本当にやるからな。

まあさすがに完璧に放置するのではなく、全員で子供の後を追い駆けたんだけど……。

……予想外。

すでに道路にはいくつもの死体が転がっている。

あの子供は俺の予想以上に強かったらしい。

ザク、と粘土でも貫くかのように海賊の胸を貫き、新たに死体を一つ作り出す。

ふわりふわりと、踊っているかのような動きなのにその攻撃は的確で……。

数分間に、敵を全滅させた。

「能力を使わせたかったんじゃが……まあええ」

サカズキ中將にはそれが予想通りだったようで、平然と俺達に死体の始末を命じた。

反射的に体は動く、が……。

目の前の光景が、信じられない。

いくら雑魚とはいえ30人は居た。

それを10歳にもなっていない子供が皆殺しにしたのだ。

能力を使って、というならまだわかる。

けれどこの子供は純粹に体技だけで……。

しかも返り血一つ浴びていない。

場違いだと、思った。

幼い、無邪気なだけに見えるこの子供が。

血腥い戦場にいるのが、この上もなく場違いだった。

……この場を作り出したのは、この子供だというのに。

第20片 出撃・裏

初めての出撃です。

「……………」

正直ものすげえテンションが低いんだが。

だって講義受けてる最中にいきなり『30分で準備して港まで来い』
と言われてみる。

寮から港まで普通に20分は掛かるんですけど？

文句を言う時間も惜しかったため、速攻で寮の部屋に戻って適当に
荷物詰めて双頭薙刀ひっつかんで港に走った。

たぶん30分以上掛かっていたが、赤犬は何も言わなかった。

全力疾走したせいで肩で息をしてたからな。

無茶を言ったことに気付いたんだらう。

……まあ赤犬のフォローをするのならば、自分の感覚で物を言っ
ただけだ。

常に出撃用に荷物を纏めてあるのは当然のことで、そして同じ距離
でもオレの3分の2程度の時間で歩けるのだらう。

歩幅の違いもあるが、正義のコート羽織ってると勝手に道空けてく
れるからな。

自分なら30分も掛からないから同じことを要求しただけだ。

悪意があつてしたわけではない。

……身長差考えるとは言いたいが。

そんなわけで、船に着いた時にはすでに疲れていた。

出航するまで宛がわれた個室で休んでいていいと言われ、遠慮なく
休んでいたんだが……。

やっべ、服と靴忘れた。

いや普段着はちゃんと持って来てるよ？

ただ訓練用の服というか汚れてもいい服を忘れて、靴にいたっては今履いているサンダルだけだ。

「・・・・・・・・」

洗濯って毎日できるんだろうか？

いやその前に赤犬が怒りそうな気が・・・。

まあこの心配は、雑用とかが免除されたので杞憂に終わったが。

今回は初回なので、赤犬の仕事ぶりを見ているだけでいいらしい。最初から敵の前に出されると思っていたから驚いた。

当然の判断だと、後から気付いたが。

艦の操縦において、オレはまったく役に立たない。

いやまったくではないかもしれないけれど、単純な力仕事だと他の連中の2〜3倍の時間が掛かる。

黒い手使えば別だけど、使いたくない。

そして海上の戦闘でも、オレは役に立たなかった。

船同士の戦闘だと砲撃の撃ち合いがメインだからだ。

普通はその後、相手の船に乗り込んでの戦闘になるが、赤犬の場合
は違う。

火山弾撃ち込んで終わり。

・・・殲滅前提の戦い方だよな。

赤犬らしいけど。

ホントにオレ見てるだけで何にもしてねえなあ。

別に戦いたいわけじゃねえからいいけど。

実際に艦を動かすところを見るのは結構面白いし、赤犬所有の本を勝手に読んでいいと言われたので勝手に読んでいる。普通に講義を受けているより楽しい。

が。

正直テンションはただ下がりだ。

この艦飯が微妙に不味いんだよ。

え？軍艦つてコックが乗ってるもんじゃねえの？

・・・乗ってはいるけど人手が足りないので海兵が交代で手伝いをしているらしい。

だから『微妙に』不味いのか。

コックや船医といった専門職は、艦の大きさによって乗せなければならぬ規定数がある。

だがそれは本当に最低限の人数で、通常はその倍は乗せている。

けど、赤犬が乗せるはずねえよなあ。

・・・飯が不味いと士気が下がるんだけど。

1週間も掛からねえ出撃だから我慢するけどさあ。

あー、早く帰らせてえ。

寮の飯は普通に美味しい。

・・・そういう時に限って面倒ごとに遭遇するんだよね。補給のために寄った島で、海賊の襲撃にあった。

・・・選りにも選って赤犬がいる時に襲撃とかアホかと思う。

全滅かなあと考えていたら赤犬の視線がこちらを向いた。
ん？

「雑魚か。・・・イチ、出れるか？」

「「「はっ!?!?」「」」

「・・・はい」

周りの連中は驚いてるけど、陸上で戦うんだっただけ。副官さんがものすげえ反対してるけど。

と、重要なことを聞いてなかった。

「・・・捕まえれば、いいの？」

「いや。殺せ」

「・・・」

港の方の気配を探る。

悪魔の実の能力者はいない。

覇気を使える人間もいないようだ。

捕まえるんだっただけ一人じゃ無理だけど、殺していいなら簡単。

「・・・できるわ」

「なら、行け」

りょーかい。

後ろで揉めてる気配がするけど、こっちはストレス溜まってるんだよ。

八つ当たりしていい機会を逃す手はない。

それに、武器を使った時のこの体の性能を試しておきたいし。

隠れもせず堂々と海賊達の前に立つが、相手は不思議そうな顔でオシを見るだけ。

まあたとえ武器を持っていようが、子供一人相手にはこんな反応か。

・・・都合だ。

ザクツと一番近くに居た奴の胸に薙刀を突き刺す。

思ったよりも簡単に刺さった。

「・・・は？」

不思議そうな顔で自分の胸を見下ろしている男。
その体ごと薙刀を振り払う。

「……テメエ！」「……」
ここでやつと、海賊達はオレを敵だと認識したらしい。
遅えよ。

それぞれが武器を取り出すが、まるでそれがスローモーションのように見える。
どう動けばいいかわかる。

お市の基本モーションはこの体に刻み込まれているらしい。
特に意識しなくても、体が勝手に動いて敵を倒してくれる。

……現実味がない。
ゲームをやっている感覚、ボタンを押しているだけに近い。

血の臭いとグロテスクな傷口が、これを現実だと知らせるのに……
、現実だと思えない自分がいる。

相手が弱いからか？

命の危険を感じれば、痛みを感じれば、これが現実だと思える？
……まあ痛い思いしてまで現実だと感じたいわけではないが。

まあいいか。

罪悪感を感じなくて済むならその方が楽だし。

最後の一人を倒して振り向けば、赤犬以下ほぼ全員が揃っていた。

他は全員驚いたような、信じられないような顔をしているのに、赤犬だけが目の前の事実を当然のように受け止めていた。

ま、オレの能力知ってるしね。

今回能力は使っていないけれど、無傷で全滅させるのは想定範囲内だろう。

……意外と赤犬の部下って楽かも。
できることをやれと言われるだけだから。

「イチッ!！」

「………」

うん、まあ予想してたけどね。

寮に戻るなりヒナが飛び付いてきた。

「イチ、怪我はない？怖くはなかった？出撃に連れて行くなんで、サカズキ中将は何考えて……っ」

興奮するのはいいが、揺さぶるのはやめてくれ。

……つて、あれ？

「イチ!？」

急に目の前が真っ暗になる。

あれ？

なん、で……？

第20片 出撃・裏（後書き）

変な終わり方をしていますが、主人公はただの貧血です。貧血を起こした理由は次の話にて。

第21片 擦れ違い side・Kuzan

規則正しい硬質な足音が、俺の3mほど手前で止まる。

「ここがいなところで何しちよるんじゃあ?」

「そつくりそのまま返すよ」

「.....」

押し黙ったサカズキを、めずらしいと思いつながら立ち上がる。さすがに床に座り込んだままじゃ格好つかない。

「ま、聞かなくてもわかるけど。イチちゃん、倒れたんだって?」

「なんで貴様が知つとるんじゃあ?」

「イチちゃんが倒れる時にヒナちゃんが居てね。ヒナちゃんがウチのスモーカーに知らせに来てくれたんだよ」

その時ヒナちゃんの方が倒れそうな顔色をしていたのだが、今は置いておく。

「出撃に連れてくなんて何考えてるわけ?あの子9歳よ?」

「年は関係なか。イチは海兵じゃあ」

「.....本気で言ってる?」

「当たり前じゃろが」

「.....」

この同期の考えることは、昔から本気で理解できない。

「.....おまえさ、子供育てるのに向いてないよ」

「.....」

自覚はあったのか、反論はなかった。

「おつるさんにも預ければ?イチちゃん、能力の制御はできてるんでしょ?」

暴走した時のために、止められるサカズキが上官である必要はない。
「転属願い出すように勧めるよ。おまえがどう思ってるか知らないけどね、普通は9歳の子供を戦場に連れて行くことも、初陣の子供を一人で海賊と戦わせることも、ましてや人を殺せなんていう命令もしないもんだよ」

俺以外の将官もこの事実には顔を顰めていた。
だから転属願いは簡単に受理されるだろう。

「・・・一度でも『できん』言うたらさせんかった」

「サカズキ？」

「子供は苦手じゃあ。何考えちよるかわからん。それは否定せん」

「・・・」

「決めるのはイチじゃ。わしは口出しせん」

それだけ言ってサカズキは俺に背を向ける。

・・・これはどう判断すればいいんだろうね？

サカズキはイチちゃんを戦わせたことを後悔している？

まさかと思うけど、ここを通ったって事は、医者イチちゃんの容態を聞きに行っただってことだから、そこで何か言われたのかもしれない。

・・・ま、ここで俺が考え込んでいても仕方ないか。

予定通りイチちゃんのお見舞いに行きますかね。

「・・・本当に仲良いね、お前達」

スモーカーとヒナちゃんがイチちゃんの病室にいるのは予想してたけど、3人揃ってケーキ食べてるのを見るとなんだかなあと思う。
可愛いっっちゃ可愛いけど。

「クザン中将!？」

慌てて敬礼をするのはヒナちゃんだけで、スモーカーとイチちゃんはフオークを啜えたままだった。

「・・・おまえらホントいい度胸してるよね。」

「・・・まあいいけど。イチちゃん、元気そうだね」
「ストレスで倒れたんじゃないっけ？」

「・・・イチ、もともと元気よ?」

「いや元気な子は貧血で倒れないから」

ものすごい不思議そうな顔で俺を見上げるのやめてくれない?
俺が間違ってるような気分になるから。

「ま、元気になってよかったよ。・・・ていうか俺のこと知ってる?」

「・・・クザン中将。2年前、ローグタウンで会ったわ」

「うん。覚えててくれて嬉しいよ」

スモーカーに聞いてただけかもしれないけど。

「・・・お兄ちゃんを呼びに来たの?」

「いや、俺が用あるのはイチちゃん」

「・・・イチ?」

イチちゃんだけでなく、スモーカーとヒナちゃんも不思議そうな顔をする。

「転属願ひ、俺が直接出した方が早く通るから。次の上官はおつるさんになるんじゃないかな」

能力に似たところはないけれど、同じ超人系だし。

最近のおつるさんは事務処理が主になっているから、先にそっちを勉強した方がいいかもだし。

「・・・どうして？」

「ん？」

「・・・どうして、イチが転属願いを出すの？」

「・・・え？」

あれ？

なんか予想外の反応。

「イチちゃん、サカズキの部下、嫌じゃないの？」

「・・・嫌じゃないわ。サカズキ中将は、イチにできることしかさせようとしないもの」

「いやでも・・・。嫌だったから倒れたんじゃないの？」

ストレスで食欲不振と睡眠不足になったんじゃないかって話だったんだけど。

「・・・違うわ。イチはイチにできると思ったから、そう答えただけよ。イチの判断が間違っていただけだもの。サカズキ中将は悪くないわ」

「・・・」

そういやサカズキも似たようなことを言っていたような。

「イチちゃん、戦うの嫌じゃないの？」

「・・・嫌だったら海軍に入っていないわ」

そりゃそうだ。

あれ？

じゃあサカズキが正しいってことになるのか？

・・・いやでもさあ。

「それでも俺は、サカズキのところにいるのには反対だけどね。子供が人殺しなんてするもんじゃない」

「・・・」

イチちゃんは、本気で理解できていない顔をした。

「……ゾツとした。」

この子にとってはすでに、人殺しはなんでもないことになってしまっている。

少なくとも相手が海賊や犯罪者だったら、殺すのを躊躇うことはないだろう。

まだ子供なのに。

いや、子供だからこそなのか。

「……」

今更だけど、子供を育てることの責任と怖さが押し掛かってきた。

もつとも、イチちゃんの場合はサカズキの影響を受けたわけではないだろうけど。

1度や2度会ったくらいで性格が変わりはしないだろう。

おそらくマリンフォードに来る前からこの性格は形成されている。

もしかしたら……。

能力を暴走させて海賊を殺したってことになってたけど、殺したことで自体はイチちゃんの意味だったのかもしれない。

……どんな子供時代だったのか後でスモーカーに聞いてみよう。

というか、まさかスモーカーまで人殺しに抵抗ないとか言わないよね？

「……」。ケーキ、ずいぶん多いね」

とりあえず面倒事は後回しにして誰かに押し付けようと決め、話題を変える。

正直俺一人じゃ手に余る。

センゴクさんかおつるさん、もしかしたらコング元帥が判断するかどうかだ。

・・・それに、少なくとも3つ食べたはずなのにまだ10個近く残ってるケーキが本気で気になったし。

「スモーカーが買ってくるはずないから、ヒナちゃん？この店って結構高いんじゃないっけ？」

そんなようなことを女性士官の誰かが言っていたような。値段の分の価値はあるらしいけど。

「・・・サカズキ中将が置いていったわ」

「・・・。。ごめん、もう一回言ってくれる？」

「サカズキ中将が、置いていったの。お花もよ」

「・・・。」

聞き間違えじゃなかったか。

え？マジに？

サカズキがケーキ屋に並んでケーキ買ったわけ？

やたらゴージャスな真つ赤な薔薇も？

「サカズキが、ねえ・・・」

誰かを見舞うなんて、らしくない。

・・・あれ？

らしくないで思い出したけど、ていうか今まで流してたんだけど、サカズキってイチちゃんのこと名前で呼んでたよね？

それってめずらしくない？

「・・・？どうか、したの？」

「いや・・・」

もしかしてサカズキ、イチちゃんのこと気に掛ける？

ものすごくわかりづらいし、普通よりだいぶ気遣いは足りないけれど、それでも邪険にはいなかった。

・・・本気でしばらく様子を見た方がいいのかもしれない。

第21片 擦れ違い side・Kuzan(後書き)

青雉と赤犬は同期だと思っています。

第22片 擦れ違い・裏（前書き）

今更ですが、主人公設定を追加しました。

第22片 擦れ違い・裏

ストレスでぶっ倒れました。

・・・そんなアホな。

ストレスなんて感じた覚えはない。

あるとすれば飯が不味かったことくらい・・・。

いや待てそんなんで倒れるほどのストレス感じるってどんだけ食意地張ってんだオレ。

・・・食べる量は減っていたけど。

ていうか倒れた原因って、単なる寝不足じゃね？

やっぱり最終日だからって貫徹して借りた本を読み耽ったのはまずかったか。

1日くらい平気かと思ったんだが、子供の体って睡眠が重要なんだな。

・・・情けな。

好き嫌いしたのと、本読むために夜更かしたのが原因で倒れるって情けなさ過ぎる。

うああ恥ずかしい。

スモーカーにバレたらバカにされる。

・・・けどなんで原因ストレスになってるの？

ベットの上で地味にへこんでたら、悪魔の実が近付いてくる気配がした。

・・・うげ。

赤犬だ。

最近気付いたんだが、同じ悪魔の実の能力者でも微妙に気配が違う。一度会えば気配は覚えられるから、誰が近くにいるかわかる。本気出せばマリソフオード全域の能力者の居場所がわかるが、疲れからやらない。
半径50mくらいで充分だ。
それはさておき・・・。

赤犬が怖い。

絶対怒られる。

・・・まさか『役立たずは死ね』とまでは言わないよな、いくら赤犬でも。

そうなつたら遠慮容赦なく反撃して逃げるけどな。

ガーブにでも泣き付こう。
背に腹は変えられん。

「・・・・・・・・」

緊張しながら待ってるってのに、ドアの前から赤犬が動く気配がない。

なんで!?

何やってんの!?

いっそさっさと入ってきてくれた方が気が楽なんだけど！
生殺し・・・っ。

「・・・・・・・・」

って、帰るのかよ。

助かったけど何しに来たんだ本気で・・・。

・・・あ。

そっついや最後になんか物音がしたような？

一応見に行ってみるか。

「……………」

ドアを開けて思わず絶句。

真っ赤な薔薇の花束って、前世含めても初めて見たよ……。

「……高そう」

真っ先に思ったのがそれってどうなんだとは自分でも思ったが。

床に置かれていたのは、30本はありそうな薔薇の花束と、ケーキ屋っぽい箱。

……赤犬が置いてったんだよな？

オレが目覚めたすぐ後に看護士が来て、その後誰の気配もしなかったんだから。

……想像力が限界を超えた。

赤犬がケーキ買ってるところを想像するのは無理だ。

薔薇はあんまり驚かない。

将来ピンクの薔薇胸に挿すようになるし。

刺青薔薇に桜だし。

色が青だから薔薇じゃなくて雲か波なのかもしれないけど。

それにシャツもたしか桜模様だった。

……赤犬って花が好きなのか？

……あ。

また悪魔の実が近付いてくる。

ていうかヒナとスモーカーだ。

時計を見る。

士官学校の講義が終わった直後。
・・・全力疾走して来たつばい。

「イチ!!」

「・・・ヒナ」

病院で走ると叫ぶのはどうかと思うよ。
心配してくれてるのはわかるけど。

「イチ、よかった気が付いたのね。大丈夫?どこか痛いところや気分が悪かったりはしない?熱は?吐き気は?お腹空いてたり喉が渴いてはいない?何か欲しいものはある?部屋からとってきましょうか?」

「・・・」

口を挟む暇もなく捲し立てられた。

「・・・ヒナ。とりあえず落ち着いて」

「私は落ち着いているわ」

「落ち着いてないから。とりあえずお水飲んで。お兄ちゃん、そのコップ取って」

「あ?ああ」

病室に入ってきた時には心配そうな顔をしていたスモーカーだが、ヒナが先にパニック起こしたからか、オレが平然としているからか、いつもの無表情に戻っている。

「ほら。飲め」

「・・・」

ヒナは命令形にムツとした顔をし、コップを奪い取るようにして水を一気に飲みました。

「・・・こいつら『喧嘩するほど仲が良い』を地でやってるよな。」

「・・・イチは大丈夫よ?もうどこも悪くないわ。夕方になったら

帰っていいって言っていたから、必要な物もないわ」

なんで夕方？って思ったんだけど、もしかしてヒナが迎えに来たらという意味だったんだらうか？

「そう……。無事なら良かったわ」

あ、ヒナが落ち着いたらしい。

ヒナって意外と突発的事態に弱いよな。

まあまだ12歳なんだから当然かもしれないけど。

「イチ、転属願いを書いて」

「……。え？」

なんで？

「イチを実戦に連れていくなんて、サカズキ中将はどうかしてるわ。上官として相応しくない。変えてもらいましょう」

「……。どうして？」

「えっ？」

反対されると思っていなかったのか、ヒナが不思議そうな顔をした。

「イチは、戦えるわ。だから戦うのは、当然よ？」

できることを要求されたのだから、実行するのは当たり前のことだ。

「だって……。イチはまだ、子供じゃない」

「……。よく、わからないわ。大人とか子供とか、そんなことで區別をするの？できるかできないかじゃないの？」

「それは……」

ヒナの意見が普通なんだろうな、とわかってはいる。

子供は無条件で守られるものと、そう思う気持ちはわからなくもない。

……。ただ、オレの精神年齢が40を越えているだけで。

そして戦力という意味でも、オレは一般的な大人を超えている。

「イチには戦う力があるわ。そう判断してくれたのは、サカズキ中

将だけだったけれど」

誰も彼もが子供だからと、オレの実力を見ようとはしなかった。能力を見せると言われなかった。

唯一の例外が赤犬。

誰が仕組んだのか知らないし、最初はオレも散々文句を言ったが、それは最適な判断だったのだ。

少なくとも、オレにとっては。

「・・・イチは、サカズキ中将のところがいいわ」
下手に変な気を遣われるより楽でいい。

「・・・イチ」

「なあに？」

今まで様子を見ていたスモーカーが口を開く。

何かを見定めようとしているようだった。

「おまえは、おまえの意思でやったんだな？」

「そうよ？」

「・・・そうだな。おまえが嫌なことをするはずがねえ。なんだかんだ理由を付けて逃げ回るに決まってる」

「・・・」

その通りだけどさあ。

「だったら俺は口出ししねえ。・・・ただ、あんま無理すんなよ」

「・・・気をつけるわ」

そう何度も、無様な姿をさらす気はない。

「・・・ヒナは反対？」

「・・・。わからないわ。私は、イチはまだ戦うべきではないと、そう思っている。・・・けれどイチはそう思っていないのでしょうか？」

「ええ」

「だったら・・・。スモーカー君と同じよ。私が口出しするべきで

はないわ」

「……ありがとう」

結局二人は、オレの意志を尊重してくれる。

……まあ赤犬の方でオレの転属願いを出している可能性もあるのだが。

けれど……。

まあ大丈夫だろうと、大量にケーキが詰まった箱と、真紅の薔薇を見て思う。

……うん、たぶん大丈夫。

第22片 擦れ違い・裏（後書き）

長政ポジはスモーカーではなく赤犬だったというオチ。

とはいえしばらくの間はスモーカーとヒナの3人で学校生活を楽しんでもらう予定です。

赤犬の刺青なのですが、592話の扉絵（60巻）見た時には「薔薇の上に桜」だと思ったのですが、カラーで見ると薔薇だと思った部分が青でした。波か雲・・・？SBSなどではつきりしたら修正します。

最初に考えていた話はここまでなので、次の更新までしばらく間が開くと思います。

その間に本筋に関係ない閑話をいくつか入れる予定です。

お久しぶりです。

方向性に迷ったりしていましたが、結局は書きたいものを書き続けようと思います。

というか書きたいものしか書けません。

好き嫌いが別れる設定だとは自分でも思っていますけど・・・。
あらずじに注意書き追加した方がいいですかね？

オリキャラとヒナ、スモーカー、主人公との会話。

書きたかった話ではあるが面白い話ではない。

ジレンマ。

どうもー。

士官学校生のアレクです。

学生Aとでも呼んでください。

・・・卑屈？

言われなくてもわかってるよ。

俺だってさあ、地元じゃ天才って言われてたんだぜ？

俺が生まれたのは、南の海にある空手が盛んな島だった。

俺もガキの頃から空手をやってて、同年代はもちろん、5つくらい年上の相手にも全勝。

大人だって俺に勝てる奴は滅多にいなかった。

天才だって言われてたし、自分でもそのつもりだった。

だからわざわざ15になるまで待って、海軍本部の士官学校に入ってた。

言つとくけど、これだけで充分すごいことなんだぜ？

何のコネもない15のガキが、士官学校とはいえ本部に入れるなんて年に一人居るか居ないか。

・・・なんだけどさあ。

今年は教官達曰く『当たり年』で、悪魔の実の能力者が3人も入ってきた。

しかも全員俺より年下。

年若い能力者が入って来るのは、実はめずらしいことではないらしい。

悪魔の実を食っちゃったけど能力が使いこなせない、なんて奴は海賊になる場合を除いてほとんど海軍を頼る。

中には自力で訓練して賞金稼ぎになったり、あるいは能力を隠して

一般人として生きていく奴もいるけど。
だから3人も揃ってるのがめずらしいだけ。

俺は最初、そいつらが困ってたら手を貸してやるうと思ってた。
俺みたいに入學試験に受かったわけでもなく、元々海軍所属の大多
数の人間みたく実戦経験があるわけでもない。

『能力の使い方学ぶため』に来ているのだから、戦闘訓練でも学
科でもついてこれないだろうと思ってた。

特に一番小さい子は9歳だっていうから、周りが大人だらけのこ
場所は怖いだけだろうと。

だからまだ年が近い俺が手を貸してやるべきだと、そう思っていた
のだ。

・・・内二人が美少女で、その二人といつも一緒にいるスモーカー
が羨ましかったりはしたが。

「・・・まーたあいつらが一番か」
容赦なく張り出された試験の結果。

実技の比重が高い科目のトップはスモーカーが多く、座学のみ
目のトップはヒナ嬢が多い。

ちなみにイチちゃんはその科目が平均よりちょっと下辺りだが、
平均年齢が20後半のこの学校で9歳児がついていけるだけで凄
い。

・・・俺は実技は平均近いが座学は底辺に近い。

あの3人の中じゃ一番勉強ができないスモーカーにすら負けている。
情けな・・・。

地味ーに落ち込んでいると、カツカツという硬質だけど軽い足音が
聞こえた。

なんとなく予想ついてたけど、一応顔を上げて確認する。

「あら。アレク君」

「・・・君付けやめてくれない？ヒナ嬢」
つか俺の名前知ってたのに驚いた。

「どうして？」

「・・・呼ばれ慣れてないから」
年下には。

「いいじゃない。同期なんだもの。それに私も、ヒナ『嬢』と呼んでくれなんて言った覚えはないわ」

「・・・」

本人に向かつて『ヒナ嬢』呼びした失態に今気付いた。

みんなそう呼んでるし、普段話題に出す時は『ヒナ嬢』呼びだったからなあ。

まともに話すのは今日が初めてなんだけど。

「『ヒナ嬢』って呼ばれるのは嫌？」

「別に構わないわ。悪意があってそう呼んでいるのでなければ」

「・・・」

呼ぶの止めた方がいいのか、止めない方がいいのか。

「冗談よ。そのまま呼んでくれて構わないわ。子供だからと侮られているのは知っているけれど、そのうち実力で見返してやるわ。それにあなたは、私達のことを見くびってなんていないでしょう？」

「・・・ま、ね。こんなものを見せられちゃ、見くびるなんてできないよ」

張り出されている試験結果に視線を向ける。

ヒナ嬢もこれを見に来たんだろう。

「にしても、一人つてめずらしいね」

「私だっていつもスモーカー君と一緒にいるわけではないわ」

「・・・ん？」

傷付ける覚悟か、何があっても自分の身を守れるだけの実力を身に付けるまでは連れて行けないって。当たり前よね」

ヒナ嬢は軽く肩を竦める。
「……」

「悔しい？」

その顔は、最近よく鏡の中に見掛ける顔と似ていた。

「……そうね。きつと私は、悔しいのだね。けれどそれは、イチに先を越されたからではないわ。覚悟をしているつもりでも、できていなかったと気付かされたから。……正直イチを怖いと思ったわ」

「イチちゃんを？」

「ええ。……イチが自分には戦う力があると言った時、イチの顔には何の感情も浮かんでいなかったわ。それは当たり前のことだからよ。戦うのも傷付けるのも……、もしかしたら、殺すことも」
「まさか」

あの年でそこまで考えているわけ……。

「……そうね。これはただの私の考えよ。本当のところは、イチにしかわからないわ」

「そりゃそうだけどさ……。ヒナ嬢は、そうなりたいの？」

戦うことや殺すことが、『当たり前』と言い切れるようになりたいのか。

「いいえ。海賊は捕まえるべきだと思っているけれど、戦わずに済むならその方がいいと思っっているし、殺さずに捕まえられるならそうするべきだと思うわ」

「……そ」

安心した。

俺も同意見だ。

「ヒナ嬢はそれでいいと思うよ」

「ありがとう」

普段は大人びているヒナ嬢だけど、笑うと可愛いなあ。

「にしても、ヒナ嬢でも悩む事ってあるんだなあ」

「あら？どどういう意味かしら？」

「頭が良くてもってこと」

順位表を指差す。

「私にも得意不得意があるの」

ヒナ嬢は冗談っぽく笑って、最初の目的だっただろう順位表に目を通す。

「・・・やっぱり実技系はスモーカー君が上位ね」

「それは本気で悔しそうに言うんだ・・・」

ヒナ嬢って、イチちゃん相手だったら負けても気にしないのに、スモーカー相手だと本気で張り合うよなあ。

よくわからん。

「だって悔しいじゃない」

「それには同意するけどね」

勝てないとわかっていても、負けると悔しい。

「まあいいわ。私は私の得意分野でがんばるから。アレク君もがんばってね」

「え？」

「スモーカー君のことをライバル視しているのは、あなたもでしょう？」

「・・・そんなにわかりやすい？」

「結構、ね」

悪戯っぽく笑うヒナ嬢は可愛いけど・・・。

「スモーカーが俺のこと何とも思っていないから、なんか格好悪いな

あ
」

「そうかしら?」

「え?」

「私はもう行くわ。立ち話に付き合わせて悪かったわね」

「え、いや……。ヒナ嬢と話せて、よかったよ」

さつき程落ち込んで、いない。

「ふふ。私もアレク君と話せてよかったわ。またね」

「ああ。また」

ヒナ嬢を見送って、訓練場に向かう。

激励されたことだし、がんばらないと。

第23片 それぞれの正義と覚悟(1)

side・original(後書き

2011/06/15 前書き修正。

後から読んで後悔・・・。

ヒナ嬢なら真面目に卒業目指すだろうけど、スモーカーはそうじゃないのかな？

「気になんねえわけじゃねえが」

「が？」

「士官学校ん中の順位気にしてもしょうがねえだろ。戦う相手は海賊なんだ」

「……」

正論、なんだけどなあ。

「……まあ負けたことなければ順位なんて一番に決まってるか」

「あ？負けたことなら山ほどあるぞ」

「へ！？……あ、配属先の上司に？」

「まあそりゃクザン中将に勝てたことはねえが……。じゃなくてイチにだよ」

「ええ！？」

スモーカーがイチちゃんに負けた！？

「悪魔の実食ったのはイチが先だからな。俺も食つまでは負けっぱなしだった」

「そ、そうなんだ……」

苦虫を噛み潰したような顔をしているので、たぶんていうか絶対に事実だ。

「……悔しくなかった？」

「悔しかったに決まってるだろうが。だからこうして訓練してんだろ。おまえもそうじゃねえのか？」

「え？」

「ほぼ毎日自主練してるって事は、負けたくねえ奴がいるか、守りてえもんがあるかのどっちかじゃねえのかよ」

「……気付いてたんだ」

ほぼ毎日なのは、スモーカーも同じだけど。

「言っただろうが。『よく見る顔』は覚えてるってな」
「・・・そっか」

なんとなく、少しだけ報われたような気分になった。
別にスモーカーに勝ったわけでも、強くなったわけでもないのに。

「スモーカーも負けたくない人が居るのか？それとも守りたい人の方？イチちゃん？」

「とりあえずクザン中将を一発ぶん殴りてえ。イチはおとなしく守られるタマじゃねえだろ」

「・・・」

どう反応すればいいんだこれは。

「・・・クザン中将と仲悪いのか？」

「いや？時々無性にぶん殴りたくなるだけだ。実力と決断力はすげえと思ってる。真面目にやってる時は」

「・・・」

真面目にやってない時あるんだ・・・。

「・・・スモーカーも実戦に出た？」

「いや。『まだ早い』んだと」

「出たい？」

「・・・どうだろうな。正直よくわかんねえ」

「へ？」

意外。

スモーカーのことだから、今すぐ実戦に出たいとでも言うかと思っ
た。

「今すぐでも、戦えるとは思っている。けど殺せるかはわかんねえ」
「相手が海賊でも殺したくない？」

「ああ。死んじまったら取り返しがつかねえからな。相手がどんなに悪人だろうと、殺す気はねえ」

「へえ……」

意外なようなそうじゃないような……。

「けど、これは俺の能力が捕縛に適しているから言えることだ。自分が怪我することもねえしな。他の奴には、怪我するくらいなら殺せって言っぜ」

「……ずるくない？」

「知ってる。人を殺すのが嫌で他の奴に押し付けてると思われても構わねえよ。俺でもそう思うしな」

言葉の割に、スモーカーは真っ直ぐな目をしている。自分の意見に自信を持っている奴の目だ。

「スモーカー……、人を殺したこと、あるのか？」

「ああ」

予想通りの言葉。

「なんで？……ああいや、言いたくないならいいんだけど」

「別にいいぜ。11ん時、酔っぱらった海賊が俺の仲間のガキに銃を向けた。そんだけだ。そんだけで、頭が真っ白になって真っ赤になった。気付いたらナイフで刺してた」

「……」

思わず顔が引き攣る。

11歳の時って……。

「……どうだった？」

「吐いた」

「……は？」

「吐いて、泣き喚いて、イチや他のガキに八つ当たりして罵った。

我ながらどうしようねえガキだったと思うぜ」

スモーカーは軽く肩を竦める。
あまりにも淡々と告げられたので、嘘かとちょっと思った。
けどたぶん……、本当だ。

正直ものすごい意外。

スモーカーがそんな失態を犯した事じゃなくて、それを誰かに言ったのが。

プライド高いと思ってたんだけどな。

ていうか……。

「……俺がそうなつても落ち込むなつてこと？」

「そんなんじゃないよ」

嘘吐き。

年下のくせに面倒見良過ぎだ、スモーカー。

「にしても、それでよく海兵になろうと思ったね」

「超絶マイペースのイチに何事もなかったかのように振り回され続けてみる。落ち込む暇もなかった」

「……」

イチちゃんわざと？

いやでも当時6歳だよなあ。

「……まあそれに救われたのは事実だけどよ。あいつが何を考えたのか、何も考えてなかったのかは知らねえ」

「ふうん……。ていうか気になつてんだけど」

「あ？」

「イチちゃんと、どういう関係？」

「兄妹分」

「……」

即答された。

「……それだけ？」

「そんだけだよ。なんか最近よくそれ聞かれんだが・・・」
まあそりゃ、みんな気になるだろう。

「じゃあヒナ嬢とは？」

「それもよく聞かれんな・・・同期で、そのうち同僚だろ」
「だけ？」

「他になんかあんのかよ」

誤魔化してる風じゃないなあ。

「うーん・・・あんな美少女二人といつも一緒にいて何も感じない？」

「・・・美少女？」

「え？なんで驚いてんの？」

スモーカーは本気で驚いている顔をしていた。

「美少女でしょ。イチちゃんも、ヒナ嬢も」

まさかスモーカーって美的感覚どうしようもなくおかしい？

「いや・・・まあヒナの顔は整ってる方だと思ってたが・・・
イチもか？」

「は？いやていうかイチちゃんの方が美少女だと思うよ。ヒナ嬢とは系統が違うから断言できないけど」

きつめのヒナ嬢より庇護欲をそそるようなイチちゃんの方が、海軍では人気が高い。

つて言っても、今は子供だから『将来が楽しみ』つてただけけど。

「・・・そうか。そうなのか・・・」

「何その目から鱗みたいな顔」

ヒナ嬢は美少女だって認識してたっばいのに、なんでイチちゃんのこととはそんなに驚くかな。

「・・・もしかして、イチちゃんみたいなの嫌い？」

「いや・・・見慣れ過ぎて美醜とか考えたことなかった」

「・・・・・・・・」

あの顔に何にも感じなくなる程ずっと傍に居たのか。

「もしかして、スモーカーって女の子の顔の基準イチちゃんだったりする？」

「あ？んなこと考えたことなかったが……。言われてみりゃそうかもな」

「・・・・・・・・」

一瞬スモーカーに同情した。

イチちゃんの顔が基準だったら、『かわいい！』とか『美人！』とか思えるような人に滅多に出会えるはずがない。

すぐに上位将校には女の人の方から寄ってくと思いついて同情心はなくなつたが。

それにスモーカーって外見気にしなさそうだしなあ。

ていうか。

「スモーカーって恋愛自体に興味なさそうだね……」

「あ？」

「今はそれどころじゃないとか強くなる方が重要とか言いそう」

「それは否定しねえが」

数少ない女性の士官学校生からは目を付けられてるのに、もったいない。

あの人達は怖過ぎるので、俺だったら逃げるが。

「ま、いつか。訓練場行こうか。相手してくれない？」

「あ？ああ」

とりあえず今は、訓練を続けるしかない。

第24片 それぞれの正義と覚悟(2) side・original(後書き)

2011/06/16 第8片でスモーカーが「死体を初めて見た」と言っていたのを忘れてました・・・。

第8片の方を修正。

「あれっ？」

居ないと聞いていた姿を見て、思わず声を上げてしまった。

その声に反応してイチちゃんが顔を上げる。

「・・・アレク」

「イチちゃんも同期全員の名前覚えてるの？」

ヒナ嬢みたく。

そう思っただけけど、イチちゃんはフルフルと首を横に振る。

小動物みたいで可愛い。

「・・・アレクは、特別」

「特別？」

「イチのこと、気に掛けているでしょう？」

「・・・」

「それにアレクは、動きが綺麗なもの。きちんと武術を習った人の動きね」

「そ、そう・・・。ありがと・・・」

なんか照れ臭いっていうか、そんなに俺わかりやすいのかな・・・。

「イチちゃん・・・。出撃帰り？」

コクンと小さく頷く。

武器を持っているのはともかく、大きな荷物を持っているのだから
そくに違いないとは思っていたけど・・・。

「嫌じゃ、ない？」

「嫌ではないわ」

「じゃあ楽しい？」

「・・・出撃が楽しくないと言ったら、嘘になるわ。普段と違う行

動は、知らないことを知ることは、楽しいもの。でも人殺しを楽しんでいるわけではないわ」

「そう・・・」

どう反応するべきか、わからなかった。

「・・・アレクはアレクのままでもいいと思うわ」

「え？」

「迷うのも、必要よ？自分のペースで考えて、答えを出せばいいわ」

「・・・ねえ俺そんなにわかりやすい？」

ヒナ嬢といいイチちゃんといい、なんで俺の考えを見透かすかな・・・。

「アレクに限らず、海兵なら誰でも一度は考えることなんじゃないかしら」

「どうすればいいのか？」

「『正義』とは何か」

「・・・」

「好きな正義を、選べばいいわ。自分だけの正義を、作ればいいわ。正解なんて、ないんだもの」

「イチちゃん・・・」

ホントに9歳児？

達観し過ぎだ・・・。

「・・・イチちゃんの、正義は？」

「恐怖」

「恐怖!？」

いつたいなんで!？

「あるいは抑止力、かしら？何かを叶えるために誰かを傷付けることを、一度も考えたこともない人はいるかしら？けれど考えたとし

ても、実行しない人の方が多いわ。それは怖いからだと、イチは思っている、自分の心を裏切る恐怖。周りの人から責められる恐怖。そして公的機関から罰せられる恐怖」

「恐怖……」

「悪いことをしたら報いがあるわ。それはとても怖いことでなければならぬ。そうでないと抑止力にならないもの。『犯罪なんて割に合わない』と、そう言い切れるだけのリスクがなければならぬわ」

「リスク……」

言っていることは理解できる。

だけど……、納得はできない。

「……そんな風に、損得で考えているわけじゃないよ。お互いのことを思いやれば、自然と誰かを傷付けるような手段は選ばないはずだ」

「理想ね」

「……」

理想。

……そうかも、しれない。

「別にそれが、悪いというわけではないわ。誰も犯罪を思い付かない世界。思い付いても実行しない世界。世界政府が目指すべきものだ、そう思うわ。……でもそれには時間が掛かるわ」

イチちゃんはうつつすらと笑った。

それは背筋が凍りそうな程、綺麗な笑みだった。

「イチは待たないわ。もつと早くて、簡単な方法を選ぶわ。間違っていると言われても、構わないわ。理解されなくても構わないわ。これがイチの正義よ。イチがそう決めたの。だからイチは迷わないわ」

「イチちゃん……」
哀しいと、思った。
その覚悟は哀し過ぎる。

「でもアレクは、迷ってね。迷って迷って、考えて考えて、そうして答えを出してね。その答えはきっと、正しいわ」
くるりと、イチちゃんは身を翻して立ち去る。

その背中が見えなくなるまで見送って、詰めていた息を吐き出す。
完璧に、イチちゃんに吞まれていた。
情けな……。

「……正義、か」
あるいは覚悟。

イチちゃんはもう見付けていて、たぶんスモーカーとヒナ嬢も見付けかけている。

俺は。

俺の正義は……。

「……わかんねえよ」

いきなり言われたって、わからない。
だけど……。

いつかきつと、答えを出さなきゃならないんだと思う。
少なくとも海軍にいる限りは。

「……イチちゃんの言った通りになりそう」
悩んで悩んで、考えて考えて、そうして答えを出さなければならぬ。
い。

「……がんばる、か」

結局今の俺にできるのは、それだけなんだから。

第25片 それぞれの正義と覚悟(3) side・original(後書き)

リア充爆発^{スモーカー}しろ、な話にするはずが予想外にドシリアス。
どうしてこうなった・・・。

閑話 調理実習(1) (前書き)

閑話Ⅱ無駄話(by デジタル大辞泉)

「ヒナ嬢は完璧なんだ!」という方はブラウザバックをお願いします。

閑話 調理実習（1）

【side・主人公】

ドカンッ！と、またどこかで爆音が上がる。
少し遅れて、複数のムサ苦しい悲鳴。

黒煙と異臭。

ここは戦場・・・ではなく、調理室だ。

なんだって単なる調理実習で爆発やら毒物騒ぎやらが起こるのかな・・・。

「・・・」

なんとも言えない気分で騒ぎの中心を見てみると、隣で同じようにスモーカーがなんとも言えない顔をしているのに気付いた。

・・・だよな。

もう一度言うが、これは単なる調理実習だ。

いつ何時不測の事態が起こるかわからない船上で、料理はできないよりできた方がいい。

だから授業があるのはわかる。

・・・けどなんで爆発起こせるんだろう？

あと毒ガス。

講師の様子を窺ってみるが、毎度のことなのかすでに諦観の表情だ。

・・・うん、なんとなく予想は付いていた。

最初の指示は窓を開けることと換気扇回すことだったからね。

こうなることは予測済みだったのだろう。
にしても・・・。

「いたっ！」

「……………」
すぐ近くで上がった悲鳴に、思わずスモーカーと揃って視線を向ける。

ヒナが何ヶ所目かの切り傷を作っていた。

「……なんでもできるイメージがあつたヒナだけど、料理だけはダメらしい。」

さっきからかなりの頻度で指を切っている。

ちなみにスモーカーもヒナ以上の頻度で自分の指を切っているが、どうせ煙になつて怪我しないのだからと適当にやっているのが大きい。

オレ？

今更自分の指を切つたりしねえよ。

零れ落ちそうになつた溜息を、なんとか堪える。

ヒナは真剣に、そして全力でやっているのだ。

代われるものなら代わつてやりたいとは思つが、授業の課題である以上それはできない。

今回の授業では個人で作業を行わなければならない。

ただし口出しは可。

味見は口出しに入るらしい。

ちなみにメニューはシチュー。

自信があつて希望するならサイドメニューをつけてもいい。

面倒だからパン焼いて果物切るくらいでいいかと思つてたんだが……。

下手に凝つたもの作ろうとしなくてよかった。

この状況で冷静に料理できると思えない。

だつていつどこで何が爆発するかわからないんだもん。

常に変な臭いしてるから鼻がおかしくなりそうだし……。

「イチ、次は？」

「・・・鍋でお肉炒めて」

「あ？煮るんじゃないかねえのか？」

「先に炒めてから煮るの。野菜もよ。火が通りにくい順に入れていくの」

「へえ」

真面目に教科書とにらめっこしているヒナ、最初から調べる気がなくて全部聞いてくるスモーカー。

出来上がりはどっちがマシか・・・。

・・・スモーカーの方がマシっぽい。

ヒナが明らかに間違ったことをしそうな時には止めているが、教科書通りにやっていて何故間違えるのか。

そのうちなんか取り返しつかないことしそう・・・。
というか材料に血が付いている時点で食べたくない。

もう一度溜息を堪えて、自分の鍋に向き合う。

これでオレまで失敗したらしゃれにならん。

【side・Smoker】

調理実習なんてもんが士官学校にあるなんて思わなかった。考えてみりゃ、何が起こるかわかんねえグランドラインで、しかも戦闘なんてやっていて、いつもコックが用意できるとは限らねえ。だからいざという時に備えて、つーのはわからなくもない。それと得意不得意とはまったくの別物だが。

材料の名前はだいたいならわかるし、調味料の名前も一般的なものならわかる。

だが道具になるとわかんねえものの方が多いし、調理法にいたってはさっぱりだ。

とりあえず焼くか煮るかして火が通ってりゃいいんじゃないかと思う。

そりゃ、どうせ食うなら美味しいものもいいが、俺が料理をしなきゃなんねえような状況で、そんな悠長なこと言ったらねえと思うんだが……。

……溜息を吐きたい原因は、もう一つある。

ヒナは予想外に料理ができなかった。

材料を切るつもりで指を切っている回数が多い。

俺も人のことは言えねえが、ロギアである俺と違ってヒナは普通に怪我をしていて痛々しい。

……それ以上に血に染まったじゃがいもが不気味だ。

今のところ爆発は起こしていないが、それもイチがヤバそうな時に止めているだけの気が……。

「っ！ヒナ！待つ……」

「え？イチ、どうかした？」

「……う、ううん。なんでもない……」

「そう？」

イチは引き攣った顔をしているが、ヒナは気付かなかったらしい。引き攣った顔の理由が気になって、ヒナがたった今鍋に投入したものを味見する。

……砂糖だ。

シチューに砂糖入れやがったのか。

「・・・さつき重曹も入れてたわ」

「じゅうそう?」

「膨らし粉。パンに使ったの。・・・入れ過ぎると苦くなるわ」

「・・・」

つまり、ヒナのシチューは甘くて苦いはずということか。

そりゃあイチも顔が引き攣るだろう。

ヒナが何を作ろうと関係ねえと言えるような立場なら気にしなかったんだろうが、この授業では最低一人に食べさせて感想を聞かなければならない。

最初のうちは俺に押し付けるつもりだったんだろうが、重曹をヒナの手の届く位置に置いていたのはイチのミスと言えなくもない。少なくともイチはそう思っている。

イチは嫌なことは遠慮なく他人に押し付ける奴だが、責任まで誰かに押し付ける奴ではない。

おそらく自分で食うつもりだろう。

そういうところは、律儀な奴なのだ。

ポンと、なんとなくちようどいい位置にある頭に手を乗せる。

「・・・お兄ちゃん?」

「別におまえのせいじゃねえよ」

ヒナのせいと言い切るのは、本人に悪意がないのでできないが。・・・しかし本気で胃薬が欲しいな。

閑話 調理実習(1) (後書き)

なんでパンを作るのに重曹があつたかといえは、発酵させるのをめんどくさがって無発酵パンにしたからです。

たぶんオーブンじゃなくて炊飯器で焼いている・・・。

海軍は陸軍や空軍よりも料理が上手いイメージがあります。

海上自衛隊のオフィシャルページにレシピ集があるせいかな・・・？

閑話 調理実習(2)

【side・Kuzan】

「オオ、やつてるねエ」

「ボルサリーノ中将!? クザン中将!?」

ボルサリーノさんを誘ってスモーカー達の講義を見に行けば、案の定大騒ぎになった。

いつせいに敬礼を向けてくる学生達、に数拍遅れてスモーカーとイチちゃんも敬礼する。

「今絶対『敬礼してしなきゃ駄目か? めんどくせえ』とか考えてただろ……」

騒いでる連中に作業に戻るよう伝えて、スモーカー達が作業している台に向かう。

いや『していた』か。

どうやらもう終わって食べるところだったらしい。

3人分のシチューとパン、フルーツ。

ただしシチューの中身は全然違う。

スモーカーの前にあるのは、材料の大きさとか形がバラバラで色が変。

つか絶対焦げてる。

イチちゃんの前にあるのも材料はバラバラだけど、色は普通。

ヒナちゃんの前にあるのは店で出せそうなほど美味しそうに見える。を目をしている。

今回の料理は完全に個人で作ったのか

「ヒナちゃん、料理上手なんだね。美味しそう」

「……」

何故かスモーカーとイチちゃんが横目でお互いを見た。
ん？

「・・・中将達も食います？」

「いいの？じゃあ貰う」

実は最初からそのつもりだったけど。
でなきゃこんな時間に来ない。

「・・・誰が作ったのがいい？」

にこりと、控えめに笑いながら見上げてくるイチちゃん。

こんな風に聞かれたら『イチちゃん』って答えなきゃいけないよ
うな気分になるけど・・・。

「わっしはイチちゃんが作ったのが食べたいねエ」

ボルサリーノさんが先に答えてくれた。

「じゃ、俺はヒナちゃんが食べたいかな」

やっぱり美味しそうなのが食べたいしね。

・・・ん？

なんかボルサリーノさんが『あーあ』って顔してるんだけど・・・。

「じゃ、これどうぞ」

そう言つてスモーカーは目の前にあつた皿を差し出した。

・・・え？

「どうぞ」

イチちゃんがボルサリーノさんに差し出したのは、ヒナちゃんの前
にあるのと同じもの。

・・・あれ？

「誰かに食べてもらつて、感想を聞かなきゃならないの」

「・・・そう」

つまり、お互いに作ったものを食べようとしていたわけだ。
最初は。

「・・・・・・・・」

渡された皿を見下ろす。

多少焦げてはいるが、まあシチューで食べられないことはないだろうと、そう考えてスプーンを口に運ぶ。

「・・・・・・・・っ!?!」

なにこれ!?

なんか苦いんだけど甘いししょっぱいしジャリジャリする!

「クザン中将、どうですか?」

「・・・・・・・・」

不安そうに聞いてくるヒナちゃんに、正直に答えることはできなかつた。

「お、おいしい、よ」

「よかった。料理をするのは初めてだから不安だったんです」

「・・・・そ、そう」

料理をするのは初めてだったのか・・・。

・・・・黙々と食事をしているスモーカーとイチちゃんは、たぶん知っていたのだろう。

それにボルサリーノさんも、気付いてるっぽかった。

・・・・まさか嵌められた!?

「おお、美味しいねエ。イチちゃんは料理得意なのかい?」

「・・・・おうちの手伝いしてたから」

「そうかい。偉いねエ」

・・・・なんかあっちでほのぼのしてるのがムカつく。

それにしても・・・。

これって全部食べなきゃダメ?

「スモーカー君のとイチのは同じ味がするわね」

「そりゃ、同じもん入れてるからな」
「じゃあなんでヒナちゃんのは違う味がするのよ？」

「・・・そういえば、疑問だったんだけど」

「なあに？イチ」

「ヒナって味見、したの？」

「・・・言われてみればしてないわね」
「っておい。」

「思わずツツコミそうになったのは俺だけではないだろう。」

「ヒナちゃんは気になったのか、自分で作った分をよそって持っている。」

「なんとなく食べるところを全員で眺めていると・・・。」

「まずっ！悪魔の実よりも不味いわ！ヒナ衝撃！」

「「「「・・・」」」」

「そこまでか。」

「否定はできないけど。」

「・・・クザン中将、これを美味しいって言ったって事は・・・」

「あゝ・・・」

「嘘だったってバレたか。」

「まあ俺も、これ以上食べるのはキツイのでちょうどよかったかも・・・。」

「ずいぶん変わった味覚してるんですね」

「・・・」

「ってそつちか！」

「気に入ったのなら、好きなだけ食べてくださいな」

「・・・」

「今更嘘だったとは言にくい。」

「ていうかスモーカー、おまえ気付いてるんだからなんとか言ってよ。」

「こっち無視して黙々と食べてないでさあ。」

「……ひどい目にあつた……」

「バツカだねエ〜。ヒナちゃんの手が傷だらけだったのに気付きなよオ〜」

「……」

「そういえば。」

「……気付いてたんなら教えてくださいよ」

「本人の目の前で言えるはずないだろ〜」

「そりゃそうだけどさあ。」

「……しかし、思っていたより普通の子供に見えたねエ〜」

「イチちゃん、ですか」

普通に見えたというか、この間会つた時よりも子供っぽく見えた。あれは出撃から帰つたばかりで緊張が続いてたとかそんなんだつたんだらうか？

「サカズキと上手くやっっているって聞いたからどんな子かと思えば……。ヒナちゃんや君のところの子と話しているのを見る限り、ちよつと変わっているだけの可愛い子に見えたねエ〜。……怖い怖い」

「怖い？」

「普通そうに見えたのに、可愛い子なのに、怖い？」

「あの子を見て、いったい誰が警戒するんだい？ いったい誰が、平気で人を殺せる人間だと思ふんだい？」

「……ま、そりゃそうですけど」

俺が海賊だったとしても、絶対にイチちゃんには警戒しない。
それどころか、いつでも殺せる無力な子供としか思わないだろう。

「ま、海軍に入ってくれて良かったと思いましょよ」

イチちゃんが海賊船に乗っていたとしても、人質か奴隷だと思って救出するだろう。

油断していたところを背中からブスリ、とかシャレになんない。

「まあ、そうだねエ〜。・・・それにああいう性格の方がサカズキは楽だろうしねエ〜」

「?どういう意味です?」

「最初に人を殺した時は、多かれ少なかれ変わるものだからね。変わって『ああ』なのか、変わる前から『ああ』なのかはわからないけれど、サカズキに人を殺したことを気に病んでいる子供のフオロはできないだろう」

「・・・」

「ヒナちゃんがどう変わるのかは、わっしの悩みの種だからねエ〜。

・・・子供を育てるのは、難しいね」

スモーカーはすでに、人を殺した経験がある。

その上で、なるべく人は殺したくないと『決めて』いる。

進む方向がすでに決まっているのなら、俺は越えられそうにない障害物だけをどければいい。

・・・ある意味ヒナちゃんが、どう変わるかわからなくて一番危険なのかもしれない。

「・・・まああいつらなら、補い合ってなんとかなるんじゃないですか?」

「だといいねエ〜」

そうだと、いい。

閑話 調理実習(2) (後書き)

没ver.

主人公「ヒナの料理を食べるなんて……。ついつっかりクザン
中将のことを尊敬しそうになったわ」

クザン「・・・イチちゃん、俺の扱い結構悪いよね？」

ここまで仲良くないというか本性晒してない。

第26片 シャボンディ諸島(1) side·Smoker(前書き)

お久しぶりの上に続きます。

29片以降もなるべく早くに投稿しようとする。 (希望)

「シャボンディ・パーク？」

なんだそりゃあ？

思わずヒナの顔を見下ろせば、ヒナは楽しげに笑いつつ説明を続けた。

「シャボンディ諸島にある遊園地ですって。シャボンディ諸島では特殊な樹脂で作ったシャボン玉があるでしょう？そのシャボン玉を加工した乗り物があるらしいわ」

「ふうん・・・」

正直興味はない。

「次の休みにイチと行くの。定期便で日帰りができるらしいわ。スモーカー君も行かない？」

「・・・」

んな時間あったら訓練してる、というのが率直な感想ではあるが・・・。

ヒナの隣で、無言で俺をじいと思上げているイチに視線を向ける。

感情がわかりづらいというか表情がほとんど変わらない奴ではあるが、いい加減長い付き合いだ。

何を考えているかはなんとなくわかる。

・・・イチの奴、思いつ切り楽しみにしてやがる・・・。

俺が行こうが行くまいが、それどころかヒナが行こうが行くまいが、一人でもこいつは行くだろう。

別にそれ自体は構わない。

シャボンディ諸島は場所柄海賊が多いが、海軍本部に近いため騒ぎを起こす連中は少ない。

そもそもイチは面倒事は避ける。
仮に避けきれなかったとして、何度か実戦を経験している今、近くにある支部に逃げ込むくらいのことではできるだろう。
普段ならば。

「……こいつ、何かに気を取られてる時は普段なら絶対にやらないようなミスをやらかすんだよね……。」

「……。」
果てしなく嫌な予感がする。

「……俺も行く」
遠くから気を揉んでいるよりも、近くで監視していた方がマシだ。

「じゃあ3日後の朝9時に港に集合ね。定期便は本数が少ないから、遅れないでね」

「ああ」
しかしヒナの奴も微妙に浮かれてんな。
遊園地というのは、それほど楽しみなものなんだろうか？

「聞いたよ、スモーカー。ヒナちゃんとイチちゃんとデートだった？二股とはやるね」

「……。」
なんで知ってたんだ、この人。

「あいつらが海賊に絡まれて返り討ちにしてやり過ぎた時にアンタが責任取ってくれんなら俺は行かなくて済むんすけど？」

「行ってらっしゃい。楽しんできなね」
「……。」

あっさり態度を変えやがった。

「つかアンタはやめなさいよ。俺上官よ?」

「いくら俺でも、普段から真面目に仕事してる人はアンタ呼ばわりしねえッスよ」

「……」

隙ありや逃げようとしやがって。

……やる気になればできるくせに。

「……しかしシャボンディ諸島ね。やっぱり行くのはシャボンディ・パーク?」

「それとシヨツピング・モールらしいッス」

「ふうん……」

何か考え込んでいるようなクザン中将の態度がひっかかった。

「……なんかあるんスか?」

「ん?何が?」

「イチがヒナにシャボンディ・パークとシヨツピング・モール以外は行かないことを念押ししてたんで。それ以外の場所になんかあるのかと」

「……あの子どもまで知ってんだろ」

「どういう意味ッスか?」

「ん……」

クザン中将は言うべきかどうか迷っているらしい。

「……シャボンディ・パークとシヨツピング・モール以外は行かないなら、内陸部には海賊を始めとする犯罪者が隠れ住んでいるということだけ知ってればいいよ」

今は、ということだろうか?

それ以外が気にならないわけではないが、クザン中将がそう判断したならばそうなんだろう。

その程度には信頼している。

「そっぴや、天竜人　世界貴族つて知ってる？」

「一般常識程度なら。イチ曰く『顔を合わせない方がお互いと世界平和のため』らしいッスけど」

「・・・まあ否定はしないよ。ホントにイチちゃん、どこまで知ってんのかな・・・」

クザン中将は遠い目をした。

「・・・まあいいや。その天竜人なんだけど、たまにシャボンディ諸島に来てるから。会わないように気をつけな。・・・もし会っちゃったら、黙って膝付いて俯いてなさい」

「はあ」

正直王族やら貴族やらは嫌いなんだが。

とはいえ自分から問題を起こすこともないだろう。よっぽどのがない限り。

そして約束の日。

遅れるとヒナが口煩くてめんどくせえから早めに来た乗り場には、10分前だつてのにすでに二人とも居た。

・・・どんだけ楽しみにしてるんだ、おまえら。

「じゃあ行きましょ」

「ああ・・・」

船に乗っている間、始終二人は楽しげに話していた。

別にそれはいい。

それはいいんだが、二人とも浮かれているということは問題を起こす可能性が高いということ・・・。

「・・・」

なんで俺こいつらのフォローをしなければいけないと思ひ込んでんだ？

冷静に考えればその必要はないはずなんだが、だからといって放置するのは気分的にできなくて・・・。

「・・・」

まあしょうがねえ。

年上の義務だとも思つて諦めるしかねえだろう。

めんどくせえなど、これから起こるだろう事態と、自分の性格に対して思った。

「・・・うわぁ」

「ステキね」

シャボンディ諸島に着くと、そこら中にでかいシャボン玉が浮かんでいた。
めずらしい光景だとは思うが、正直イチやヒナほどの感動はない。
それよりも。

「・・・・・・・・」

船縁から飛び降りようとしていたイチの首根っこを掴んで引き戻す。
・・・心底不思議そうな顔をされた。

まあローグタウンにいた時は屋根の上やら木の上やらをびよんぴよん飛び回っていたがそれはさておき。

「タラップから降りろ」

「・・・わかつたわ」

ものすごい不満そうだったが頷いたのでよしとする。

ほつとくとどこに消えるかわからないので、そしてイチは逸れたところで合流しようとは考えないので、手を繋いで逸れるのを防ぐ。

人間のリードはなんで無いのか。

「あら。仲がいいのね」

ヒナがにやにやと笑っているのがムカつく。

「じゃあデメエが代わ・・・。いややっぱなんでもねえ」

ヒナとイチじゃ二人揃ってどっか行くに決まっている。

「・・・スモーカー君。何かムカつくこと考えてない？」

「気のせいだろ。それよりさっさと行こうぜ」

「・・・まあいいわ。今は気にしないであげる」

『今は』を強調しやがった。

船はシャボンディ・パークの近くに停泊したので、そのままシャボンディ・パークに向かう。

・・・よくわからん乗り物がいくつもある。
あれに乗るのか？

「何から行きましょうか？」

「・・・イチ、あれに乗りたい」

イチの指差す方を見れば、『ジェットコースター』の文字。

上下差の激しいレールの上を高速で進む乗り物らしい。

正直何が楽しいのかわかんねえが、他の乗り物よりも並んでいる人数が多く、ちょうど下降した乗り物からは大きな歓声と悲鳴が上がった。

・・・悲鳴？

「いいわね。行きましょ」

30分ほど並んで、やっと俺達の番になる。

イチとヒナが前に並び、その後ろに俺が乗る。

すぐに乗り物は動き出し、ゆっくりと坂を登っていく。

頂点まで登ったら今度は急降下するのだろう。

前の客の反応から、落ちる時が楽しいか怖いかのどちらかなんだろうと予想は付いているが・・・。

「きゃあああああ!!」

「っ!?!」

いきなり間近で上がった悲鳴に、思わずヒナを凝視する。

ヒナは目を閉じて、安全バーにしがみ付いていた。

・・・そんなに怖いのか。

イチは、と見れば、目を見開いてヒナを凝視していた。

・・・いきなり水ぶっ掛けられた黒猫みてえ。

ジェットコースター自体には恐怖を感じておらず、ヒナの悲鳴に驚いただけらしい。

だろうな。

ジェットコースターを降りてからもしばらく、ヒナはぐったりとしていた。

「・・・信じられないわ。なんであなた達は平気なの？」

「俺らの能力なんだと思ってやがる」

俺は煙になればあの程度の移動は自力でできるし、イチは黒い手に自分を運ばせての上下移動をよくやっていた。

今更あの程度の動きに何かを感じるはずは無いのだ。

とはいえ、能力など使えないはずの一般人でも楽しんでいる奴らは多い。

ヒナが特別落下に弱いだけだろう。

「・・・納得いかないわ。不満よ、ヒナ不満」

「俺の方が不満だ」

なんで俺がパシリのような真似をしなければならぬのか。

ベンチでぐったりしているヒナはともかく、その横で呑気にアイスを食べっているイチを睨む。

が、当然のように無視された。

・・・まあ自分で買いに行くと言ったイチに反対したのは俺だが。

イチはアイスを食い終わると、その辺で買ったらしい熊の風船？シヤボン玉？をつついて遊んでいる。

おまえヒナが心配じゃねえのかよ。

恨みがましい視線を向けていたら、いきなりイチがバツと振り向いた。

なんだ？

その視線の先を追うが、特に何かあるようには思えない。

「イチ？」

「・・・なんでもないわ。でも・・・、移動した方が、良さそうね」

「今は」なんでもないってことか。

「ヒナ、動ける？」

「え？ええ・・・。だいぶ良くなったわ」

「観覧車に乗りましょう？」

「えっ。ちよ、イチ！？」

イチにしてはめずらしく、強引にヒナを引っ張っていく。
それほどヤバい相手なのか？

辺りを探るが、海賊らしい外見の奴も危なそうな気配もない。
だが・・・。

気配を探るといっ点に置いて、イチは俺よりも遥かに優れている。
海軍全体でも上位に食い込むだろう。

それにわざわざ観覧車を選んだのも、高いところから誰かを探すた
めと考えられなくもない。

ぴつたりと窓に張り付いて、何かを探すように視線を彷徨わせてい
るイチに嫌な予感を感じた。

・・・ちなみにヒナは外を見ないように真ん中で床を見つめている。
高いところも駄目なのか。

「イチ、海賊か？」

ヒナに聞こえないよう、ほとんど音を出さずに問い掛ける。

「・・・。。さあ？わからないわ。偶然擦れ違っただけみたい
だしね。追い掛けてくるならともかく、視線を向けられただけじゃ
あ、ね」

「ふうん・・・」

視線を向けられただけでもこいつが反応するような相手だったのか。そんな奴、今まで将官くらいしかいなかったんだが……。

仮に相手が、准将以上の实力を持つ海賊だとすると厄介だ。俺達だけでは戦力が足りない。

とはいえ、向こうも俺達を見失っているか、あるいは仕掛ける気がないかだろう。

どっちみち今の俺達じゃ何もできねえ。

相手が海賊かどうかすらわかんねえからな。

下手すりゃ俺達と同じように、休暇で遊びに来ただけの海兵の可能性もある。

というかその可能性の方が高いか？

見たことある顔がベンチでぐったりしてりゃ、視線くらい向けるだろうし。

いや知り合いなら声を掛けてくるだろうから、やっぱり海賊……。

……やめた。

ぐるぐる考えてみたが、どうせ結論は出ない。

こういうことを考えるのは苦手だ。

他人が何考えてどう動くかなんて、さっぱり想像もつかねえ。

イチの様子を窺えば、相変わらず窓に張り付いているものの、視線はぼんやりと遠くを見つめている。

ただ単に景色を楽しんでいるだけらしい。

それを確認して席に戻る。

……ヒナはまだ床だけを見据えていた。

「……大丈夫か？」

「これが大丈夫に見えて？」

声はトゲトゲしいが、視線は動かない。

本気でヤバいな、こりゃあ……。

「あー……。まあ、後は下がるだけだからな。半分もねえ」

「……そう」

逆効果だったか。

『まだ半分近くもあるのか』とヒナの顔が言っている。

「……なんで遊園地になんか来たがったんだ？」

高いところ駄目なくせに。

いや実際に乗るまで、自分が高いところ駄目だと気付いてなかったのか？

「だって話を聞くと楽しそうだったんだもの。……イチも乗り気だったし」

「ああ……」

そういやヒナはイチに激甘なんだった。

俺とは違う理由で、イチを一人で行動させることはないだろう。

「たまの休みくらい、遊んでもいいと思うの」

「……そうだな」

つい忘れそうになるが、ヒナの奴は12歳でイチに至ってはまだ9歳。

普通ならば、何も考えずに無邪気に遊んでいても許される年齢だ。

……それを望んでいるかはともかく。

「……次は上に昇らねえやつにするか」

ヒナでも楽しめるように。

「……イチ、疲れたわ」

「あ？」

一通り　　いわゆる絶叫マシンを除いてだが　　シャボンディ・パークを回り、シヨッピング・モールに行くかという時に、唐突にイチが口を開いた。

「イチ、船の待合い場で待ってるわ。買い物にはお兄ちゃんとヒナだけで行ってきて」

表情を見る限り疲れているようには見えないが、半日地味にはしゃぎ続けていれば疲れるだろう。

昨日まともに寝たかもあやしいことだし。

「大丈夫なの？」

「・・・眠いけど、それだけよ」

やっぱりまともに寝てねえのか。

「帰るか。買い物は今度でいいだら」
後半はヒナに問い掛ける。

「どうせ船の時間まで待たなきゃいけないんだもの。二人は行ってきたら？」

ヒナが答える前にイチが口を挟んだ。

「でも・・・。イチを一人にするわけにはいかないわ。買い物ならまた来れるから、気にしなくていいのよ」

「一人じゃないわ。待合い場には海兵が常駐してるもの」
そっぴや、降りる時に見掛けたな。

「でも・・・」

「平気よ。士官学校のバッチを見せれば休憩室に入れてくれるもの。少し休んでるわ」

なんでそんなこと知ってたんだ？

いや今はそれはどうでもいいか。

「本当に大丈夫なんだな？」

「……ええ。本当よ」

「……」

たとえ弱っていたとしてもそれを見せる奴じゃないし、実は結構イチは嘔吐きだつたりするんだが。

でもまあ今回は本当に眠いだけだろうと、熱と脈を計って判断する。

「外に出るなよ」

待合い場に行つて士官学校のバッチを見せると、本当に休憩所に入ることができた。

……その際やたら微笑ましいものを見る目で見られたが気にしない方がいいだろう。

「……わかつてるわ」

「イチ、本当に一人で平気？」

「大丈夫よ。ヒナは楽しんできて、ね？」

少し不自然なほど熱心に買い物をお勧めしているような気もしたが、ヒナに気を遣っているのだろう。

ヒナを促して外に出ようと、した。

「お兄ちゃん」

「あ？」

「ヒナをよろしくね」

「？ああ」

なんだいきなり。

「離れないようにしてね？」

「……」

おまえには言われたくねえと返そうとして、先日のクザン中将との会話を思い出す。

この島には『何か』があるんだつた。

その『何か』を、イチは知っているんだろうか？

「……ああ」

マリンスフォードに戻ったら、調べてみるか。

第27片 シャボンディ諸島(2) side·Smoker(後書き)

なにげにスキンスリップの多いスモーカー。
しかも無自覚。

第28片 シャボンディ諸島・裏(1)

「シャボンディ・パーク？」

そういえばそんなのあったよな、と反射的に聞き返しながら思う。

確かシャボンディ諸島にある遊園地で、魚人が差別されたり人身売買が黙認されていたり天竜人が好き勝手やっていたりマリ胤フォードやマリージョアから近かったり……。

つてちよつと待て。

最後の超重要じゃねえ？

ここからすぐ近くに遊園地があるのだ。

今の今までそのことを忘れていたという事実には愕然とする。

「シャボンディ諸島は知ってる？触れるシャボン玉があるらしいの。見てみたくない？」

「……行きたい」

行きたい行きたい超行きたい！

なんで今まで忘れてたんだろう。

シャボンディ諸島と魚人島は、ONE PIECEの世界の観光スポットなのに！

まあ、魚人島は行くのに危険があるから行かないけど。

しかも時期が悪過ぎる。

大海賊時代が始まって2年。

海賊が大量に雪崩れ込んで、治安は最悪と言ってもいいだろう。

……ん？

もしかしてシャボンディ諸島もか？

ヒナも行った事はなく、伝聞でしか知らないっばいが、それほど危

険がある感じはしない。

海賊は多くても、海軍本部が近いせいで暴れる奴らは少ないのか？
まあそれも、無法地帯に行かなければという注釈が付くのだろうけれど。

「定期便で日帰りができるらしいわ。次の休みに行ってみない？」

「行く」

他の士官学校生が無事に行って帰って来れるなら、オレ達も大丈夫だろう。

でも念のためスモーカーも付いてつてくれるといいなあ、と思いつつじーっと見上げていたら溜息を吐かれた。
なんだ？

「・・・俺も行く」

・・・なんかムカつくこと考えてない？
どう見ても行きたくて行くっていう表情じゃないんだけど。
微妙に浮かれているヒナはそのことに気付いてないっぽい。

・・・あ、そうだ。

「ヒナ、行くのはシャボンディ・パークとショッピング・モールよね？」

「え？ええ。その予定よ」

「他の所には行かないのよね？」

「ええ。どこか行きたい所でもあるの？」

「ううん。聞いてみただけ」

無法地帯に行かないならそれでいい。

海賊や人攫い屋に襲われる可能性がある上、ヒューマン・ショップが存在することにシヨックを受ける可能性がある。

・・・普通世界政府の関係者がヒューマン・ショップの客になって

いて、正義を掲げている海軍がそれを黙認してるなんて思わねえよなあ。

今のヒナとスモーカーじゃ、そのことに反発して海軍を辞めかねない。

そしたら革命軍に入るんだろうか？

・・・有り得そうで笑えねえ。

「じゃあ3日後の朝9時に港に集合ね」

ま、たまには童心に戻って遊んでも構わないだろう。

実際体は9歳だしね。

「・・・うわあ」

思わず感嘆の声が出れる。

海底まで何千kmも根を伸ばす巨木の群れ。

それだけでも非現実的なのに、周りに浮かぶ虹色のシャボン玉が更に現実味をなくす。

あのシャボン玉って触っても割れないんだったよな。

どのくらい強度があるんだろう？

感触は？

乗れるかな？

この海域の気候でしか存在できないらしいけれど、どこまで持ったら割れるんだろう？

とりあえず手近にあるものを捕まえようとしたら、首根っこを掴んで引き戻された。

・・・猫じゃねえんだからさ。

なんだよ？という意味を込めて振り返れば、やたらでっかい溜息を零された。

・・・ムカ。

「タラップから降りろ
めんどくせえ。」

この程度の高さから飛び降りるなんて良くあることで、つか真面目にタラップから降りる海兵なんて重い荷物持つてる奴くらいで・・・。

「いややっぱスモーカー説得する方がめんどくせえ。」

「・・・わかったわ」

「・・・」

了承してやったつてのに額に皺を刻むんじゃねえよ。
信用がねえのか、首の後ろを離したと思ったら手を繋がされた。

・・・こいつ手錠持ってたら手錠掛けてるんじゃねえか？
別に逸れてもスモーカーとヒナの位置はすぐにわかるので、迷子になる心配は無いのだが。

仮になったとしてもこの場所に戻ってくればマリンフォードに戻れるわけだし。

「あら。仲がいいのね」

いや信用がないだけだと思う。

スモーカーに手を繋がれているせいであんまり動けないが、そのうち油断した頃に抜け出そう。

定期便が泊まったのはシャボンディ・パークの近くで、少し歩くとすぐに見えてきた。

おおおおお。

微妙にテンションが上がる。

遊園地なんてこの世界で初めてだもんなあ。

「・・・イチ、あれに乗りたい」
やっぱりジェットコースターは乗らなきゃだろつ。
スモーカーは列に並ぶことにめんどくさそうな顔をしたが、ヒナは
割と乗り気だった。
まあスモーカーにとって、絶叫マシンはたいして面白くないんだろ
うな。

煙になれば自力で似たような動きできるし。

・・・ん？

オレも黒い手使えばジェットコースター並みの移動ができるのか？

・・・。。。

こういうのは乗り物に乗るのが楽しいんだよな！

と自分を納得させたんだが・・・。

物足りない。

速さも高さも物足りない。

前世と同じ技術水準求めるのは間違っていたか・・・。

・・・このレベルでもヒナには恐怖だったらしいが。

ていうかヒナって絶叫マシンダメなの？

ダメなのに乗ろうとした、ていうかダメなことに気付いてなかった？

ぐったりしたヒナの腕をスモーカーが掴んでベンチまで運ぶ。

オレじゃ身長も腕力も足りないからね。

冷たいもの　　アイスかジュースでも買ってこようと思ったらス

モーカーが代わりに行ってくれた。

ラッキー？

・・・あ、熊の風船っぽいシャボン玉売ってる。

欲しいなあ。

でもこの状態のヒナを一人にするのはなあ。

後でスモーカーにたか・・・、じゃない、ねだってみようかなあ？とか考えながら見ていたら、熊の着ぐるみが近寄ってきて一個くれた。

・・・なんで？

・・・まあいいか。

貰えるもんは貰っておこう。

風船を貰った直後にスモーカーが戻ってきてアイスを渡される。

ハニージンジャー味。

・・・なんでこんな微妙な味を選んだおまえは。

あ、でも意外と美味い。

ほんのり甘くてすつきりして最後ちょっとピリツとする。

うま。

ちなみにヒナのは桜餅味でスモーカーのはバニラだった。

自分だけ無難なを選びやがったな。

美味かったから別にいいけど。

アイスを食い終わって手持ち無沙汰になったので、風船をつついて遊ぶ。

どうやって加工してんだろ、これ。

・・・っ！！！！

ぞわつと背が粟立つ。

反射的にその原因を振り向く。

けれど何も見えない。

『圧倒的な強者』の姿は見えない。

「・・・」

殺意も、戦意も、敵意も、悪意も感じなかった。

それなのに、ただ気紛れに向けられたただけだろう視線に、どうしようもない恐怖を感じた。

誰だ？

今この時期にシャボンディ諸島にいるような強者なんて……。

……まさか。

「イチ？」

ハッと我に返る。

そうだ。

今オレは一人じゃない。

「……なんでもないわ。でも……、移動した方が、良さそうね」
気紛れなら、いい。

どれほど強い相手だろうが、戦いさえしなければ負けることもないのだから。

それを確かめるために、とりあえず観覧車に乗り込む。
高いところの方が周りを見やすい。

けれど追ってくる気配も、先程の視線も感じない。
単なる偶然か。

ほっと息を吐き出し、純粹に景色を楽しむことにする。

……しかしヒナは高所恐怖症でもあったのか。
なんで遊園地になんて来たがっただろう？

スモーカーとの会話に聞き耳立てていると、どうやらオレのためだったらしい。

……そんなにわかりやすかったのか……。

……あ。

悦楽混じりの悪意の視線。

相手は複数だが雑魚っぽい。
どうするか……。

ちらつとヒナに視線を向ける。
なんとなくきつきしてる。

買い物を楽しみらしい。

……楽しませてやりたいと、思う。

遊園地では微妙だっただろうから余計に。

「……イチ、疲れたわ」

適当に言いくるめて別行動を了承させる。

待合い場の休憩室で二人が出て行ったのを見送り、オレも行動を起
こす。

ついでなので保管してあった銃を一丁くすねておいた。

しかし雑刀がないのが痛い。

折り畳み式の武器　　ナミのタクトみたいなのを今度作ってもら
うか？

でもオレ雑刀以外の武器の適性低いんだよなあ。

銃も、確実に当てられるのは10m程度だったりする。

まあ無い物を嘆いても仕方ない。

黒い手を使うことになるんだらうなあ……。

……と。

スモーカーとヒナ、それに二人を尾けている10人程の集団。

「……」

尾行に気付けよ、と思わなくもない。

スモーカーとヒナって気配を探るの下手なんだよなあ。

というか気配を探ろうとすることがそもそもないというか……。

まあそれも、今嘆いても仕方ないか。

「わっ」

「うおっ？」

わざと尾行集団の直前を駆け抜ける。

どうなるかは賭だったが、短い相談の後、全員がオレを追い掛けた。きた。

特定の誰かを尾けていたわけではないらしい。

こっちに全員を引きつけられたのならラッキーだ。

面倒が減る。

そのまま走って17番GR 無法地帯に入る。

人目が完全になくなつたところで立ち止まった。

「イチに何か、用？」

「へへ……。おじよーちゃんに友達を紹介してやろうと思ってな」

「友達？」

販売目的っぽいな。

「そうさ。えらーい天竜人さまのお友達さ」

「……………」

奴隷かよ。

「人類売買の対象は、犯罪者か世界政府非加盟国の人間だけに限られているはずよ」

無駄と思いつつ一応言ってみれば、人攫い屋（仮）達は驚いたような顔をした。

その内の一人、まだ理性的な顔をした奴が一步進み出る。

「……よく知っているな。奴隷になるのは犯罪者だけだ。一応はな。……お嬢ちゃんがるのは『お友達』だ」

「焼き印は押されない、と言いたいの？」

「ほ、本当によく知っているお嬢ちゃんだな……。綺麗な、女の子の『お人形』を欲しがっている天竜人様がいるのさ。傷を付けな

「……………」

いったん息を止め、苦しくなる直前に吐き出す。

意識すると恐怖で震えそうになるなら、意識しなければいい。

別名現実逃避。

「……………どうして、イチの邪魔をしたの？」

冥王が助けたのはオレではない。

人攫い屋達だ。

でなければこのタイミングで割り込んでくるはずがない。

……………あ、やっぱ今の無し。

聞かなかったことにしてくんない？

獰猛に笑う冥王を見て、なんで無力な子供のフリをしなかったんだ

ろうかと後悔した。

第28片 シャボンディ諸島・裏(1) (後書き)

アイスの味はスモーカーの独断と偏見。

実在したとして美味しいんだらうか・・・？

さてどうしようかと、目の前の小さな体を見下ろしながら考える。視覚だけに頼るなら、可愛らしい幼い子供だ。

少しぼーっとしている印象を受けるが、絶世の美少女と言ってもいい。

けれどそれだけの子供であるはずは、ない。

人攫い屋との揉め事に手を出したのは、偶然と気紛れ。

たまたまシャボンディ・パークに行った時に、たまたま具合が悪そうな少女を見掛けた。

といっても乗り物酔いをしたただけだろう様子だったので、特に何かしようとは思わなかった。

連れもいるようだし、と白髪の少年と黒髪の子供に視線を移す。

その瞬間、黒髪の少女が振り向いた。

反射的に物陰に隠れたので姿は見られていないだろう。

しかし……。

視線を向けただけで気付かれるとは思わなかった。

ただの子供達ではないらしい。

私に気付いた黒髪の子供は当然、一緒にいた白髪の少年からも警戒している気配がする。

おそらく3人とも一般人ではないだろう。

海賊や賞金稼ぎにしては雰囲気が真つ当過ぎる。

海兵……の見習い、または士官学校生だろう。

あの年齢で士官学校生ならば、悪魔の実の能力者である可能性が高い。

そうだとしても、この時点では何もする気はなかった。

海軍は敵だったが、彼らには彼らなりの事情や正義がある。

無論『悪』としか言えない海兵がいないわけではなかったが、あんな子供、しかも真っ直ぐ過ぎる空気を持っている子供に悪意はないだろう。

・・・悪意がなければいいというものでもないが、今は置いておく。

子供達のことは意識から外してシャボンディ・パークを楽しみ、たまにはシャツキーの店に顔を出すかと13番GRを目指す途中、人攫い屋らしき連中に追い掛けられている子供を見掛けた。

おや？と、その顔に見覚えがあることに驚いた。

今は一人だったが、数時間前に見た人物を間違えるはずがない。

何故一人なのか？

何故追い掛けられているのか？

疑問はあつたがとりあえず、様子確かめようと追い掛ける。すぐに人攫い屋達が子供に誘導されていることに気が付いた。子供は息を切らせもせず、捕まらず、かといって引き離しもしない速度で走り続けている。

・・・囧か？

この先に海兵が待ち構えている可能性が真っ先に浮かんだが、そうではなかったらしい。

人気のないところで子供は立ち止まる。

途切れ途切れに会話が聞こえてきた。

とても子供が話す内容とは思えないものだった。

「・・・・・・・・」

思わず顔を顰める。

これだけ冷静で聡明な子供が、わざわざ人気のないところに人攫い屋の集団を誘導してきた。

それはつまり、殺すつもりなんだということなんじゃないか？

武器を持っているようには見えないが、おそらくは能力者。

その動向に注意していると、会話が途切れわずかに殺気が滲み出す。まずいつ。

「……!?!?」「」

覇王色の覇気を男達だけに当てる。

倒れた男達の向こうに子供が見えた。

私に気付いてなかったのか、子供はわずかに強張った顔をする。

「大丈夫かね？」

無事に決まっていると思いつつ尋ねる。

さて。

この子供はなんと答えるだろうか？

「……」

子供はゆっくりと、長く息を吐き出す。

それだけで緊張は解け、自然体に戻る。

その強靱な精神には感心した。

もしここにいるのが私ではなくロジャーだったのならば、仲間にようとしたらだろうか？

敵ですら平気で仲間を誘った、ロジャーなら。

「……どうして、イチの邪魔をしたの？」

感傷は子供の声に断ち切られる。

思わず顔に笑みが浮かぶ。

『邪魔』と、いささかの迷いもなく言い切った。

それはつまり、私の思惑などすべてわかっているということだろうか？

ピクリ、と子供の右手が動く。
まるで無意識に慣れた動きを繰り返そうとしたかのように。
もしかしたらこの子供には、普段持ち歩いている武器があるのかも
しれない。

「どうして邪魔だと思ったんだ？」

「……わかっていることを聞くの？」

「……」

確かにわかってはいる。

私が動いたのは、子供が殺気を出したタイミング。

またそうでなくとも、倒れている男達よりもこの子供の方が強いと
判断している。

その状態でこの子供を助けるはずがない。

さてどうしようかと、もう一度考える。

別にこの子供に恨みはない。

男達を殺そうとしていたのだから、人攫い屋達の自業自得だ。

ただ……。

ただ、なんとなく、このまま放って置いては危険だという予感がす
るだけだ。

その程度で理由で殺すわけにはいかない。

例えばいつか、『あの時殺しておけばよかった』と後悔するのでも。

「……」

味方でないことははっきりしている。

だが敵だと確定したわけではない。

故に次の行動を決めかねている。

おそらくそれは目の前の彼女も同じだろう。

居心地の悪い沈黙が、辺りに降りる。

「・・・はあ」

停滞していた時間を動かしたのは彼女の方だった。小さな溜息を零し、どことなくぼんやりしていた視線を真っ直ぐなものに変え、私を見据える。さて何を言い出すのだろうか、次の反応を待った。

「・・・。。なっ!?!」

バンツ、とかつて聞きなれた音。

私が瞬きをした一瞬に、彼女は銃を撃ち放つ。

避けようと思えば簡単に避けられる速度と精度だったが、それは重要ではない。

問題は私がその予兆をまったく感じられなかったということ。

見聞色の覇気をもってしても、彼女の心は読めない。

いや、わずかの感情の動きもないまま銃を撃ち放した。

「・・・。。」

それはもちろん、当てる気がなかったというのが最大の理由ではあるだろう。

だがそれにしても・・・。

この子供、人を殺す時にも感情が動かないままなんじゃないか？

体勢を立て直し彼女の方を窺えば、地面に吸い込まれるようにして消えていく最中だった。

すぐに頭のでっぺんまで地面に、闇に沈む。

これが彼女の能力か？

・・・なんとなく、『移動できるだけ』という能力は彼女に似合わない気がした。

他にも使い道のある能力なのか、それとも能力以外を攻撃手段にしているのか。

「・・・シヤツキーに聞いてみるか」

彼女はいずれ必ず有名になる。

もしかしたらもうすでに。

それが名声なのか悪名なのかは、わからないが。

第30片 シャボンディ諸島・裏(2) (前書き)

今までで最短。

第30片 シャボンディ諸島・裏(2)

し、死ぬかと思った。

2重の意味で。

銃で冥王の注意を逸らした隙に、足元に闇で通路作って抜け出してきたんだが……。

冥王マジ強え。

いやまあ単純な強さならガープとたいして変わらないのかもしれないが
いが ガープは中将のくせに大将達よりも強かったりするが

敵視されているかどうかで受ける威圧感は全然違う。

敵視というか危険視か？

『敵だとは言い切れないが敵になるかもしれないな』と考えている
のがわかった。

正確には『わからせられた』。

警戒しているとわざと知らせて、それに対しオレがどう反応するか
確かめていた。

・・・海賊のくせに頭使う奴は苦手だ。

いやルフィやガープみたいに本能で動く奴らよりマシだが。

「・・・つぶ」

うっわ。

まだグラグラする。

船酔いしたらこんな感じなんだろうか？

闇の通路を移動する際、体の中をグチャグチャにメチャクチャに掻
き回されるような感触があった。

佐助とかお市とかなんで平気なんだ？

闇属性への親和度とかか？

どっちみち二度と使いたくない。

冥王の相對していた時とは違う意味で死ぬかと思った……。

「……………」

グルングルン回っている視界を堪えて辺りを窺う。

近くの木には39番GRの文字。

……もうちょっと船着場に近い場所がよかった。

まあ方向が合っただけマシか。

思い通りの場所に出れないなんて、やっぱりこれ使えないな……。

10分ほど休めば、それでも少しは落ち着いてくる。

だりいけど早く戻らないと。

スモーカーとヒナに抜け出したのバレるとめんどくせえ。

第30片 シャボンディ諸島・裏(2) (後書き)

めずらしく弱っている主人公。

第31片 夏休み？ side・Hina（前書き）

しばらく続きの話になる予定です。

第31片 夏休み? side・Hina

「夏休み、ですか?」

ボルサリーノ中将の言葉に、思わず聞き返していた。

「そうだよ。休暇向けのいい島があつてね。ヒナちゃんも、お友達と一緒に行ってくるといいよ。」

「……ですが」

「休むのも仕事のうちだよ。最近訓練頑張り過ぎだからね。たまには休んで気分転換するといいよ。」

「……はい」

反論しようとしたことを先回りして封じ込められてしまった。

完全には納得できていないのだけれど、ボルサリーノ中将の言うことにも一理あるのかもしれない。

けれど友達って、一緒に出かけられるような友達は士官学校生しかないのだけ。

彼女達にも訓練や勉強があるだろうし……。

「ああ、クザンとサカズキのこの子も一緒に行くらしいよ。」

「あら。そうなんですか」

結局いつもの3人になるのね。

「ど、どうということなの……?」

「『サバイバル訓練だつてことだろ? (でしよう?)』」

「なんであなた達はそんなに落ち着いてるのよ!」

休暇といって連れてこられたのはどこからどう見ても無人島で、船員は私達を降ろすと『2週間後にテストがある』とだけ言って船を出してしまった。

能力者である私達には、いえそうでなくともボートすらないこの状態では島から出ることはできない。

「あなた達知ってたの!？」

休暇というのが嘘だって。

「知ってたわけじゃねえよ。そろそろだろうと思ってただけだ。まあ本当に休みなのと半々くらいかと思ってたが・・・」

「サカズキ中将が休みなんて言い出すはずないもの」

「・・・ちよつと待って。二人に言いたいことがたくさんあるわ。少し整理させて」

どうやら休暇だと完全に信じていたのは私だけのようだった。

「まずスモーカー君。『そろそろ』って何が？」

「あ?・・・まあ『これ』が終わればわかんる。誰かに教えられたら意味ねえよ」

「・・・納得いかないけどまあいいわ。でもなんで!訓練の可能性があるって教えてくれなかったの!知ってたらそれなりの準備をしたのに!」

休暇だと思ってるくなく荷物を持ってこなかったのが悔やまれる。

「言っただろうが。確立は半々だと思ってたってな。それに、もし本当に訓練なら私物は没収されると思ってたしな」

「・・・」

「遭難すると思っただけで遭難する奴なんて滅多にいねえ。身一つで投げ出される奴の方がよっぽど多い。・・・そもそも準備させねえために『休暇』なんて話が出たんだろうが」

「・・・つまり、私が準備していても、荷物を没収されただけだったと言いたいよね?」

「そついうこつた」

「・・・」

言いたいことはわかる。
けれど納得できないのはなんでかしら？

「・・・イチが私に言わなかったのも同じ理由？」

「だいたいは、そうね」

「違うところは？」

「イチだけ別の訓練か任務に行かされる可能性の方が高いと思ったから、かしら。今更イチには必要のない訓練だし、ね」

「・・・」

イチもスモーカー君も、この訓練が『何のために』行われるのかわかっている。

私にはわからない。

・・・悔しい。

「・・・ところで、イチの荷物が妙に多い気がするのだけど。というか武器まで持ってきたのね」

布で覆ってはいるものの、特徴的な薙刀の形は見間違えようがない。

「一応、いろいろ準備をしてきたの。島に着く前に取り上げられるかと思ったのだけど・・・。保険のつもりかしらね」

「保険？」

「それよりも移動しましょう？いつまでもここに居ても仕方ないわ」
「・・・ええ」

思いつ切り誤魔化された感じはするのだけど、確かにいつまでも海岸に居ても仕方がない。

「まずは水場か？川でも探すか？」

「そうね。『難易度』はそんなに高くないはずだし、基本通りに行動すればいいと思うわ」

「ふうん・・・。つかおまえその荷物持てんのか？」

イチの荷物は大きい。

キヤスター付きだから街中や船の中では運ぶのに問題はなかったよ
うだけれど、砂浜や森の中では持ち上げて運ぶしかない。

「平気よ。持てる分しか持ってきてないわ」

「ならいい」

「え、ちよつと！持ってあげないの!？」

自分の荷物だけ持って歩き出したスモーカー君に思わず声を上げる、
が……。

返ってきた視線には、呆れの色が含まれていた。

「あのなあ、いくら訓練つたつてこれは『サバイバル』だぜ？ど
んな動物がいるかわかんねえし、何が起きるかわかんねえ。イチに
したつて両手が塞がってても攻撃できる手段を持ってなけりゃ、こ
んな荷物持つてこねえよ」

「……………」

それはつまり、先頭で不測の事態に対応するスモーカー君は身軽で
いる必要があるということだ。

「……悪かったわ」

間違っていたのは、私だ。

第31片 夏休み? side・Hina(後書き)

明日スモーカー視点アップ予定。

・・・なんかヒナの奴が落ち込んでんな。
上官に騙されたからだろうか？

だがまあこれに関しては、ヒナの運が悪かったとしか言いようがない。

『最近訓練ばつかったから遊んでおいで』と言ったとして不思議がないのがボルサリーノ中将だからな。

クザン中将も言いかねねえが、サカズキ中将みたく絶対に言うはずがない性格をしていればヒナも気付けただろう。

・・・というかサカズキ中将がどんな顔して『夏休み』と言ったのか気になる。

それはともかく、『この時期』に『サバイバル訓練』ねえ。

十中八九、というか確実にテストだろう。

実践に出すかどうかの。

そうなると思えば意味のないテストなのだが・・・。

まあそこら辺は、単純に訓練の一環なのだろう。

正式な海兵になっても、定期的に野外訓練はやってるらしいしな。

「・・・小屋？」

海岸を歩いて川を探し、その川沿いに上流に向かって湖を見つけた。その湖の近くに、古びてはいるが小屋が建っていた。

無人島のはずなのに。

「・・・罨か？」

「単純に初心者向けってことじゃないかしら？それか前に訓練をしていた人が残したものか」

「ああ・・・」

そこまで裏を読まなくてもいいらしい。中に入ってみたが、本当に壁と床と屋根があるだけといった小屋で、畏である可能性は低いだろう。

「とりあえずは水と食料かしら？」

言いながらイチがでかい荷物の一つを開く。

ポンポン出てくるのはアルミ製の鍋、フライパン、食器、その他諸々。

他にもナイフ、ロープ、ブランケット、小型の鉋、固形燃料などが見える。

・・・サバイバルになるのかこれかと思うほどの充実っぷりだった。

「・・・おまえ、こうなるって知ってたのか？」

「確信はなかったわ」

確信がねえのにここまで準備してきたのかよ。

「こっちの荷物は？」

本当に休暇だった時のための荷物か？

「開けてもいいけど、触らないでね」

「・・・」

なんとなく嫌な予感を覚えたので中身を確認する。

見えたものに思わず沈黙した。

「・・・」。おい、2週間後のテストって」

「内容は知らないわ」

知らなくても予想付けてんじゃねえかよ。

「？何の話をしているの？」

「・・・いや、なんでもねえ」

ヒナが不思議そうな顔をしているが、まだ言わない方がいいだろう。

イチの予想が当たるとは限んねえし、当たらない方がいいし、当たっていたとしても『これら』を使うのは手段を選らばなさ過ぎだ。……まあイチが手段を選んだことなど今まで一度もなかったりするが。

「そう……」

？

やっぱなんかヒナが暗いな。

普段だったら噛み付いてくるのに。

「ヒナ？具合でも悪いのか？」

「えっ？……どうして？」

「は？自分で気付いてないのかよ？」

あからさまに覇気がねえつてのに。

「……なんでもないわ。それより食料を取りに行きましょう！」

「あ？」

その提案自体に反対はしねえが、今無理をすると2週間保たねえぞ。

「いいから行くわよ！」

「ヒナ、待って」

「え？きゃっ！」

「……ナイフ放り投げるなよ」

いくら鞘に入ってるからって。

「しばらく貸しておくわ。予備だけど、手入れはちゃんとしてあるから大丈夫よ」

「……ええ。ありがとう」

「お兄ちゃんも要る？」

「いや……。ああやっぱさっきの鉈貸してくれ」

ナイフは持っているが、鉈の方が便利そうだ。

「はい。気をつけてね」

「?おまえは来ねえのか?」

「食事の準備をしておくわ」

「・・・出歩くんじゃないぞ」

「ええ」

「・・・」

不安がないわけではないが、二手に分かれた方が効率がいい。
ヒナと一緒にジャングルに足を踏み入れた。

第32片 夏休み改めサバイバル訓練 side・Smoker(後書き)

明日主人公視点をアップ予定。

第33片 サバイバル訓練・裏(1) (前書き)

・・・訓練までいきませんでした。

第33片 サバイバル訓練・裏(1)

「・・・夏休み？」

思わず胡乱な目で赤犬を見上げてしまったのは仕方ないことだろう。あからさまに胡散くせえ。

というか普段とキャラ違い過ぎる。

「クザンとボルサリーノの発案じゃあ。あの二人のこの学生も一緒に行くけえ、楽しんできい」

「・・・」

確かにあの二人なら言い出しそうな気がしないでもないが。

赤犬の様子を観察する。

じっとオレの目を見つめ、不自然なほど瞬きをしない。

手は軽く膝の上に置かれていて動かない。

人が嘘を吐く時に代表的な癖は『視線を逸らす』『瞬きが増える』

『手で口元を覆う』など。

それを信じるなら赤犬は嘘を吐いていないことになる。
が。

「・・・」

こいつ人が嘘を吐く時の癖を知っていて、そうならないように気を付けてるだけだな。

オレもそうだから、同じ奴はなんとなくわかる。

そもそも普段はこんなくだらない用件なら書類整理をしながら話するのに、今日に限って真面目な顔でオレに相對している時点で嘘だと
言っているようなものだ。

・・・しかし『休暇に適した島』ねえ。

無人島に放り出される可能性が高いかな？

「・・・期間は？」

「半月じゃ」

移動を除いて2週間ってところか。

まあ普通だろう。

・・・しかしなんでオレとスモーカーとヒナの組み合わせなんだ？
普通は自分の隊の先輩、というか経験者と組ませるだろう。

それにわざわざ『夏休み』という名目で連れて行くということは、
準備をさせたくないということ。

・・・何が目的だ？

「・・・わかりました」

とりあえず了承して赤犬の前から下がる。

今ここで考え込んでいても答えは出ないだろう。

というか赤犬から情報が引き出せるとは思えない。

どうしよっかなと、寮の厨房に向かいながら考える。

正攻法は青雫か黄猿に探りを入れることなんだろうけど、あの二人
はあの二人でまともな情報は漏らさなそうだよなあ。

というか今までもくに交流無いのに世間話に行ったら怪しいだけ
だ。

特に何も思い付かないまま厨房に着いてしまった。

・・・まあいいか。

顔見知りになっている食堂のおばちゃん達に挨拶して手伝いを始める。

「全員じゃないみたいなのよねえ。小さい子が多かったような・・・。ああそうだわ。海軍に初めて入った子がみんな行ってるみたいなのよ。上の方の人に勧められて」

「・・・そう」

『海軍に初めて入って4ヶ月くらいの奴が全員行かされている』
そういう奴らを対象にしている訓練、ねえ・・・。

いったいなんだ？

しばらく考えてもわからなかったので、すっぱり諦める。

下手に考えるより過去の記録探った方が確実だろ。

・・・しかし、妙なところ（食堂のおばちゃん）から情報漏れてきたな・・・。

海軍というのは、意外に書類が多い。

手配書を始めとする海賊や犯罪者の情報、海兵の簡易プロフィール、航海日誌、武器や消耗品の購入記録、給与情報などなど大量。

・・・金関係の書類が大雑把過ぎて愕然としたがそれはさておき。その大量の書類の中に訓練記録もある。

『保管庫』と一応の名前がついている部屋に向かう。

すでに赤犬の使いで決済済みの書類を何度か運んだことがあるため迷うことはないし、疑われることもない。

訓練記録の置かれている棚の前に向かう。

・・・明らかに他の棚より量が少ない。

他の書類と違ってチエックされることがないから、めんどくさがって書かなかっただらうな。

海軍って強ければ偉いみたいなのところがあるからなあ。

書類関係を嫌がる将官が多い。

まあセンゴクとかおつるさんみたいに異様にきつちりしている人間もいるのだけど。

というわけで誰か一人くらいなら真面目に書類に残しているだろうと、過去の訓練記録を漁り始めた。

・・・ふうん？

単純に遭難した時の訓練という意味合いもあるが、重きを置いているのは実戦に耐えられるか、ぶつちやけ人が殺せるかのテスト、ねえ・・・。

スモーカーとヒナはそろそろ実戦に出るかと思っていたので想定内。けどオレはすでに実戦出ただけど？

オレだけ別の訓練が任務に行かされるか、実はスモーカーとヒナの試験官役か、何も考えずとりあえず全員行かせているのか。

・・・最後の可能性が高い気がして嫌だなあ。

とりあえず無人島に放り込まれても大丈夫な準備をしておこう。

それに・・・。

最終日のテストの、準備もな。

第33片 サバイバル訓練・裏(1) (後書き)

元現代人なので、情報は武器。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6413s/>

海に咲く闇の花

2011年8月1日00時14分発行